映画に宛てたラブレター

２０１０～１１年版

天見谷行人

ようこそレッドカーペットへ

ようこそ、レッドカーペットへ。映画が大好きな、あなたのご来場を心からお待ちしておりました。
えっ？　最近、映画館に行ったことがない？　結構ですよ。大いに歓迎致します。これから映画の魅力をご一緒に探ってゆきましょう。
この本は、２０１０年１月１日から２０１１年１２月３１日までに私が映画館で鑑賞した、洋画３９本、邦画３７本を収めた映画のレビュー集です。各作品、私の独断と偏見による５点満点の採点をつけてみました。レンタルビデオ店でDVDを借りるときのご参考にでもして頂ければ嬉しいです。
あなたのお好きなように、どこからでもお読み頂けるように、一作品一ページにレイアウトしてみました。
また、予告編のアドレスも掲載致しました。コピーしてお使い下さいませ。
巻末には、２０１０年～１１年の映画マイベスト１０も選んでみました。
ご案内役はわたくし、天見谷行人が務めさせて頂きます。
ではごゆっくり、映画の森をご散策下さい。また、映画館でお会いしましょう。

狼の死刑宣告

２０１０年１月１日鑑賞

＊＊＊緊迫感の描写に一見の価値あり＊＊＊

ケヴィン・ベーコンについては「アポロ１３」でとても気になった俳優さんで、僕のお気に入りの人だ。
シャープで理知的であり、かっこいい。この人なら相当女にモテるだろうと思わせた。
「アポロ１３」ではNASAでプレイボーイとしても有名な宇宙飛行士役を演じている。
その人が本作では一家の父親役をどう演じるのか？　ちょっと興味が沸くのである。更にはYahoo映画レビューでも高評価。
物語の冒頭はよくあるファミリードラマのようだ。温かな４人家族を描き出している．
子供は二人。どちらも男の子である。兄はスポーツをやっていて結構いい線いっている。もう少しでスタープレーヤーだ。対照的に弟はおとなしく、いつも兄からからかわれている。
このあたりはどこにでもある一家族の平和的なストーリーだ。
子供同士の兄弟喧嘩だってファミリーにありがちなことだ。
それこそ、その小さなトラブルをどうやって解決していくのかが、父親や母親にとっては楽しみのひとつになるだろう。
そう言う家族なのだ。ごくありふれた、、、
だが、ある日、平穏な日常は突然終わりを告げる。父と兄はギャングに遭遇した。兄は無惨な姿で殺されてしまった。
やがて穏やかな生活の歯車の組み合わせは、どんどん外れていってしまうのである．
父親は変貌する。彼はのちに復讐の鬼となる。もっとすごいのはその復讐劇のスリリングな表現方法なのである。
「ノーカントリー」をご覧になった方は分かると思うが、あの無慈悲な殺人鬼の主人公のように実に冷静に、憎いギャング達をひとりづつ仕留めていくのである。
相手の若いチンピラ達は当然銃を持っている．中にはマシンガンで武装しているものもいる。
それらと相対する父親。彼は、復讐のため自らの髪の毛を剃り上げ変身してアジトに乗り込んでいく。
このあたり、あの名作「タクシードライバー」の主人公のようでもある。
「タクシードライバー」でも、主人公のトラビスは突然キレて、モヒカン頭になってしまう。
マーティン・スコセッシ監督は、あの一人の孤独で小市民的なタクシードライバーが妄想の末に、とうとう精神的なレッドゾーンに入ってしまうのを描き出している。
また、本作にはスティーブン・スピルバーグ監督の初期の傑作「激突」の雰囲気も感じられる。
あの作品も主人公がただ、怪物の様なトラックにひたすら追いかけられるという不条理な話なのである。そこには理由もなく、ただ追いかけられると言う状況に追い込まれた、主人公の恐怖の心理状態が見事な映像で描かれている。
本作のハイライトも、復讐という局面に、まさに命がけで没入してしまう、全く自制など効かな

い「殺すか、殺されるか」という、ぎりぎりの心理描写とアクションが素晴らしい緊迫感で描かれている。
それはケヴィン・ベーコンと言う知的で抑制の利いた俳優が、覚悟を決め、復讐の鬼と化した、捨て身の父親役を演じているからこそなのだ.
もしこれがブルース・ウィルスなら、単なるダイハードの亜流になっていたことだろうし、ラストはフランクシナトラのクリスマスソングでも流しながらハッピーエンド（これってダイハード１ですね。）になっていたことだろう。本作はすでに中盤当たりからハッピーエンドに終わらない状況に主人公が追い込まれていくのが分かる．そこに一個の人間ドラマがある。とてもシンプルで的をしぼった、贅肉のない切れ味鋭い作品である。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ジェームズ・ワン
主演　　ケヴィン・ベーコン、ケリー・プレストン
製作　　２００７年　アメリカ
上映時間　１０６分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=1i12wuLtW5g

２０１０年１月２４日鑑賞

＊＊＊この星に住んでいいですか？＊＊＊

以前観た「皇帝ペンギン」の時もだったけど，よくこんな映像が撮れたものだと，いつもながらカメラマンの熱意や勇気に感心してしまう。

本作ではサメと寄り添うようにして泳ぐカメラマンにも，驚かされるが，巨大なクジラのすぐそばで撮影している様子は圧倒的だ。

クジラがその気になれば，尾びれの一振りで人間などオダブツである．

ほんとに人間というのはちっぽけな動物だな，とあらためておもうのだ。（だからといってぼくは過激な反捕鯨原理主義に共感しているわけではない）

この作品は地球の約７割を占める海をテーマに、そこに生きる生物達の営みを捉えたドキュメンタリーである。

映像を見ていると，やはり愛嬌のある動物達に目がいってしまう。
オットセイの、のんびりした昼寝姿に癒され，海イグアナの怪獣の様な顔に妙なユーモラスを感じる。神秘的なクラゲの大群も、幻想的な雰囲気があって僕は好きな光景である。

海や陸に限らず生き物達は自然の定めた法則によって生かされ，そして死んでいく。
そこには「見えざる神の手」とでも言える様な絶妙なバランス感覚がある。

唯一そのバランスを崩しているのは、言うまでもなく人間と言う地球上に住むひとつの生物種である。

　最近僕はこの「バランス」というキーワードが気になって仕方がないのだ。

人間の体の中も、当然この微妙なバランス感覚で生命を維持している訳だし、その人の行動、仕事と私生活のバランスなど，いろんな面でバランスというのは重要だ。

特に最近うるさいほど言われる環境問題は、まさに人間が人為的に地球環境のバランスを崩してしまったことによるのだろう。

本作の中で唯一、違和感を覚えた部分がある。

「地球を守る」というナレーションが入るのだ。

言うまでもなく地球のバランスを崩したのは人間である。

ならば人間はその責任を問われている立場であると思うのだ。人間は加害者なのである。

「地球を守る」というコトバにはそのなかに、「地球の主人公は人間である」という自負が含まれている。思い上がりも甚だしい。

地球上のルールを破ったのは，人間という生物だけである。

すでに他の動物達は地球上に棲むためのルールを守り，地球システムを守ってきた。

人間はそろそろ気づくべきだ。

もっと地球上生物の一員として「住まわせてもらっている」という立場をわきまえるべきだ。

この作品に登場する海洋生物たちにきいてみたいものだ。
「ボクタチは地球に住んでもいいですか？」と。

　きっと嫌な顔されるだろうけどね.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆

映像　☆☆☆☆☆

音楽　☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ジャック・ペラン、ジャック・クルーゾ

製作　　２００９年　フランス

上映時間　１０３分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=S9mlOlzK-nU

Dr.パルナサスの鏡

２０１０年１月２７日鑑賞

＊＊＊変態ワールドはのだめだけじゃない＊＊＊

テリー・ギリアム監督って幸せな監督さんだと思う。

　主演のヒース・レジャーの急逝と言う，回復しがたいアクシデントに見舞われても，それを助けてくれた俳優達がいたのだ。

　それにしても、よく，まぁ，こんな個人的趣味のセカイを映像にして，それを，おもしろいと言って参加する俳優達もそうとうな物好きな連中だ。

　本作の目玉はなんと言ってもジョニー・デップが出演しているということだ．他にコリン・ファレル、ジェード・ロウ、と実に豪華キャストである．

　舞台は移動見世もの小屋の住人達と、そこに仕掛けられた鏡の向こう側で起こるファンタジーという内容だ。

はっきりいってストーリーは，よく分からなかった。

多分監督自身でさえストーリーはどうでもよかったのではないかなぁ？　おもしろいと思ったイメージを映像化して、編集で繋げたという雰囲気の映画なのだ。

だから観客はついていくのにちょっと苦労するのである。

　ズバリ言ってしまえば「のだめ」の変態ワールドの豪華版といえばいいだろうか。さすがにマングースはでてこないけど，不思議なゴンドラや、巨大なハイヒールがでてきたり、あるいは「アバター」を彷彿とさせる様な秘境が出現したりする。

変幻自在なイメージの遊戯とイタズラ心。

突然おっさんの警官達がハレンチなダンスを踊ったりするのも、ああ，この人はあの「モンティ・パイソン」のナンセンスを今だに受け継いでいるのだなぁと納得。

断片的な印象しか残らないのだけど，こういう形で映画に出来るというのはやはり，いい仲間達がいるからなのでしょうね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　テリー・ギリアム

主演　　ヒース・レジャー、クリストファー・プラマー
　　ジョニー・デップ
製作　　２００９年　イギリス／カナダ
上映時間　１２４分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=WgLJ29Uei4M

キャピタリズム マネーは踊る

２０１０年１月２８日鑑賞

＊＊＊マネー主義のたそがれ＊＊＊

２０１０年１月、日本航空が破綻し，企業再生への道を歩み始めた。そこで働くパイロット達はまだ従来の給与を得ていることだろう。企業が，破綻しても政府から多額の公的資金を与えられOB達にさえ年金は支払われる。（もちろん減額はされたが）かたや，アメリカ合衆国では，経営が傾いている航空会社のパイロット達はハンバーガーショップでアルバイトをしながら片手間にジェット機を飛ばす。どちらもあまりにも両極端だ。

　アメリカ合衆国に、資本主義などあるのだろうか？あるのはマネー主義だけなのではないだろうか？

「お金さえあればシアワセ」

　アメリカ合衆国では「幸せ・社会的地位・権力」の尺度をお金で数値化できると考えている人が多いのは確かだ。「金持ち」だから「エラい人」なのである。とてもシンプルで単純な発想で成り立っているのだ.

　あの国では勝ち続けることだけが生き延びる道だ。

　だからこそ，金持ちはさらに金持ちになろうと不断の努力を強いられる。

　その努力の賜物のひとつがサブプライムローンである。素人には絶対分からないようにする、という目的で開発された金融商品だ。

　これは毒入りまんじゅうである.

　だが、これを売りまくってアメリカの金融界は自己崩壊した。

　株式等、ひとつの市場が抱えている富の総額は決まっている．これを分配するのか？それとも誰かが独り占めするのか？　どちらも合計すれば総額は同じ金額になる。これをゼロサム社会と言う。

　だから，誰かがとんでもなく裕福であるということは，その裕福さは、貧しい人々から更に金をむしり取った結果なのである。

「負ける奴が悪いのさ！！」というのがアメリカのルールだ。

　負けた人々は借金を背負う。

　家のローンが払えない。

　警官がやってくる。立ち退けと強制執行される。

　警察は金持ちの味方のように見えてしまう。

　家は売りに出された。

　人々は路頭に迷う。

　「これは何かおかしいんじゃないか？」と気づき始めた人々がいる。そのひとりがマイケル・ムーア監督である。

マネーにまつわる、何とも理不尽なエピソードを交えながら、このいびつなマネー主義の世の中をわかりやすく映像化している。

　マネー至上主義の先にある姿は、全ての人々に競争させ、格差を生じさせる社会である。
　人が幸せに生きていくには，そんなに多くのお金がいる訳ではない、と僕は思う。
キリストには申し訳ないが，人間、パンと水があればなんとか生きていけるものである。
　今，僕はデンマークという国を１つの具体的な目標としてセットしていいのではないかと思う。
食料自給率３００％、エネルギー自給率１００％、幸福度ランキング世界第一位。
　日本で天ぷらそばを食べると、その８割は海外の原料で出来ているそうである。
食料自給率が極めて低いのに，更に減反政策を進めていると言う，訳の分からない国、日本。
「オニギリ食べたい」と老人が餓死する先進国、ニッポン。
首相が交代すれば、揉み手をしながら、ニコニコと真っ先にアメリカ合衆国にご機嫌伺いに飛んでいく国、ニッポン。
マイケル・ムーア監督．今度は，この不思議の国、日本をテーマにドキュメンタリーをつくってみませんか？
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　マイケル・ムーア
主演　　マイケル・ムーア
製作　　２００９年　アメリカ
上映時間　１２７分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=VUJjLTNcrmE

ミレニアム ドラゴン・タトゥーの女

２０１０年２月４日鑑賞

＊＊＊タトゥー鼻ピアス女優の体当たり演技に注目＊＊＊

特筆すべきは新人女優ノオミ・ラパスだ。彼女を見るだけでもこの映画を見る価値はあると思う。聞くと，まだ映画は本作が２作目で，しかも特別に演技の勉強もしたことがないとのこと。

よくこんな女優さんを見つけてきたものだ。

本作では，エロス，バイオレンス，アクションなど、女優として、生身の人間として、相当ハードな撮影をこなしていて、失礼ながらまさに「体当たり」の演技なのだ。

僕の最初の印象では、もうすでに相当なキャリアを持つ女優さんというイメージだった。これは他の女優さんも安心していられませんよ。探せばいるもんだねぇ。こういう掘り出し物の女優さんが。

全身に入れ墨を施し，スポーツバイクを乗り回し、鼻にピアスまでしている天才ハッカー役だが，映画の終盤，あっというほど美しい女性に変身するのでそれも楽しみ。

４０年前、こつ然と姿を消した資産家一族の娘。彼女の行方を探してほしいと頼まれた著名なジャーナリストのミカエル。

場所は北欧スウェーデンのストックホルム。

彼は事件の起きた孤島近くの廃屋に住み込み、事件の手がかりを探り始める。

やがて、ミカエルのコンピューターに誰かが侵入しているのが分かった。それが若き天才ハッカー、リスペットだった。

やがて二人はこの難事件の解明に、力を合わせることになる。

スウェーデンというと、福祉の行き届いた理想的な国家だと思うけれど，その国を舞台に描かれる犯罪、事件にとても興味をそそられた。映画の中で描かれるエキストラのチンピラ風の若者の姿、それに、金や女への欲望にまみれる男達の描き方。

先進的な福祉国家と言われる国でも、そんな人間の本性というものは変わらないものだなぁと思ってしまう。

物語は大変緻密な構成なので，一時も目が離せないし，ましてや僕のように前日寝不足で前半部分ウトウトしちゃたりすると，もうストーリーから置いてけぼりを食う。

それでも後半なんとか，気を取り直して見ていると，これが並の作品じゃないことは容易に分かる。

映画作品として，サスペンス劇としてとても刺激的な作品なのだ。もう一度見直してもいいと思ってしまう秀作。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ニールス・アルデン・オプレヴ

主演　　ミカエル・ニクビィスト、ノオミ・ラパス

製作　　２００９年　スウェーデン／デンマーク／ドイツ

上映時間　１５３分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=NzGlOsZLQ9A

２０１０年２月６日鑑賞

＊＊＊嗚呼，罪深きその美しさよ！！＊＊＊

ラブシーンが多いです．それも結構ハードです．

　このあたりはラテンの血なのでしょうか。激しく狂おしく愛し合う男女の姿。

　それを何とも美しく映像化しております。

　また，ペネロペ・クルスのなんと言う美しさ。まるでかつてのオードリー・ヘップバーンの様な可憐な表情まで見せてくれます。

　この映画、実にいろんな要素を含んでおりまして，はっきり言って、てんこ盛り状態。

　悪く言うと軸足がぶれまくっている訳です。

　ペネロペ・クルスの美しさをプロモーションビデオ風に撮ったかと思えば，ストーリーの方はドロドロの恋愛感情を描き出し，終盤にかけて、これってサスペンスだったの？と思わせる有様です。

　富豪の愛人であるペネロペ・クルスは、もうそろそろこの初老の男と縁を切りたいと思っている。

　そこに，映画のオーディションの話。彼女はその美しさから見事ヒロインに抜擢されます。

　しかし，監督もやはり男なのでありまして、とにかく彼女を抱きたい訳ですね。フフフ。このあたりは何とも下世話な感じがしてしまいますが……

それでも監督とヒロインは恋に落ちます。

　富豪の方としては、彼女は「所有物」です。それが映画の撮影？冗談じゃない！

　そこで自分の息子に撮影現場での彼女の様子を、ビデオカメラで撮影させるのです。

撮ったビデオは自宅でじっくり検分する訳です。自分の所有する女が他の男とデキていないか、をチェックするために。

　このあたり，何とも陰湿ですな。また，それをストーリーの中に盛り込むこと自体、この映画、相当バランス感覚が危うい感じです。

　終盤にかけてお話は悲劇的な結末を迎えるのですが、もう，このあたりストーリーが破綻しかけます。

　それを救っているのはなんと言ってもペネロペ・クルスの美しさ。この作品はその美しさを鑑賞するだけで充分だったのかもしれません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ペドロ・アルモドバル

主演　　ペネロペ・クルス、ルイス・オマール

製作　　２００９年　スペイン

上映時間　１２８分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=Gy_oDdF9aNg

２０１０年２月１３日鑑賞

＊＊＊あなたは奇跡を目撃する＊＊＊

時に芸術は人生を変える力を持っている．映画ももちろん芸術の１つである。しかし，芸術と呼ぶに値する映画作品がどれだけあるだろうか？

　この作品はまさに芸術という表彰台にふさわしい映画だ。これは偉大な作品として後世に語り継ぐほどのインパクトを見るものに印象づける。

　クリント・イーストウッド監督は今までに数多くの「秀作」、「傑作」を生み出してきた。そして彼はついに「偉大な」作品に到達したのだ。

　これは南アフリカ共和国の大統領、マンデラ氏と、９５年ラグビー・ワールドカップ南アフリカ大会での出来事を描いた物語だ。

　ネルソン・マンデラ氏は政治犯として２７年の獄中生活を強いられた。彼の政治力、発言力を恐れた人々によって、不当に２７年間も牢獄に閉じ込められたのだ。

　彼は出所後、大統領に就任した。南アフリカ共和国初の民主的選挙によってである。南アフリカ共和国はご承知の通り、アパルトヘイト、人種隔離政策を長きにわたって行ってきた国である。今まで人口では少数派ながら、国を支配してきた白人達。

　対照的に大多数の貧しい黒人、有色人種達。

　マンデラ大統領は、この国を１つにまとめる方法はないものか？　皆の心をひとつにするものは何か？　を探していた。

　折しも、ラグビー・ワールドカップが，南アフリカ共和国で開催される事が決まっていた。

　マンデラ大統領は決意する。

「ラグビーだ」

　スポーツの政治利用と言われようが、なりふり構っていられない。今、国の心を１つにするにはラグビーしかないのだと。

　この作品で、ネルソン・マンデラ大統領を演じるのが名優、モーガン・フリーマンである。現在映画界において，最も偉大な黒人俳優である、と僕はおもう。

　黒人に映画の扉をこじ開けた最初の俳優はもちろん、シドニー・ポワチエである。そのあとの道を更に拡大させた功労者が，デンゼル・ワシントンであり，モーガン・フリーマンだ。

　僕は彼が演じた「ドライビング・ミス・デイジー」の名演技が忘れられない。

　今回も感動的な演技を見せてくれている。

　また、南アフリカ共和国のラグビーチームの主将役がマット・デイモン。

　彼はこの作品で、明らかに俳優としてのステップをまた一段登ったと思う。彼はきっとこの作品，そしてモーガン・フリーマンとの共演を実現させた、クリント・イーストウッド監督に感謝する事だろう。彼の俳優人生にとって、きっと宝物の様な作品になる事は間違いない。

　さて，クリント・イーストウッド監督の筆致は，今回の作品でも実に冴え渡っている。

　朝，マンデラ大統領は、いつも決まった時間にベッドから起き上がる。そして自分の手で丁寧

にシーツを直すのだ。
　この人の性格をよく表すシーンだ。もしかすると、長い獄中生活から、こうした習慣がついてしまったのかとおもわせる。そんな日常生活の、実に細かな仕草まで、クリント・イーストウッド監督は注目し、描き出してみせる。もちろん，このシーンはセリフなしで演じられる。まさに映画の言語で監督は大いに語っているのである。
　また，終盤のラグビーの試合シーンでは、選手達の肉体の持つ躍動感、鍛え上げられた筋肉と筋肉のぶつかり合いを、見事な映像として表現している。
　この作品を劇場で観終わって、ぼくはしばらく席を立てなかった。感激が止まらなかった。
　時に芸術は、明日、生きていく勇気を与えてくれる。主演のモーガン・フリーマン、マット・デイモン、クリント・イーストウッド監督，この作品を創ってくれたスタッフ達、そしてなにより、ネルソン・マンデラ氏に拍手を送りたい。
人が生きていく事の勇気を教えてくれたような気がする。
　最後に、まだ不安定な政情が続く南アフリカ共和国に、神のご加護を！！
＊＊＊
なお，私の主義として新作映画は最高４点までにしています。あしからず。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　クリント・イーストウッド
主演　　モーガン・フリーマン、マット・デイモン
製作　　２００９年　アメリカ
上映時間　１３４分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=SWLm16Kip-w

恋するベーカリー

２０１０年３月５日鑑賞

＊＊＊おじさんだって楽しめる女性監督作品＊＊＊

なんか、女性監督っていいよね、と思わせる作品である。

とにかく楽しかったというのが第一印象。劇場でもミドルエージの女性客は、大笑いしてました。

熟年同士でもまだまだ恋は出来るんだよね、と勇気づけてくれる映画である。

ナンシー・マイヤーズ監督の前作「ホリディ」が、僕はとてもお気に入りで、ハッピーな気分にさせてくれる、とっても素敵な作品だった。

今回の作品も期待通り。最近ちょっと落ち込み気味の僕でも充分楽しませてくれる作品だった。

メリル・ストリープ演じる主人公は、女手一つでベーカリーを経営する。お店は結構繁盛していて、それなりに成功している。１０年前には離婚したけれど娘二人、息子ひとりを育て上げた。長女はもう婚約しているし、息子も大学を無事卒業。そろそろ子供達も独り立ちだ。彼女は自分の時間を楽しむ時期に来ているのだろう。娘の婚約者も一緒になってパーティーを開いたり、家の増改築もこの際やっちゃおう。

この娘の婚約者も、とてもいい思いやりのある好青年で、主人公の”不倫”の行方にもちょっと関係してくる。このあたりのドタバタ劇の演出は最高！！

離婚した元旦那は歳に釣り合わない若い奥さんといっしょになった。世代間の相違って奴に、今頃になって悩んでる。ちょっと昔の奥さんの事も気になっていたこのごろ。息子の卒業記念パーティーで離婚した二人が再び出会い、焼けぼっくいに火がついてしまったところから、ストーリーがいい具合に展開し始める。

元ダンナ役のアレック・ボールドウィン、今回はいろんな意味で、めちゃくちゃ体を張った演技してます。おなかの出具合もそれはご愛嬌。

増改築を担当する設計士役のスティーヴ・マーティン。最初はとても理知的な感じだけど、のちにメリルストリープと、いけないハッパを吸ったりして、ハイになって弾けた演技を披露してます。そしてなんと言っても主役のメリルストリープ。さすがの演技。今回はおばさんの本音トークから、ベッドシーンなど、きわどいシーンもあるし、熟年女性の色気もぷんぷん発散してます。弾けた演技にも彼女らしい抑制が利いているし、今回の作品は彼女のいろんな面を垣間見せてくれます。

熟年おばさまたちの本音炸裂トークが随所にちりばめられ、さながら５０代のためのセックス＆シティーという感じさえあるけれど、でもあの作品は、男目線で見ると正直ちょっと抵抗感がある。あまりに華やかすぎて、なおかつ享楽的で。

要するに日本で言えば、リーマンショック以後１００年に一度の大不況の時代に「六本木ヒルズに住まないやつはニンゲンじゃない、」みたいな臭いをぷんぷん出している作品だった。僕個人はそれに違和感を感じたのだ。とても今のアメリカのリアルな姿を反映していない感じがする

。それは作品的にラブコメなので、シリアス路線は取れないのは分かっている。だけど時代の雰囲気をちゃんと伝える事は重要だ。
例えば本作では、主人公の娘が乗っている車は環境を配慮したトヨタのプリウスになっている。このあたりのさりげない配慮に、監督の手腕がでている様な気もする。
　また、女性監督でなければ、描けない様な熟年女性の心理描写がうまい。女性のみならず、男性からも共感が得られるのではないだろうか？　僕の様なおじさん目線からも楽しめる映画なのでした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ナンシー・マイヤーズ
主演　　メリル・ストリープ、アレック・ボールドウィン
製作　　２００９年　アメリカ
上映時間　１２０分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=azHhXMw5LaI

ハート・ロッカー

２０１０年３月６日鑑賞

＊＊＊観客に差し出される「混乱」＊＊＊

なぜか、妙にイライラする映画だった。それがキャスリン・ビグロー監督の仕組んだ罠にハマった証拠なのかもしれない。

イラクの治安維持と言う大義のため、そこに駐留するアメリカ軍。本作はその中で、最も危険な任務、爆発物処理を専門に行う３人チームの人間模様を描く。

爆発物処理の最中に事故死したリーダー。その代わりに赴任してきたのが、主人公のジェームズである。アフガン紛争でもこの仕事に携わって、すでに８００件以上の爆発物を処理してきたエキスパートである。その自負もあるのだろう。その性格は超がつくほどの自己チューなニンゲンなのだ。

彼が危険な任務をなぜ続けてこれたのか、それは自分以外は信じないという事なのだろう。この仕事が彼をそう言う性格に育て上げたのだろう。

爆発物は、タイマーで爆発する様な単純な仕掛けではなく、実は遠隔操作で好きな時に爆発させる事が出来る、というのをこの映画で初めて知った。

当然起爆装置を持った犯人がどこからか見ている訳だ。この建物か？　あの建物に潜んでいるのか？　見渡せば、イラクの一般市民が興味深そうに爆発物処理現場を覗き込んでいる。その表情は読み取れない。それこそ一般市民全員が犯人のようにも見えるのだ。また、観客をそのように思わせる演出も巧みだ。

彼らの誰かが、携帯電話を持ち出してピッとダイヤルすればとたんに爆発する。何が起爆装置になるのかわかったもんじゃない。

中には処理班の仕事ぶりをご丁寧にビデオカメラに撮っている市民さえいる。

もしかしてあれも起爆装置か？

だからアメリカ兵たちには、それこそ自分たち意外は全て敵とさえおもえてくるのだ。

映画の前半部分は実にドライなタッチで、まるでドキュメンタリーをみているかのようだ。手持ちカメラを多用しているので画面はブレまくる。それが臨場感を誘うのは分かるが、観客としては、ちょっとしんどい。また移動の車の中でのショットなどクローズアップの多い映像だ。

そのため観客は、自分が処理班の一員になったかの様な錯覚をする。兵士たちの感情表現は前半部分ではほとんどない。そんな余裕がないのだ。とにかく爆弾に仕掛けられたコード一本を間違えて切ればドッカーン！！ゲームオーバーなのだ。

緊迫感を持ちつつ、それでいてどこか事務処理的に任務をこなす様子が淡々と描かれていくのである。

後半になって少しトーンが変わってくる。死んだ子供の腹の中になんと爆弾が仕掛けられていた。それに憤慨するジェームズ。犯人を見つけてやると危険なイラク人の市街地へ捜索を始める。このあたりから少しウエットな感情表現がでてくるのだ。

この映画を見ていて監督の意図するところは何だろう？　とおもった。

観客を錯覚させる事か？　確かに緊迫感の演出は見事である。ただ，監督の政治的なスタンス、立ち位置というものに疑問を感じるのだ。

なぜならそこには、観客があたかもアメリカ軍の一員になったような様な、錯覚を起こさせる仕掛けがいくつもみられるからだ。観客にとっても、イラク市民は全員敵に見えるように演出されている。あまりにアメリガ軍べったりの映画つくりではなかろうか？

爆発物処理は危険きわまりない任務だ。観客はある種の擬似的な極限状態を体験する。

それは作品に登場する兵士たちへのシンパシーに変わってしまうのだ。

そして僕はよけいに混乱するのだ．監督は何が言いたいのだろう．戦争の悲惨さでは決してない様な気がする。むしろ爆発物処理に賭ける男のロマンと陶酔感さえ感じさせる。

そして映画冒頭で提示されるテロップが更に混乱を生む。

「戦争はドラッグだ」

その刺激に慣れた者にはまともな日常生活はあり得ない。あえて戦いの場へ更なる刺激を求めてしまうのだ。その異常な刺激を求める兵士の姿に僕はコトバを失う。なぜなんだ、と。

その混乱した状況，そのものをこの映画は黙って差し出したかった、観客に提示したかったのではないか？

ようやくそこまで考えて、何となく監督の意図が分かった様な気がした。ようやく僕のイライラも収まってきた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　キャスリン・ビグロー

主演　　ジェレミー・レナー、アンソニー・マッキー

製作　　２００８年　アメリカ

上映時間　１３１分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=J22-8Bu4mHw

２０１０年３月１０日鑑賞

＊＊＊なんとかしなくちゃ，が彼女を追いつめる＊＊＊

主婦は新しいトレーラーハウスが欲しかった。夫はギャンブル好きで、ある日突然行方をくらましてしまった。トレーラーハウスの資金を持ち逃げしたのだ。彼女がパートタイムで働いて稼げる金は、生活をやっていくにも足りないぐらいだ。

生活の疲れが彼女の表情を暗くさせる。目の小じわが目立つ。鏡の前にはいくつもの化粧品の小瓶が並ぶ。こんなものに金を使ってはいけないなぁと自己嫌悪に陥る。

煙草をふかす彼女。

生活を切り詰めなくちゃ，

そう思う彼女の横顔に、タバコの煙が上っていく。

こういうリアルな生活を描くのがうまいなぁ。

映画の舞台となるのはアメリカの北国、カナダ国境近くの田舎町である。

主人公の主婦はあるきっかけから、先住民族モホーク族の女性と出会う。そして密入国の仕事を二人でやる事になる。たった４９００ドルのトレーラーハウスを買うために。

それさえ手に入れれば、二人のこどもたちと、ささやかな新しい暮らしをはじめられる。

主婦はそんな気がしたのだ。

今の苦しい生活，何の夢もない生活からなんとか抜け出したい。

今日も子供に言われた。

「今日の晩飯もポップコーン？」

わかってる。なんとかしなくちゃ。切実な思いが彼女を犯罪に走らせる。

一方、ハイスクールに通う息子は、お年寄り相手に詐欺に近い事を始めてしまう。それは遊ぶ金欲しさではない。かわいい弟のクリスマスプレゼントを買うためだ。彼もそれなりに必死なのだ。

アメリカの最も底辺で暮らす人々をリアルに描いたこの作品。上映時間があっという間に過ぎていく。実際、たったの９７分間の作品だ．無駄なシーンは一切ないと言っていい。この監督、引き算で映画を作っているのだ。その姿勢には共感を覚える。まるでカウリスマキ監督の、人生負け組路線の映画を彷彿とさせる作品である。

ただ、映画を映画館で見るという事の楽しさは、全くないと言っていい作品。

映画ならではの大スクリーン、スケール感と言ったものは何もないので，テレビドラマで表現できる内容である事がちょっと残念だった。今後の活躍に期待したい監督である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

映像　☆☆☆

音楽　☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　コートニー・ハント

主演　　メレッサ・レオ、ミスティ・アパーム

製作　　２００８年　アメリカ

上映時間　９７分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=ecgJyD8Pz6Q

シャネル&ストラヴィンスキー

２０１０年３月11日鑑賞

＊＊＊ファッションと芸術が向かい合う時＊＊＊

最近のココシャネル３部作（と言っていいのかな？）の中で，最も重厚でアート感覚溢れる作品に仕上がっていると思う。僕はとても好きなタイプの作品である。

　ストラヴィンスキー作曲、バレエ音楽「春の祭典」
その初演。

　観客からは「騒音だ！！」という怒号が飛び交う。
さんざんな評価だった。
それでもシャネルだけは、彼の前衛的な作家性に興味をもったのだろう。

　シャネルは、生活に困窮している作曲家、ストラヴィンスキーのパトロンとなるのである。

　ストラヴィンスキーの方はすでに既婚者だし、子供さえいる身である。シャネルはその家族ごと面倒をみるというのだ。

　シャネルは一家を自分の別荘に住まわせる。病弱な体で、貧しい暮らしをしていた奥さんと子供達。突然。お城の様な家に住む身分となってしまう。

　そこは森の中のシャトーだった。門を通り，森を抜けると豪華絢爛たる屋敷。もちろん部屋は使い切れないほど、一杯ある。

　内装調度品も美しいデザインが施されている。時代を反映してアールデコ調の直線的なデザインの内装である。ストラヴィンスキーには、仕事部屋としてグランドピアノ付きの部屋が用意されている。ほとんど夢の様な環境である。おまけに身の回りの世話をする執事まで付いているのだ。

　やがてシャネルは，ストラヴィンスキーと男女の関係としてつき合い始める。

　ありがちな展開、と言ってしまえばそうなのだが、ココシャネルの大胆さ、狙った獲物は逃さない、と言う彼女の生き方を感じさせてしまう。

　ストラヴィンスキーにしても、囲われた男という意識がどこかにあったのかもしれない。それがいやだったのだろう。

　音楽家のパトロンとしては、ショパンの恋人でもあったジョルジュ・サンドが有名である。彼女の場合は、ショパンに対して献身的な愛を捧げたようである。だが，ショパンもそうであったように、ストラビンスキーの場合も，やがて破局を迎える。
「君は洋服屋だ。僕は芸術家なんだ」

　彼の強烈な自意識が、そのコトバをココ・シャネルに浴びせかけたのだ。

　彼の奥さんも、シャネルとの関係に気づいていた。

　彼女は、自分が病弱であるという負い目を感じていた。それでも彼女はやはりストラヴィンスキーの最大の理解者でもあり、献身的に彼の芸術を支えていたようだ。それはストラヴィンスキーの作曲原稿を彼女が校正していた事からも伺える。

　やがて奥さんは，自らこの屋敷を出ると申し出るのだが……

　この作品、何が素晴らしいって，とにかく美術スタッフの仕事が素晴らしい。そして素晴らしい舞台セットの美しさを、そっくり撮り切った撮影、照明のスタッフ達がいい仕事をしている。ハリウッドもVFXだ、３Dだ、ばかり言ってないで、こういう映像を撮ったらどうだ？　と言いたい。
もちろんアート系の作品となると、観客動員はあまり見込めないのはよく分かっている。
実際こういう作品を気に入る観客，わざわざ１８００円払って観に行く客は限定されてくる。
だが，素晴らしい美術装置、舞台のなかで、マッツ・ミケルセンの様な、力量のあるヨーロッパの役者さんが演じている作品を見逃すのは、あまりにもったいない。彼はこの前の作品「誰がため」でも戦時中のレジスタンスを骨太に演じた、魅力ある役者さんである。
　　この作品から感じるのはココ・シャネルの、単なる洋服屋としてみられたくない、と言うこだわり、プライドだ。かたや、ストラヴィンスキーも、芸術家として，音楽に携わる者の誇りとプライドがある。両者、がっぷり四つの精神の対決を本作は描いている。
　ファッションは，単なる流行だけを追いかける上辺だけのものなのか？　それとも人間の本質にも影響を与える、アートに属するのか？　ココシャネルは，その領域にまで踏み込もうとしていたのかもしれない。
　芸術家同士、認めあい反発しあう、その心の揺れ動きを映像として監督は見事に語っている。本作の終盤にかけての畳み掛ける様な演出もまたお見事である。
　美しい映像を堪能したい、音楽にもこだわりたい、映画美術にもこだわりたいという方にはお勧めの逸品といえる。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ヤン・クーネン
主演　　アナ・ムグラリス、マッツ・ミケルセン
製作　　２００９年　フランス
上映時間　１１９分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=UVFFYZI0fz4

２０１０年３月１４日鑑賞

＊＊＊才能の隠れ場所に陽が当たるとき＊＊＊

これ，いい映画だなぁ～，いい監督さんだなぁ～とおもっていたら、なんとクリント•イーストウッド監督の名作「パーフェクトワールド」の脚本を書いたジョン・リー・ハンコックが，監督している作品なのだ。ああ，道理でいいストーリー展開なわけだ。それにこのお話、実話である。

ホームレス同然の黒人少年マイケルを保護した，裕福な白人一家。彼らは家族ぐるみでマイケルを支える。読み書きも満足に出来なかった黒人少年マイケル。ただクマのように図体のでかい彼は、なんと後に大学を卒業し、プロフットボール選手になるというサクセスストーリーだ。

この作品で主演を務める．サンドラ・ブロック。彼女はワースト女優におくられるラジー賞と，オスカーの主演女優賞をダブル受賞して話題をかっさらった。でもラジー賞の授賞式にもちゃんと出席し、洒落っ気のあるスピーチで会場を沸かせたのはいい度胸している。

そういう、ある意味ふてぶてしい感じが，本作「しあわせの隠れ場所」では，とてもいい方向に作用しているようだ。

彼女の役柄は、黒人少年を引き取る太っ腹な白人富裕層の母親役である。

マイケルがハイスクールのフットボール部で練習中、コーチに「そんな教え方じゃ，この子の才能は伸びないんだよ」とばかりにしゃしゃり出るシーンなどは思わず笑ってしまう。

黒人少年マイケルはクイントン・アーロンが演じている。彼はほとんど無名の新人俳優だが，その並外れた体格と，優しい性格の主人公を淡々と演じている。

白人一家の末っ子、略称S・Jを，まだ子役のジェイ・ヘッドが大人たちを食ってしまう見事な演技を披露してくれる。彼の活躍におもわず助演男優賞をあげたくなってしまう。

彼はちびっ子だが，マイケルと本当の兄弟のように仲がいい。やがてS・Jはマイケルの専属コーチのような存在になり、マイケルのトレーニングにつき合うのだ。

その甲斐もあってか、でかい図体の生かし方をおぼえたマイケルは、フットボールのディフェンスでめきめき頭角を現す。

まさに水を得た魚、いや，水を得た水牛と言った方がふさわしいか？　とにかく向かってくる相手を倒しまくるのだ。

噂は広まり、どんどん有名大学のスカウトたちが、我先にとマイケルの住む家に押し掛けた。
「ウチの大学はこれだけのいい条件を出すぞ！」
「いや，うちの方がもっとすごい条件を出そう！」とスカウトたちはあの手この手。

それの条件交渉をやってしまうのが、なんと、またまたちびっ子のS・Jなのだ。このシーンはもう最高！！

またこれらのシーンの編集がすごく的確でうまいのだ。出来ればアカデミー編集賞は「ハートロッカー」ではなく，この作品にあげたいとおもったぐらいだ。

この物語は実話という事もあるが、ほんとに奇跡と言える様なサクセスストーリーだ。

現実には黒人の最下層には，ドラッグがはびこり、貧困から抜け出せず，教育さえ十分に受け

られない子供達もいる事だろう。日本でも家庭の年収と、児童の教育環境は比例関係にある。
　現実にはもっと多くの見逃された才能が、今日も陽の当らない隠れ場所に埋もれているのだろう。この物語が単なるレアなおとぎ話に終わらないでほしいと願うばかりである。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ジョン・リー・ハンコック
主演　　サンドラ・ブロック、クィントン・アーロン
製作　　２００９年　アメリカ
上映時間　１２８分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい
http://www.youtube.com/watch?v=awZF4Oyoir0

２０１０年３月16日鑑賞

＊＊＊ワトソン君、この作品自体ミステリーだね＊＊＊

正直今回は全く困った。はっきり言えばレビューすべきではないのだろう。何せ冒頭の５分間で、もう帰りたくなってしょうがなかったのだ。あとは，日頃の睡眠不足を補うためにタダ寝ていた。

なぜこの作品が僕に会わなかったのか？

監督は，アクションや群像劇が得意らしい。僕の全く知らない監督である。

とにかく編集がアクション流の編集なので、１秒以内に画面がどんどん切り替わる。それはレストランで食事をしているシーンですらそうなのだ。

ここは引きの絵が欲しいなぁ〜、とこちらで思っていても，容赦なくクローズアップでガンガン攻め立ててくる。そのため、せっかくの１９世紀イギリスのたたずまいを、じっくり大きなスクリーンで鑑賞する余裕もない。せっかくの美術が台無し。

アクションシーンはそれなりに楽しい。

だが，今さらアクションなんて観たってはっきり言って出尽くした感じがある。

「パイレーツ•オブ•カリビアン」のような「ここが見所！！」という、手の込んだハイライトシーンもあまりない。

うつらうつらしながら、なんでこんなにつまらなくなったのかをぼんやり考えていた。

「推理サスペンスはテーブルひとつで出来る」という話がある。

テーブルの上でポーカーをやっているとする。たのしそうに。画面が下にパンする．テーブルの下に拳銃が置かれていれば、これはサスペンスだ。もし、血まみれの腕が転がっていれば、立派なホラー映画となる。

今回のシャーロックホームズでは、銭形平次の手下が「親分！てえへんだ、てえへんだ」と叫んで駆け込んでくるのとよく構造が似ているのだ。

大変だと叫ぶ割には「お前の大変は聞き飽きた」ということなのだ。

ふたを開けてみれば「ああ，この程度の事件か」で終わってしまうのである。それでも銭形平次は何年もマンネリと言われながらも続いた。

水戸黄門だってそうだ。８時４５分になれば印籠が登場するのだ。そこには偉大なるマンネリズムがある。そして観客は予定調和に満足するのだ。

この作品は、それを嫌った。知的なホームズ像をかなぐり捨て，肉体派ホームズ像で押しまくっている。それは目の付けどころとしては面白いと思うのだが……

身も蓋もない言い方をすれば、演出が、最も残念。

つまり、監督の力量が不足しているのだ。

ポーカーをする時に、すでにテーブルの上にピストルなり，血まみれの手がおかれているようなものである。

ドキリとするものが何もない。

　ロバートダウニーJrは、チャップリンの伝記映画「チャーリー」でその才能を見せつけたし、（それも同じく１９世紀から２０世紀にかけてのイギリスが舞台だ）
ジェード•ローに至っては人気絶大なイケメン俳優だ。
　脚本だって、クリントイーストウッド監督の傑作「インビクタス」の脚本家が参加しているなど、とても豪華だ。
それらの才能をこれだけ集めても、なぜ、こんな残念な結果に終わってしまったのか？
　１＋１は２にならなかった。
　「ワトソン君考えてみたまえ．それこそ最大のミステリーかもしれないよ」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ガイ・リッチー
主演　　ロバート・ダウニーJr、ジェード・ロウ
製作　　２００９年　アメリカ
上映時間　１２９分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=birxguM58nI

コララインとボタンの魔女 3D

２０１０年３月１９日鑑賞

＊＊＊ボタンの穴から見えるセカイは？＊＊＊

「アバター」以来の３D映像を見て参りました。
人形を１コマ１コマ動かして撮影するという、気の遠くなる様な作業で出来上がる映像です。
ストップモーションアニメというのだそうで，このジャンルでは僕はティム・バートンの「コープス・ブライド」がとても好きです。
　今回の作品も人形を動かしている訳なのですが，その人形のテクスチャーを、もうすこし布地っぽくしてくれると、もっといいのに、とおもいました。
「コープス・ブライド」の時は比較的ざっくりした生地でつくられた人形を動かしていました。
それがいかにもアニメではなく、実写という感じがして、とてもいい雰囲気を出していたからです。
　今回の人形はちょっと観ると、そう言う手触りが感じられなくて単なるアニメに見えてしまいます。
それだけ肌がキレイで、陰影もまるでコンピュータで画像処理したかの様なグラデーション。それがちょっと残念。
　ストーリーは、田舎の一軒家に家族ごと引っ越してきたコララインが、古い家の中にある扉をひらいたら、そこは違う世界。もうひとりのママとパパがそこにいる。でもこの世界の住人は皆、目にボタンをつけている。そこで起きる不思議な出来事を描いていきます。
　主人公のコララインのキャラクター。ちょっとふてくされていていつも不機嫌そう。でも少女特有の生き生きとした表情で、とってもチャーミングに描かれています。
　パパとママは園芸関係の記者で、どちらも忙しそうにパソコンのキーを叩いていて、全然遊んでくれない。おまけにママは料理が苦手。だからいつも不味いパパの料理を食べる事になる。
だけど扉の向こうの、もうひとつのセカイでは……
そこにいるパパとママはいつも優しくてすてき。料理もおいしい。
はじめは夢の中の出来事だと思い込んでいたコラライン。出来れば向こうに住みたいな，などとちょっと思ってしまうのが夢見がちな女の子なのです。
　この作品、とてもアート感覚が溢れていて、その世界観が僕は好きです。ストーリーはちょっとマッタリしていて眠くなる部分もなくはない。
でも「くるみ割り人形」を思わせる様な、クラシカルですてきな音楽も，よく映像とマッチしています。
　また，どこで音楽を入れるのか？　その音楽が物語の背景やコララインの心象を表現する訳なのですが、これが実に的確。久々にいい映画音楽、そして演出にであった感じです。
　この作品で何が感心したかと言うと上映時間です。
　なんと１００分間ある訳です。
「ナイトメアー・ビフォアー・クリスマス」は７７分，「コープスブライド」は７６分でした。

ストップモーションでこれだけの長さを作ろうというのは、信じられない労力がかかっているはず。その努力と手抜きをしない世界観を表現したスタッフに努力賞です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ヘンリー・セリック

主演　　ダコダ•ファニング、テリー•ハッチャー

製作　　２００９年　アメリカ

上映時間　１００分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=Ol2QCt5NG84

NINE

２０１０年３月２９日鑑賞

＊＊＊この色と艶，やはり，イタリア＊＊＊

いやぁ～，色っぽい映画でした．舞台装置、照明、キャメラもよかった。なんといっても、これほど豪華なキャスティングは滅多に観られませんよ。それにミュージカル仕立てで、それぞれの俳優たちの歌も聴けるのですから。ペネロペの歌は初めて聴きましたが、ちゃんと唄えるんですね。ニコール・キッドマンも見事な唄いっぷりでした。

色と艶という事であれば、やはり物語の舞台であるイタリア語でこの映画は語られるべきです。

セリフ，そして歌が全て英語なのが何とも、何とも、残念でなりません。劇中、ジュディ・ディンチおばあちゃんが、まだまだお元気な歌声を披露してくれるのですが、これが一部フランス語なんです。この部分はよかったねぇ。それにペネロペ・クルスの甘ったるい艶技とスペインなまりの英語が、何とも艶めいて、もぅ～、たまらんかったですよ。

主人公は映画監督です。映画を作るのにスタッフは集めた。あとは自分が脚本を書くだけ。だが一行も書けない。どうしても何もイメージが思い浮かばない。

ただ，やはりイタリア男は悩む時も、あくまでラテン的に悩む訳なんですね。愛人とベッドの上でいちゃつきながら悩んでるあたり、これぞイタリア男の面目躍如という感じです。ある意味、男の理想の絵ですかね。

監督の愛人役がペネロペ・クルスなら、奥様役がマリオン・コティヤールなのです。なんという贅沢……

「エディットピアフ、愛の讃歌」で、その歌と演技の実力を存分に見せつけたマリオン・コティヤール。

いざというときの演技の迫力、眼力には、思わずハッとさせられます。まさにフランスを代表する立派な大女優になりましたね。

映画そのものは、観る前はストーリーなど全く期待していなかったのですが、それぞれのキャストの心の動きや人間関係など、とても見事に描かれております。ストーリーのなかで、主人公が「脚本が一行も書けない」と悩む姿と対照的でした。見事に物語として完結させています。ラストショットに付いては、もうこれしかない、というタイミングでカットがかかります。ミュージカル映画としてお見事という他ありません。大人のためのミュージカルとしては存分に楽しめる一作。エンドロールにちりばめられたキャストたちのオフショットも魅力的な作品でありました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ロブ・マーシャル

主演　　ダニエル•デイ＝ルイス、マリオン•コティヤール

製作　　２００９年　アメリカ

上映時間　１１８分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=BrCfdRO5MoU

アイガー北壁

２０１０年４月１日鑑賞

＊＊＊エンドロールにこめたメッセージ＊＊＊

エンドロールを最後まで観る事は、映画作品への敬意を表すると言うか、エチケットだと思っていた。ところが、本作ではエンドロールに流れる楽曲に、とても重要なメッセージが込められている事に気がついた。１９３０年代後半、ドイツが戦争に突入していく時期に流行していた曲らしい。

「前に向かって進むだけでいい．それで幸せになれる」という内容の曲である。

　しかし、ただやみくもにアイガー北壁初登頂を目指した、その先に待っていたものは大きな悲劇だった。

　そしてその後のドイツも、全世界を巻き込んだ悲劇に突入していく。

　この作品は実話を下に構成されている。ベルリンオリンピック開催まであとわずか。ドイツは国中が興奮状態だ。

そんな折、アイガー北壁に初登頂した者には金メダルが授与されると発表される。国の威信を賭けて、山の男たちがアイガー北壁に挑む。

時の国家元首ヒトラーは、このアイガー北壁登頂レースを国威発揚に利用しようとした。

　登山チームを取材する新聞社とておなじことだ。新聞ネタになる様な特ダネが欲しい。新聞記者たちもまた、特ダネに向かってやみくもに前に進んでいったのだ。

彼らが欲しいのは、あくまでも読者に受ける記事だ。華々しい成功か、それとも悲劇的な遭難事件のどちらかである。まさに、名誉か死か、なのだ。

　初登頂をめざすドイツ隊のトニーとアンディ。彼らを取材するのは、新聞社に勤める駆け出しの見習いカメラマンのルイーゼ。彼女が抜擢されたのは、彼らと幼なじみだったからだ。

　ドイツの片田舎で育った彼ら。特に新聞記者のルイーゼは、いかにも田舎娘という感じがする。このあたりのキャスティングもうまい。ベルリンの新聞社へ勤めてから、徐々に都会の女へ変身していく様もよく表現されている。

　さて、この作品でなんと言っても見事なのは、やはりキャメラである。断崖絶壁のなか、どうやって撮影されたのか、と思わせるショットがいくつもある。昨年話題となった邦画の「剣岳・点の記」に匹敵する迫力で観る者を圧倒する。猛烈な吹雪や寒さに必死に耐え、崩れる足場を気にしながら登頂する姿に、思わずこちらまで体がこわばる。

　彼らはただひたすらハーケンを打ち込み、ザイルをたぐり寄せ、登るルートを決めていく。

　そのルートを帰りのために残しておくべきか、それとも要らないという判断をするのか。ただひとつの判断ミスで悲劇は起きる。作品本編だけを見れば、言い方は悪いが、タダのひとつの遭難事件にすぎないとおもっていた。これを映画で描く必要があるのだろうかという疑問をもった。しかしエンドロールを最後まで観終わり、その皮肉な楽曲を聴いたとき「ああ、そう言う事だったか」と気がついた。

　闇雲に前に進むだけではなく、迷った時には立ち止まり、そして引き返す勇気も、時には大事

なのだ。

　国家としてハーケンを打ち込み、どのルートで国民を導いていくのか？　その判断を誤れば、その未来に幸せは訪れないのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　フィリップ・シュテルツェル

主演　　ベルノ•フユルマン、ヨハンナ•ヴォカレク

製作　　２００８年　ドイツ／オーストリア／スイス

上映時間　１２７分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=ZJlE4Qa6dl0

マイレージ、マイライフ

２０１０年４月５日鑑賞

＊＊＊この映画はリストラ対象です＊＊＊

と言われたらスタッフたちはどういう顔をするだろう。
観客にそっぽを向かれる事は映画監督やスタッフたちにとって死刑宣告に等しい。
　この作品の主人公は、その死刑宣告をする側の人間。リストラ宣告人なのだ。
彼は人のクビを切るためにアメリカ中を飛び回る。
彼はクールだ。少しも感情を乱さない。
「これはあなたにとって新しい人生の出発ですよ」
そう言って相手を落ちつかせる。
アメリカと言うお国柄だろうか、突然、解雇通告は従業員に突きつけられる。
解雇される方はたまったもんじゃない。
「オレは十数年、この会社で働き続けてきたんだぜ！！」
「子供達はどうなるんだ！！」
「クソったれ！！」
相手から何を言われようと彼は冷静である。
一年のうち３２０日間は出張という生活。
彼にとって空港と飛行機の中が我が家なのだ。
出張先で出会った女性と、時には割り切ってメイクラブを楽しんだりする。
結婚もせず、リッチな独身生活を楽しんでいるかのようだ。
そんな彼も、妹の結婚や、新人の研修に関わる事によって、いままで何も”人としての情”を持たなかった自分に疑問を感じ始めるのだった。
監督は「JUNO」を撮ったジェイソン・ライトマン。
彼の最初の作品「サンキュー・スモーキング」を見た事がある。
あの作品は抜群におもしろかった。この監督、とにかく観客に、頭を使わせる映画作りをする。
登場人物たちを、絵としてみせるのではなく、喋らせる事に重点を置く。
悪く言えば口先の映画を作る人だ。「サンキュー・スモーキング」では、主人公を徹底的に喋らせる事がうまく機能した。
　さて本作ではどうか……
　まず第一印象、何となくこの映画「うさんくさい」のである。
自分でもなぜだろうと考えた。
　登場人物たちの心から「生きたセリフ」が出てこないように思えた。
魂から叫んでいる様な様子や、情念と言ったものは、この映画とは全く無縁のもので、実にドライな映画作りなのだ。
　また、うさんくささのひとつの原因が、その、思わせぶりな映画作りにあるのではないかと思う。

登場人物への理解、共感、同情、と言ったものをわざわざ避けているかの様な感じがするのだ。
それは監督があえて取った手法なのだろう。
監督の狙いはひとつ。難解さなのだ、と僕は勝手に思う。
映画が難解であれば観客は
「きっとこの映画は何らかの問題を提起しているのであろう」と勘違いしてしまうのだ。
　最近のハリウッド映画は、観客を迷わせ、けむに巻けば評価が高くなる傾向にあるのだ。
勘違いしてもらっては困るのだ。
そういう映画が増えては困るのだ。
古き良きハリウッド映画をもう一度よく見直した方がいい。
名作は誰が見ても名作と分かるように作られていたのだ。
「よく分からない」という事が、物事の深読みにつながると勘違いさせるのは、筋道が違うのだ。
ちょっと暴言になってしまうかもしれないが敢えて言おう。
ハッキリ言えばアカデミー会員は、その多くがリストラ対象とされるべきだと思う。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ジェイソン・ライトマン
主演　　ジョージ•クルーニー、ヴェラ•ファーミガ
製作　　２００９年　アメリカ
上映時間　１０９分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=AYKD6eiqOkw

パイレーツ・ロック

２０１０年４月９日鑑賞

＊＊＊イケないことしてるかぁ～い！！＊＊＊

初めから終わりまでぎっしりロックンロールで詰まってる。何よりロックの魂がぎっしり詰まった映画が登場した。

時代は１９６０年代のイギリス。海の上に一隻の貨物船。それが海賊ラジオ局「パイレーツロック」だ。船長兼、ラジオ局のオーナー（ビル・レイ）はいつもダンディでおしゃれ．身のこなしはまさに英国紳士。

彼の元へ、ハイスクールをドロップアウトした１８歳のカール（トム・スターリッジ）がやってくる。船の生活で身も心も鍛えてこい、という母親の希望なのだ。だけど、船に入ってみてびっくり。

なにせそこは海賊ラジオ局なのだ。それもロック専門。

ここのNo.１DJである「カウント」（フィリップ・シーモア・ホフマン）を筆頭にして、毎日、酒とハッパとロック三昧。時にはファンの女の子も船でやってくるから、その時はやりたい放題。

今まで自分はちょっと世の中になじめないと思っていたカール。でもここの連中はそんな半端なイカレ方ではない。彼らの存在そのものが世の中への反抗、ロックそのものだ。

２４時間ぶっ続けに流しているラジオ局だから、何人ものDJがいて、それぞれ腕を競い合ってる。そこにかつてこの船に乗っていた伝説のカリスマDJ、ギャバン（リス・エバンス）が帰ってくる事になった。このギャバンのキャラクターがいかにもカリスマ。全身全霊で自分に酔っているナルシストっぽさがいい。彼のパイレーツロック復帰第一声が

「みんな～、イケないことしてるかぁ～い！！」

う～ん、ロックだねぇ～。

彼らパイレーツロックの連中は、リスナーから圧倒的な支持を得た。イギリスの国民の大半が、この海賊ラジオ局を聞いていたのだ。

一方イギリス政府の頭の固い、エラい人たちは、この海賊ラジオ局のことがしゃくにさわってしょうがない。なんとかこいつらを社会的に抹殺してやろう、と虎視眈々と計画を進めていく。

１９６０年代、イギリスに限らず、アメリカ、もちろん日本でも、男が長髪にする事は、それだけで不良扱いされたし、世間からは白い目で見られた。ましてティーンエイジャーが、ロックを聴いて腰を振って踊る、なんてことは公序良俗に反する事だった。

まぁ、そう言う時代だったんですね。今からは想像できないでしょうが。

でもイケないことはやっぱりクールで美味しい！！

少年少女たちはパパ、ママに、お休みなさいを言ったあと、自分の枕にこっそりラジオを隠す。親には知られないようにしてワクワクしながらパイレーツロックに周波数を合わせる。

イケない音楽をこっそり聴くというのは、やはり音楽へのシビレ方が違うと僕は思う。やっち

ゃいけないと言われれば、やりたくなるというのが人の性だ。
　それにたいして、いまはなんでもかんでも無節操にOKの時代だ。だから僕のような、オッサン世代は今の若い人達を観てちょっと複雑な心境になる。
デジタル携帯プレーヤーでいつでも好きな時に音楽が聴ける、そして何を聴いても誰からも文句を言われない。
自分の中にある道徳心、羞恥心、反抗、そう言った自分自身と闘いながら、音楽を聴いた経験を僕は持っている。
僕がかつて体験した、音楽への集中とか「痺れる感じ」というものは今の若者にあるのだろうか？
　さて、ストーリーはやがてNo.１DJの地位を巡って「カウント」とギャバンのガチンコ勝負へと発展していく。また、１８歳のカール少年の「サヨナラ童貞放送」のエピソードや、その他てんこ盛りのエピソードを交えながら、この映画はとっておきのクライマックスへ突入する。まぁ、それは見てのお楽しみ。
　ラストシーンでは観ているこちらも拳を振り上げ「ロックンロール！！」と叫びそうになる。このクライマックスへの持っていき方は息もつかせぬ迫力。
　この映画を観ていると思わず彼らのように生きてみたいと憧れてしまう。ロックンロールがもつ、危なっかしく、イケないところが、たまらなく僕のハートを刺激するのだ。僕に心を解き放て！とイケない誘惑をしてくる映画なのだ。
　僕の様な加齢臭漂う中年オヤジでも、こんな作品見せられたらもうたまらんね。
　年寄りみたいに腰が痛いから針治療なんかしてる場合じゃない。
　もうイキそうだ。発射寸前だ。そうだ、そのいきり立ったものを爆発させろ。それがロックなんだ。さあ叫ぼう！
「Let's ロックンロール！！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　リチャード・カーティス
主演　　フィリップ•シーモア•ホフマン、トム•スターリッジ
製作　　２００９年　アメリカ
上映時間　１３５分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=J2ThXSG2pKE

第9地区

２０１０年月４月１０日鑑賞

＊＊＊シューティングゲームを映画館でどうぞ＊＊＊

よくもこんな下劣な映画を作れたものだとあきれてしまった。
映画を鑑賞している最中は、いつ途中で席を立とうかとそればかり考えていた。
中盤に来て、ようやくエイリアンとの交流が描かれ、少し気分を持ち直したが、結局クライマックスは傭兵たちと主人公のドンパチに終始し、これでは、単なるシューティングゲームをスクリーンに広げただけであって、映画にする意味はない。
それもそのはず、ウィキペディアで調べてみたら、なんとこの作品、元ネタがゲームだそうだ。
　脚本やその設定も破綻している。エイリアンは地球上に難民として現れた。彼らの宇宙船は故障し自分の星に帰れなくなった。止む終えず地球上に長期滞在する事となった彼ら。その場所が南アフリカのヨハネスブルグ。第９地区とは彼らエイリアンたちの居留地である。そして彼らが第９地区に住み始めて２０年が経過したと言う設定になっている。これらは関係者へのインタビュー形式の映像で経緯が語られ、観客に納得させる手法である。ここまでは問題ない。僕も素直にこれでいいとおもう。
　エイリアン対策本部に勤める主人公ヴィカスは、彼らにこの場所から立ち退いてもらうというプロジェクトの責任者となった。昇進に喜ぶヴィカス。彼には悲壮感などみじんもなく、素直に昇進を喜んでいる。どこかちょっと能天気なようにも見える。あまりに楽天的な性格の持ち主である。問題はここからだ。これだけのお膳立てをして、結構緻密な設定にも関わらず、主人公は感染防止のマスクも付けず、手袋もしないまま、部下を従えてノコノコ彼らの居留地を探索する。そして彼らエイリアンたちの生活物資や食べ残しなどを平気で素手でさわりまくる。
このあたりから、かなりストーリーは怪しくなってくる。また、エイリアンとは翻訳機なしで普通に英語で会話している。エイリアンの方は明らかに電気的に加工した、信号音の様なコトバを喋る。それでお互い話の内容を理解している。
　まぁ、２０年も滞在しているという設定だから、その間に、彼らがウィルスを持っていない事も分かっているのだろう。また、人類も彼らのコトバを解読しているのだろう。また、エイリアンたちも英語を理解できるようになったのだろう。もうこのあたりから、かなり我慢してこの映画につき合う事になる。
　こう言った主人公の何とも滑稽で無防備で不注意な行動から、彼は結局、あるウィルスに感染する事になるのだ。つまり主人公をウィルスに感染させる設定にするために、かなり無理していろんなお膳立てをしてあるのだ。このあたり、あざとい脚本だなぁ。
　その後、ヴィカスは、当局からいい研究材料扱いされる。彼が収容される研究所の職員は、ちゃんとウィルス感染防止の完全防備をしているのだから笑えてしまう。
　なら、最初から主人公に完全防備させろよって～の！！
　ホントいい加減で、ご都合主義な脚本だ。
　エイリアンたちは確かに醜い。彼らはその姿から「エビ」と蔑まれる。だけど、彼らは、親子

の愛情もあり、相当なテクノロジーも持っている、という設定になっている。
ならば当然文化水準も高いと考えられる。
大ヒット中の「アバター」でも異星人は、原始宗教を持っている設定になっている。だが、本作ではこのあたり全く描かれない。
　本作と対照的に、エイリアンと人間との交流や、彼らの心情をうまく描いたのが、スティーブン・スピルバーグ監督の傑作「未知との遭遇」や「E・T」だ。
スピルバーグ監督はかつてこう言っている。
「彼らエイリアンは遠くの星から、はるばる地球にまでやってきている。自分の身の危険も顧みずだ。冒険的な行為をすると言うことは崇高な目的意識を持っているはずだよ。決して侵略しようという様な悪意を持っているとは僕には思えないんだ」
　この観点は一部この映画でも取り入れられている。エイリアンたちは決してすすんで、人間に攻撃しようとはしないのである。むしろ人間の方が好戦的だ。そのやたら戦いたがる人間の醜さはこの映画でよく表現されている。エイリアン立ち退きのために雇われた傭兵たちは、逆らうエイリアンたちを容赦なく攻撃する。また、傭兵たちも、いとも簡単に殺されてしまう。
そう言った光景がこれでもか、とばかり刺激的にシューティングゲームそのまんまの感覚で描かれる。とにかく殺し、殺される事が楽しくて仕方がない、という「殺戮バンザイ映画」に成り下がってしまっているこの作品。
その救い様のなさに、映画界の荒廃と、現代社会の命の軽さを痛感する映画である。
　結局監督がやりたかった事とは、ドンパチを大スクリーンで見せる事であり、エイリアンは単なる「客寄せパンダ」に使っているにすぎないのだ。
　まぁ、その手にまんまとのせられてしまった自分も情けないのだが。ちょっとこのショックは引きずりそうだ。もう二度と映画館で映画は見ない、と決意するにはお勧めの作品といえる。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆
配役　☆☆☆
演出　☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ニール・ブロンカンプ
主演　　シャールト•コプリー、デヴィッド•ジェームズ
製作　　２００９年　アメリカ／ニュージーランド
上映時間　１１１分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=tWa8hHujYOw

オーケストラ!

２０１０年５月７日鑑賞

＊＊＊ロシア、魂の音楽にブラボォー！＊＊＊

主人公のアンドレイはボリショイ劇場のしがない清掃員。

　ある日、劇場支配人の部屋を掃除していたアンドレイは、一通のFAXが送られてくるのを見る。パリのコンサートホールから、ボリショイ交響楽団へ急遽オファーが寄せられたのだ。

　しめた！！実は彼は、リストラされたカリスマ指揮者だったのだ。彼はかつて同じようにリストラされた楽団員たちをかき集めて、ニセのボリショイ交響楽団を作り、パリ公演を行う事を決意するのだった。

　２０１０年、日本を席巻している音楽映画「のだめカンタービレ」でさえ、ここまでぶっ飛んだ設定はしていない。「のだめ」は派手なCGやコミカルで奇抜な演出が目に付くが、内容そのものは、のだめと千秋の成長物語である。ストーリーの核心となる部分は、意外なほど堅実に作られている事に気がつく。ところが本作はニセものオーケストラというアイデアを用いている。そのストーリーの核心部分そのものが、ある意味「飛び道具」とさえいえる。そこへリアリティなどの肉付けを行って、作品の完成度を高めるという手法をとっている。

　主人公アンドレイと楽団員たちは、ソビエトという国家、ブレジネフ政権によるユダヤ人排斥運動によって、音楽する自由を取り上げられてしまっていたのだ。アンドレイはユダヤ系ではないが、ユダヤ系楽団員を擁護したために、国家へ楯突く者としてリストラされたのだ。そしてパリ公演で共演するヴァイオリニスト、アンヌの出生の秘密も、自由を奪われた人達と結びついている。

　映画前半ではドタバタ調でコミカルなのだが、この様な悲劇的な要素をこの映画は根底に抱えている。それがいい意味でこの作品の重低音部を支えていると言っていい。

　ただ、楽団員の練習シーンがほとんどなかったり、パスポートがマジックのように早く調達できたり、あげくの果てに、楽器そのものを現地調達など、ちょっとあり得ない設定もいろいろ目につく。

また、楽団員の中でオーケストラよりも、副業の商売の方が熱心な人がいたりして、これはユダヤの商売偏重とも取れる表現なのだが、このあたりは実際にユダヤ系の人に感想を聞いてみたいところだ。

　いろんなトラブルが続出する中、やはり本番は無理なのかとアンドレイが悩むシーンがある。そのとき仲間のチェリストが言う。

「チャイコフスキーはお前の血に流れているだろう？」

　音楽も、チャイコフスキーも、自分の体からは決して離れないという、ロシアの音楽家の自負を感じさせるいい言葉だ。

　たとえソビエトという国家がなくなっても、自分の体に流れているのはロシアの血であり、いかにチャイコフスキーが、ロシアの風土に根ざした作曲家だったのかを思い知らされる。

　そして、ラストのチャイコフスキー、ヴァイオリン協奏曲演奏シーンへ向け、怒濤のように

ストーリーは進んでいく。
　この演奏シーンに関しては「のだめカンタービレ」と同等かそれ以上の迫力だ。
　そしてアンドレイと、仲間たちはパリの地でロシア音楽の華を見事に咲かせる。
　演奏シーンでの俳優たちの演技も見事なのだが、編集面でも、曲が進行している最中に、この物語のその後のエピソードを断片的に取り入れるなど、とても目新しいチャレンジをしている。それでも演奏を決して邪魔する事なく、感情の昂りをクライマックスへ導いていくのは、もう、お見事というほかない。
　チャイコフスキーヴァイオリン協奏曲の演奏が素晴らしくて思わず涙がこみ上げてきた。
　圧倒的な盛り上がりを見せてくれる映画である。
　クラッシックブームにわく日本で、そして先の見えないちょっとお疲れ気味の世の中にこの映画は元気を与えてくれる。今だからこそ観ておきたい音楽映画の逸品！！
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ラデュ・ミレイレアニュ
主演　　アレクセイ•グシュコフ、メラニー•ロラン
製作　　２００９年　フランス
上映時間　１２４分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=jyxtWUsvBBM

アリス・イン・ワンダーランド

２０１０年５月１３日鑑賞

＊＊＊この世界をあなたはどう見るか？＊＊＊

やっぱり映画というのは、自分の目で見て判断しないといけないなぁ、と思った次第です。これを観る前はヤフー映画レビューの皆さんのほとんどが低評価で、中にはボロクソにこき下ろしている人もあったりで、今頃になってこの作品を観に行くというのは、ちょっと勇気のいる事でした。

観た後で、なぁ～んだ、意外にいいじゃんと、妙に納得。

このワンダーランドの描き方、僕は個人的にとても好きです。

ストーリーなんてハナから全く期待してなかっただけに、エンディングで主人公のアリスの身の振り方などは、とてもうまく処理しているなと感心したり、あくまで僕個人の感想として、観ておいてよかったなぁと思いましたし、充分楽しめました。

ティム・バートンの作り出す映像の深みと緻密さは、やはり特筆すべきものです。ジョニーデップはこういう役好きなんでしょうね、きっと。とても生き生きと楽しげに、ティム・バートンの描くワンダーランドで遊んでいる感じがして、演技に窮屈さは感じません。アリス役の女の子の演技は、やや平板。もう少し起伏があってもいいかなと思います。

赤の女王役には感心しました。体のほとんどはCGで作られています。そこで顔の微妙な表情だけで演技する事になる訳でして、そのあたり実にいい表情してます。

白の女王は、パッと観たとき、あの目の大きさ、口の大きさ、（ごめんしてね。）これはアン・ハサウェイでしょう、と思ったら、やはりそうでした。一見、大げさすぎるメルヘンタッチの優雅な身振り手振りの表情が、キャラクターによく似合っています。

その他CGで作られたキャラクターの数々。僕のお気に入りは、大きくニターッと笑う、チェシャ猫。あの毛並みのフサフサ感。これはネコ好きにはもうたまらない。思わずスリスリしたくなります。

ワンダーランドで赤の女王と対決する事になったアリス。ここでの体験は本当の出来事なのか？　疑いを持ちます。それは誰もが持つ、自分の内面と言う名のワンダーランドなのでしょう。自分の心のワンダーランドでの葛藤を、どう処理していくのか？　そしてリアルな現実の世界に、どう投影し、自分は何を成してゆこうとしているのか？

ワンダーランドはアリスの生き方や私たちの生き方に、ひとつのクエスチョンを与えました。この不条理で不可思議な現実セカイをどう捉え、そしてどう立ち向かうのか？　そんな事まで含みを持たせた、と思わせてくれる作品でした。

イメージ豊かなアリスの成長物語として、このワンダーランドをあなたも楽しんでみませんか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ティム・バートン

主演　　ミア•ワシコウスカ、ジョニー•デップ

製作　　２０１０年　アメリカ

上映時間　１０９分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=tkssu2ksM1k

17歳の肖像

２０１０年５月１７日鑑賞

＊＊＊映画のエクスタシーを感じさせてほしい＊＊＊

映画を観終わった後、最も感じたのは、もしこれをウディ・アレンが演出したらどうなったかという事だった。
この作品のストーリーは、イギリスのある女子高生が、大人の男にダマされて後に再生するというものである。映画を見終わったときの余韻がいまいち感じられない事が気になった。
　あのシーンが目に焼き付いているとか、あのときの俳優の表情が抜群だった、とか、そういう映画特有のエクスタシーにやや欠ける点があるのだ。
この作品はストーリー重視で進む。ならば、もっと人物像を深く描いた方がいいと思う。ヒロインの父親は頑固一徹。自分の娘を名門、オックスフォード大学に入れる事にしか興味がない。父親がなぜそうしたがるのか、という事がいまいち伝わってこない。父親の生い立ちにどのような背景があるのか？　もっと描いておくべきだろう。そうする事によって物語に奥行き感がでるはずだ。　ヒロインの年上の彼氏、デイヴィッドは、詐欺師でドロボーなのだが、そんな彼に父親はあっさりとダマされてしまい、あげくの果てには結婚まで許してしまう。このあたりがやはり、いまいちうまく描けていないのだ。
　デイビッドの表の顔のさわやかさと善良さ、それを際立たせるためには、彼が裏でやっている仕事の、ダークな部分をもっと描き込んでほしい。彼が本来持っている底知れない恐ろしさを、もっと見せてほしいと思う。
　たぶんウディ•アレンなら、このあたりの人間のダークさや、表と裏の顔の使い分けなどを、的確に描いたであろうと思われる。
また、ヒロインも彼にダマされた後、あっけなく再生するのだが、それもちょっと拍子抜けする。
　かなり手厳しいレビューになったが、それでもヒロイン役、キャリー・マリガンの女優としての資質は一見の価値がある。今までおとなしく父親や教師に従っていた彼女。優等生であったヒロインが、徐々にそのレールを外し、自分を枠にはめ込もうとする大人たちへ反抗していくシーンはとてもいい。
　ビートルズがデビューする以前の１９６０年のイギリス。当時の窒息しそうになる時代の雰囲気、堅苦しさというものは肌で感じられる作品である。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ロネ・シェルフィグ

主演　　キャリー•マリガン、ピーター•サースガード

製作　　２００９年　イギリス

上映時間　１００分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=Sg4EOYmEbzc

月に囚われた男

２０１０年６月１１日鑑賞

＊＊＊お見事！あっぱれだ！＊＊＊

ほぼ一人芝居です。なんと言う大胆なチャレンジ。
主人公は月に単身赴任している男性という設定。期間は３年。
もうすぐ寂しい独り住まいも終了。唯一の相棒だった、ロボット（というか、監視機械と言うか）ともいい加減話し飽きた。監視ロボットの顔に当たる、表示画面が面白いですね。
俗にいう絵文字なんです。
単純なニコニコマークや、ニコニコマークの困ったバージョン、悲しいバージョン、など。
ロボットの感情を最小限のシンプルな線描で表現する訳です。
これ、近未来の月基地でのお話なんですが、そこで使われるロボットは最先端だと思うじゃないですか。
違うんですね。
むしろ、初期のパソコンや、携帯電話画面のレトロな雰囲気にしている訳です。
このロボット、主人公が話しかける内容には、結構きめ細やかな反応をしてくれるのですが、表される表情は単純そのもの。でもこれって深読みすると、日本の「狂言」に通じるとも思いました。いわゆる「型」によって表される表現手法なんですね。歌舞伎の「見栄を切る」という手法だって、あれもパターン化の最たる例でしょう。そういう風に観ると実におもしろい。それを映画を構成するパーツとしてどう生かすのか興味深いですよ。
ストーリー展開が抜群におもしろい。
月の基地には主人公一人しかいないはず。しかし、なぜかおかしなことが起こり始めます。
「なんか、このミッション怪しいぞ」と主人公は疑い始めます。終盤で思わぬ展開，驚愕の事実が……
　登場人物ほぼ一人という画面を、どのように映画表現するのか？　それに挑戦したこの映画の意義は大きいです。脚本がしっかりしていないと、完全な腰砕けになります。しかし、観るものをスクリーンに釘付けにする見事な作品に仕上がりました。
低予算でもこんなに完成度が高いものが作れる。
イギリス映画界もがんばるじゃない。
いやぁ～，久々に出会った良質と言える映画。
正に、あっぱれ！！のひと言！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ダンカン・ジョーンズ

主演　　サム•ロックウェル、ケヴィン•スペイシー

製作　　２００９年　イギリス

上映時間　９７分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=pU1tTBKpkIE

グリーン・ゾーン

２０１０年６月１１日鑑賞

＊＊＊戦いの目線＊＊＊

イラクでのアメリカ軍の侵攻、その大義といえる、大量破壊兵器の存在。それこそが実はアメリカ政府側が仕掛けたトリックだったのでは？　という内容。
マッド•デイモン扮する主人公は軍人です。命令どおり大量破壊兵器を探す。
でもどこにも見つからない。一体我々は何のために危険な思いをして大量破壊兵器を探すのか？
なぜ情報はガセネタばかりで、捜索は空振りに終わるのか？
疑問を持った彼は、アメリカ政府側の深い謎の部分に迫っていくことになります。
ストーリーそのものはとてもシンプル。緊迫感あふれる銃撃戦のシーンが多くあります。
ただ、あまりにも手持ちカメラを多用しているので、観ている側としては、とても疲れます。
フセイン政権を打倒するためにアメリカが行ったこと、それがどのような結果を生もうとも、結局一番災難を被ったのは、現場で働く一兵士たちであり、一般市民なのです。
イラク市街、制圧された「グリーン•ゾーン」と呼ばれる安全地帯。
そこではアメリカ政府関係者たちが、優雅にプールで泳いでいるというシーンがあります。
そこへ、さっきまで銃撃戦をやっていた主人公がやってくる。完全武装の彼。
プールサイドで寝転ぶビキニの女性たち。
兵士は何のために戦うのか？　誰のために戦っているのか？　何とも皮肉なシーンです。
映画にどのようなメッセージをこめるのか、また、その志はどの程度のものなのか？
それは作品を見ると、よく観客に伝わります。マイケル・ムーア監督のようにドキュメンタリー手法で、権力側に対して断固としたNOを突き付けたり、市民に問題提起をする方法もあります。
そういう意味からいえば、本作は表現はハードなのですが、テーマそのものはやや甘いと感じます。
今年始め「ハートロッカー」が話題になりました。あの映画はアメリカの兵士側から見た、イラク戦争の実態を描きました。だが、あの映画での視点が、大変な問題であると思うのです。
観客にとってイラク人はすべて敵に見えるのです。
観客をもアメリカ兵士側の視点に立たせようとする、その意図に観客は見事にはめ込まれるのです。
アメリカ側バンザイ！！　アメリカは正義の味方だ！！の立場で作った「ハートロッカー」はアカデミー賞に輝きました。
そして本作は一歩踏み込んだ視点を取っています。
イラクのことはイラクに任せたらどうだ、という主張が見られるのです。
巨匠クリント•イーストウッド監督が太平洋戦争において「父親たちの星条旗」「硫黄島からの手紙」という、日米両方の視点から映画を作ったことの意義を、もう一度考えるべきでしょう。
今一度、謙虚にイラクの市民の声をとらえた映画は作れないものでしょうか？　僕はそんな映画を見たいです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ポール・グリーングラス

主演　　マット•デイモン、グレッグ•キニア

製作　　２０１０年　フランス/アメリカ/スペイン/イギリス

上映時間　１１４分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=l8o6bqTNbvQ

クレイジー・ハート

２０１０年６月２８日鑑賞

＊＊＊どこかで観たゾ、このシチュエーション＊＊＊

どこかでこれと似た映画を見た事があるぞぉ～。
落ちぶれた男、独り者。過去は栄光に輝いた男。
妻や子供はほったらかし、音信不通。
でも自分が愛する仕事にはこだわり続けてゆく。
うまく立ち回る事を知らない男。
そして実は愛に飢えている男。
もうここまで書くと映画ファンの皆様ご存知でしょう。
そうです。昨年公開のミッキー・ローク主演「レスラー」
あの傑作と全く設定が同じなんです。
　ここまで同じ設定をパクるのって，率直に言って反則じゃないの？　と思う訳ね。
　それほど僕は「レスラー」を愛しているし、あれはオレの姿だ、と激しく感情移入出来る、滅多に出会えない傑作だった。
　その男が愛する対象が「レスリング」なのか、それとも「カントリーミュージック」なのか、その違いだけなんです。
　だから正直「レスラー」を観てしまった映画ファンは、ちょっともの足りなさを感じるかもしれない。
　本作はカントリーミュージックに題材を取っています。カントリーって、日本人にとっての演歌みたいなものかね、と僕なんかは短絡的に考えてしまうけど、どうなんでしょう？
　カントリーは演歌と同じく、使う和音（コード）も割と限られている。そのためメロディーに劇的な変化をつけにくい。どれも同じ様な感じに聞こえる。
　だから歌詞がちゃんと伝わらないと、その雰囲気や心情は分かりにくいと思う。
この作品中で、歌われるカントリーソングが数々あるけれど、これ、映画館での上映では対訳がありませんでした。せっかくカントリーソングの映画なのに、ちょっとこれは不親切だと思う。配給元はもう少し配慮してほしいよね。DVDになったら、ちゃんと対訳は入っているかもしれない。
　という訳で、アメリカ英語がさっぱり分からない、僕みたいなボンクラには、何を歌っているのかその雰囲気さえ劇場ではつかめませんでした。
　逆を言えば、アメリカ人が演歌に関する邦画を見たとして、北島三郎や、千昌夫の唄を、英語訳なしで鑑賞する様なもの。ちょっと想像しただけで滑稽かも。
この作品中の曲がいいと思う人も多くいるだろうけど、僕にとって「レスラー」でのエンドロールに流れるブルース・スプリングスティーンの曲もいいですよ。
　作品全体として、主役のジェフ・ブリッジスはよく頑張っていたなぁと思います。
この作品が好きで、まだ「レスラー」をご覧になっていない方は、ジェフ・ブリッジスとミ

ッキー・ロークの熱演を見比べる意味でも、ぜひ「レスラー」をご覧になる事を”激しく、熱く”お勧めします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　スコット・クーパー

主演　　ジェフ•ブリッジス、マギー•ギレンホール

製作　　２００９年　アメリカ

上映時間　１１１分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=E_yRh0gLUXk

２０１０年６月２８日鑑賞

＊＊＊GO ！GO！ローラーガールズ＊＊＊

この映画全くノーマークでした。監督はなんと、あの「E・T」で子役を務めたドリュー・バリモア。たぶん作品撮影中はまだ３４歳の若さ。もちろん初監督です。作品中にも自ら出演してます。

　それに主役が「JUNO」のエレン・ペイジ。これは注目の映画でしょう。

観た後での感想。スカッとさわやかに仕上がっていました。

細かいつっこみどころはいろいろあるものの、初監督作としては、がんばったんじゃないでしょうか？

　アメリカの田舎町、主人公は１７歳、冴えないファーストフード店でアルバイトしている、ごく普通の女の子。

母親はこの娘をミスコンテストで入賞させる事しか頭にない。

　いい加減、母親の価値観を押しつけられたり、かっこわるい大きなブタの置物があるファーストフード店でアルバイトするにも嫌気がさして来た彼女。そんな彼女の目に飛び込んで来たのが、街で開かれるローラーゲームの興行。正にこれ、興行、いわゆる見せ物なんですよ。

　５０代以上の方、覚えていますか？　日本でもこのローラーゲーム、昭和４０年代に大ヒットしましたよね。僕もテレビにかじりついて観ていた覚えがある。とにかく、そのスピード感とアクション、スリリング、早い展開。アメフトの様な格闘技戦でもあるんです。

　作品では実際にローラーゲーム用の楕円形コース上にカメラを走らせながら撮影していて、その映像は迫力満点。これこそ３Dにすべきですよ！！

　予算的に実現は難しいというのは分かってますが、そう言うところがね、実はこの映画の詰めの甘さを感じさせる部分でもあるんです。脚本にちょっと難有りかな。

　たとえば主人公があっという間にローラースケートの才能を発揮してスター選手になって行く過程。これもリアリティに欠けますね。例えば名作「ロッキー」などでは、あの屈強な体のシルベスター・スタローンが、さらにトレーニングを積み重ねて行く様が、とても具体的で説得力ある描き方にしてある訳です。そういうところをもう少し見習ってほしい感じがします。

　また、田舎町に嫌気がさす部分でも、もっと強力に田舎の嫌なところを描き切ってほしかった。

　それから、母親がなぜ自分の夢を娘に押し付けようとするのか、その説明は後半で若干述べられているんですが、問題なのは母親の悔しさなんです。

　何か、飛び切り悔しい思いをした、そう言うエピソードを挟めばさらによくなったでしょうね。

　でもでも、主演のエレン・ペイジ、まだ若いのにすごい演技派ですよ。彼女は。

　邦画で例えるなら、若い時の大竹しのぶさんみたいです。きっと将来この人は、ハリウッドで欠かせない女優になって行くんじゃないかな、と思いますね。もちろん彼女自身によるスピード

感溢れるローラースケートの実演は見物です。
　もうちょっとがんばれば、とんでもない傑作になった可能性があると思われる、この作品。
ちょっとした掘り出し物を見つけた感じです。
今後のエレン・ペイジ、そして新人監督としてのドリュー・バリモアに注目して行きましょう。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ドリュー・バリモア
主演　　エレン•ペイジ、マーシャ•ゲイ•ハーデン
製作　　２００９年　アメリカ
上映時間　１１２分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=H6AOhfYOE3s

トイ・ストーリー3

２０１０年８月２４日鑑賞

＊＊＊子供達、いろんな感想を持っていいんだよ＊＊＊

Yahoo映画レビューでの絶賛に近い高評価につられて、観に行く事にしました。映像の美しさ、緻密さ、動きの滑らかさ、さすがピクサー作品と思わせるクオリティの高さです。

もちろんストーリーもおもしろい。

かつてはおもちゃで遊んでいた少年も今や大学へ入学。彼は寄宿舎へ入るようです。そこで昔遊んだおもちゃのコレクションを「処分」する事になった。このおもちゃたち、実は心を持っているという設定。

自分たちは捨てられるんだ、さあたいへん、どうしよう。偶然に偶然が重なって、おもちゃたちが行き着いたのは保育園でした。しかし、そこは彼ら新入りのおもちゃたちにとって，実はとても恐ろしい場所だったのです。さあ、彼らの運命は？

英語版の声優には、あのトム・ハンクスが出演しているなど、やはり、この映画半端ではないな、という感じ。それぞれのおもちゃのキャラクター，性格もうまくストーリーにとけ込んでますね。今回はポテトのおもちゃの夫婦が、キーパーソンなのでしょうね。眼が取れるし、鼻が取れるし、腕や足も脱着可能という、その特徴をうまく生かして大活躍します。

アトラクションとしての楽しさは３Dという事もあり、申し分なし。存分に楽しめます。

映画好きな人から見ると、あっと、このシーンはもしやあの有名な脱走映画か？とか、あの有名な、土曜の夜にフィーバーしちゃう映画なのかな？とか、いろんな想像をかき立てられます。

それから僕がちょっと気になったのは、その根底に流れる、子供たちへの「教育的配慮」ですかね。

ものは大切にしましょう。仲間を大切にしましょう。力を合わせればなんでもできますよ。最後まであきらめてはいけませんよ。そして悪い事をしたものには天罰が下りますよ。などなど。何か、良い子に育てようとする大人の意図が見え見えなんですね。そこには、日本のジブリのお得意芸でもある、善悪のはっきりしないキャラクター設定などは、あえて行っていません。（ただし、ジブリへの敬意を表したキャラクターが登場します。）あくまでも分かりやすく、善は善であり、悪は悪なのだと言う、はっきりした価値観を押し付けられた様な気分になります。

きっとアメリカという国は子供にそう言う教育をしたいのでしょう。もちろん土台にキリスト教の絶対的な神の存在があるのはいうまでもありません。（ただし、アメリカは多民族国家である事はご承知のとおりです。宗教も多様なはずです。ああいう価値観もあり、こういう価値観もありなんだよ、とは教えていないのでしょうか？）

この作品ではそう言った説教臭さが僕にはやや強めに感じられました。子供たち、もっと迷って、自分の考えを持ってほしいなぁとおもいます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　リー•アンクリッチ
声の出演　トム•ハンクス、ティム•アレン、
　　ジョン•キューザック
製作　　２０１０年
上映時間　１０３分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=k9aJzULbOfk

２０１０年１０月５日鑑賞

＊＊＊この映画には微笑みがよく似合う＊＊＊

「アメリ」をつくったジャン＝ピエール・ジュネ監督の新作という事で、とても期待して観に行きました。オドレイ・トトゥ主演の「アメリ」は映画の神様にイタズラする様な凝った映像と、キュートなオドレイ・トトゥのキャラクターがうまく解け合って、何とも素敵な、そして斬新な映画でした。フランス映画の新しい時代の幕開けではないかと思えました。その監督の新作「ミックマック」

観終わって、大満足でした。

年間五十本ぐらい映画を観てると、やはり外れ作品というのにしょっちゅう出くわします。でも本作「ミックマック」はそんな事なかったですね。セコいですが、元は取ったぞ、という満足感でいっぱい。

ストーリーは、あやまって頭に銃弾が打ち込まれてしまった主人公が、ちょっと変わった仲間たちと武器製造会社に復讐する、というものです。なんかとても重いテーマの様に聞こえますが、確かに扱っているテーマはすごくヘビーだと思います。　武器、銃弾、失業、ホームレス、浮浪者、ゴミダメ、悪徳社長、武器商人。

この映画を語るのに、そんな単語をいっぱい使わなくてはなりません。

当然映画も暗くなるんじゃないかと思ってしまいますが，意外にもクスッと笑わせてくれる。ちょっとビターな笑い。センスのいいしゃれたオトナの笑いがあるのです。

それにフランス映画だから、普通に街並を撮影していてもおしゃれなかんじです。映画の道具として出てくる、ポンコツ三輪自動車だって、何とも味があっておしゃれな感じがする。

さて武器製造会社へ、協力して復讐をしようとする主人公と仲間たち。主人公の仲間のキャラクターが皆、それぞれどこか人の真似の出来ない一芸に秀でた人達、だけど世の中の生活にうまくとけ込まないので、ゴミ山の中に作られた、彼らの秘密基地で共同生活しているのです。

ここでの美術スタッフの頑張りは良い仕事してますねぇ、と拍手を送りたい。

彼らは復讐を実行する訳なんだけど、その作戦がもうお見事なんです。ああ、こういう落しどころがあったのか、と大納得。

何で監督はこの作品を作ったのでしょう？

監督の心情としては、きっと根っこの部分で怒りがあったんだと思うんですね。

「俺は軍需産業に文句を言ってやるぞ」と声高に叫ぶのは簡単だと思います。直接的に非難する事も出来るでしょう。でも監督は映画という、ある意味最強の武器を持って、これに立ち向かったんですね。しかもそれをユーモアを交えて笑い飛ばしてしまった。とても気分が重くなる様なテーマを扱っておきながら、観客を笑いと，おもちゃ箱をひっくり返した様な世界観に引きずり込んでしまいます。

その豊かな想像力。そう言う立場に立って映画を作っていこうとする姿勢。僕はとても好きですね。

上映している映画館は少ないようだけど、これはお勧めしたい作品です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ジャン＝ピエール•ジュネ

主演　　ダニー•ブーン、アンドレ•デュソリエ、オマール•シー

製作　　２００９年

上映時間　１０９分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=qLIaBo8FlzE

２０１０年１０月７日鑑賞

＊＊＊愛と矛盾と葛藤と＊＊＊

この作品はトルストイの晩年の私生活を描いています。
僕は作家の私生活というのに興味があって、その創作がどのように生まれたのかをを知りたいのです。どんな生活をしていて、それがどのように発想に影響を与えたのか？作家の舞台裏を覗く事で、なぜ傑作が生まれたのかを紐解く鍵が見つかるかもしれないと思うのです。
　そんな事を言っておきながら、実は僕はトルストイの作品は、ほとんど読んだ事がない。
　僕がこの作品に興味を持ったのは「クィーン」でエリザベス女王を演じたヘレン・ミレンが出演しているから。
　彼女のエリザベス女王役はほんとにすごかった。気品があって、女王としての威厳のある姿がよく似合いました。イギリス王室を背負って立つのは自分であるとの自負。そんな公務の中で、ダイアナ妃を巡るゴタゴタに女王は心を痛めます。そんな悩める女王の素顔を、そして内に秘めた悲しさを、実に的確に表現していました。
　僕はあの作品を観た時、ちょうど精神的に参っている時期だったので、実は途中で退席しました。なぜなら、映画も女優もあまりに完璧すぎたから。
　女王の悲しさが画面からこちらに伝わって来て、スクリーンが女王の涙でぬれている様に見えたのです。それぐらいヘレン・ミレンの演技は神懸かり的でした。
　その女優さんがトルストイの奥さん役を演じる。さあ、どんな素晴らしい演技を見せてくれるんだろう。期待して観に行きました。
　結論としてやはり期待通りでした。この女優さんに外れはないですね。
　トルストイはその著作で富と地位と名声を手に入れました。ところが本人は富が集中する事に反発を感じます。やがて、彼はトルストイ主義という、富とモノを所有しない運動を展開して行きます。
　彼は素晴らしい屋敷を持っています。その内装も豪華です。そこでロシアのジャムティーを飲むトルストイ夫妻。
　その豪華なティーカップ、ティースプーン、とても素敵な食器たち。そして、素敵な家具調度品に囲まれた生活を送っています。
　全ては彼の著作が売れたから手に入れられた財産です。
　ところがトルストイ本人としてみれば、こんな屋敷に住むのは不愉快だというのです。貧乏人から見れば何とも贅沢な悩みですが。
　奥さんとしてはこの生活を守りたいし、何より自分の家族、こどもたちを守りたい。
　そんなところへ、トルストイ主義に賛同し、彼の運動を推進しようとする人物が近寄ってきます。そして彼の著作権を全て放棄させる様にしむけていくのです。
　それに最も反対したのがヘレン・ミレン演じる奥さんです。
　二人は激しい対立を見せます。

　このあたりのヘレン・ミレンの演技は凄みがありました。それこそ狂気に近い様な悲しみが加速していきます。「クィーン」で見せた神懸かり演技がここで展開して行きます。
　人間は誰しも欲を持っています。
　「所有しない」という生き方を提唱するトルストイ。それを強力に推進しようとするリーダー。でもリーダーの行為の原動力になっていたのは、人々を啓蒙したい、そして自分はその運動を世に広めたのは自分なのだ、ということを世間に認めさせたい。いわば、名誉を所有したい訳ですね。なんとも矛盾した自己顕示欲の現れ。これもまた人間の欲望の一つですね。自分の中の欲望と、どう付き合うのか、それと生涯悪戦苦闘したトルストイの姿。そう言った人間ドラマを堪能出来る作品でした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　マイケル•ホフマン
主演　　ヘレン•ミレン、クリストファー•プラマー
製作　　２００９年　ドイツ／ロシア
上映時間　１１２分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=MZnkYw5ig1E

アイルトン・セナ ～音速の彼方へ

２０１０年１０月９日鑑賞

＊＊＊あなたを通して知ったF1の世界＊＊＊

アイルトン・セナのことについて何か書こうと思うのですが、胸が一杯で、何から書いていいか分かりません。思いつくままに書いてみましょう。

僕は社会人になってからモータースポーツに興味を持ちました。たまたまその時期に日本人初のフルタイムF1レーサー、中嶋悟さんが登場。チームはロータス・ホンダでした。

そのチームパートナーがアイルトン・セナでした。

何せ、初心者だったので、マシンのこと、F1のこと、何も分かりません。一生懸命本を読んだり、雑誌を読みあさったりしてF1のセカイにどっぷりのめり込んでいきました。

日本で初のF1グランプリ。チケットはとっくに完売。鈴鹿サーキットに直接電話したら、初開催国なので、金曜の練習走行の前日、木曜日にF1マシンがテスト走行で走り始めるとのこと。もう、いても立ってもいられません。会社に無理を言って休み、自分でいそいそと弁当を作り、リュックを背負い、神戸から鈴鹿へ向け、中古のオンボロバイク、スズキのカタナ２５０ccにまたがり、ひたすら鈴鹿サーキットに向かいました。

当時３コーナーと呼ばれていた、Ｓ字の手前の土手に座り、ストップウォッチを二個首からぶら下げて、F1の走る姿を眼に焼き付けました。その時思ったのは、

「ああ、この人たちは神様から早く走る才能を持たされた人達なのだな」ということ。

いきなり異国での、しかも初めてのサーキット。

そこを走る彼らの美しい芸術的ともいえるライン取り。

今でも、眼に浮かびます。

その中で特に印象に残ったのはアラン・プロストという人の美しい走行ラインでした。

「SUZUKAを早く走るには、このラインしかない」

そのラインをいきなり一発目の走行からやってのけたのです。

レース初心者が百回走行しても覚えられるかどうか、というラインを彼はいきなり綺麗にトレースしたのでした。

僕はタイムを計測しました。１分４３秒。

隣でそれを見ていた人が「申し訳ないけど、それは何かの間違いでしょう。」

僕も「そうですよね。多分押し間違えたんでしょうね。日本のF３０００より、１０秒も早いのは、おかしいですよね。」

おまけに今日はあくまでもテストドライブ。本気を出して走ってもいないのです。

どう考えたって馬鹿げたタイムだと思えました。

ところが、

土曜の予選通過タイム。

トップのゲルハルト・ベルガーは１分４０秒９８４。

僕たち日本のモータースポーツファンは、改めてF1の圧倒的な早さを目の当たりにしたのです

。
　そのF1の世界で、人気実力共に別格の存在がアイルトン・セナでした。
　セナは日本が大好きでした。ホンダエンジンに乗ってくれたことはうれしかった。
　本田宗一郎さんご夫妻を日本のパパ、ママと呼んでいたといいます。
　ホンダとの別れのとき、セナはヘルメットに日本国旗を付けて走ってくれました。
　本当に日本，日本のファンが大好きだったアイルトン・セナ。
　確か，３度の世界チャンピオンも鈴鹿で決定したと記憶していますが，セナ自身、鈴鹿は特別な場所だと生前語っていました。
　このレビューはF1日本グランプリの日に書いています。もしかするとセナが空から見守っているかもしれませんね。みんないい走りを見せてほしいものです。
　そう，本作でも取り上げられているレースのセカイでの政治やお金のことなんか忘れて、レースという「スポーツ」を楽しみましょう。
　最後に，アイルトン、君がいた頃のF1を、リアルタイムで観る幸運に恵まれたことに，本当に感謝しています。あんな素晴らしい人間ドラマを観ることが出来るなんて。ぼくは本当にいい時代にF1に巡り会えました。
　ありがとうアイルトン・セナ。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　アシフ•カバディア
主演　　アイルトン•セナ
製作　　２０１０年　イギリス
上映時間　１０８分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=qcMXh5mrvm0

レオニー

２０１０年１１月３０日鑑賞

＊＊＊想いを込めた絵画のように＊＊＊

映画を観るというのは「眼の楽しみ」という事もあると思う。画面いっぱいに美しい絵が広がるというのはいいものである。
人によっては迫力あるアクションシーンが好きな人もいるし、ホラーを大画面で楽しむ人もいる。
松井監督は絵画の様に風景をスクリーンで切り取って観客に見せる。
この作品はイサム・ノグチという芸術家の母の半生を描く。女性監督ならではの、きめ細やかな女性の心理描写、また女性特有の図太さや大胆ささえも描き切っている。
ただ、松井監督の男性の描き方、特に主人公レオニーの恋人、中村獅童さんの描き方はちょっと掘り下げ不足の感じも残る。
レオニーはこの恋人の子供を身ごもってしまう。その子が後のイサム・ノグチである。母と成った女性の強さ、というのはやはり子供を守ろうとする母性本能そのものの強さなのだろうか。その生き方の力強さ、その根っこの部分を松井監督は描いてみせる。
やがて日本に移り住んで来たレオニー。三角形のいびつな土地を気に入って、ここに家を建てようとする。その設計をわずか１０歳の息子イサムに任せてしまう。彼女は息子の天性の才能を見抜いていたのだろう。いびつな土地にやがて見事な家が完成する。出来上がったばかりの家の二階に、うれしそうに登っていく母と息子。
「ママへのプレゼントだよ。」そう言ってイサムは母親レオニーのために特別に作った窓を見せる。このシーンは特に印象に残った。
なお、この家を作る大工の棟梁役に久々の登場、大地康雄さんが出演しているのもうれしい。
作品全編を通して、ある一人の女性、その力強い生き方を描きたいという、松井監督の熱い想いがスクリーンの隅々まで行き届いている。こういう作品はなかなか出会えるものではないと思う。この作品には七年の歳月をかけたと聞く。その創作の姿勢に、胸が締め付けられる思いがする。こちらも背筋をしゃんとしておきたいと思った。久々に力作と言える作品を、自分は観たのだと確かに実感した。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　松井久子

主演　　エミリー•モーティマー、中村獅童、原田美枝子

製作　　２０１０年　日本／アメリカ

上映時間　１３２分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=pljvFUalebU

２０１０年１２月３日鑑賞

＊＊＊そのワインに命の味はしていますか？＊＊＊

ニキ・カーロ監督には「クジラの島の少女」という作品で、一つ教えられた事がある。「キャスティングは映画に奇跡を起こす」という事だ。ケイシャ・キャッスル・ヒューズというマオリ族の血を引く少女。主演女優である彼女の青春期の一時期でしか撮れない多感な時期の表情を、ニキ・カーロ監督はフィルムの中に閉じ込めた。
あの映画は正に奇跡の映画だったと言える。
そのケイシャ・キャッスル・ヒューズとニキ・カーロ監督が再び組んで映画を作る、という事で相当な期待をして観に行った。
全体を通して、やや演出面でインパクトに欠けるなぁというのが率直な印象である。でも監督独自の目線がとても光る部分がいくつもある。
主人公は葡萄を作っている。ワインを作るためだ。彼はある夜、天使と出会う。彼は天使が教えてくれた通りのやり方で葡萄を作り始める。その葡萄から作ったワインは、やがて大評判となり、彼は成功を収めるのだが……というストーリー。
　実は、現れた天使が普通の天使ではなかった、という視点がおもしろい。さらにもっと興味深いのはニキ・カーロ監督の絵作りだ。
　ワインの元となる葡萄。それを作るのは人間の手と土なのだ。そう。土のこびりついた手。節くれ立ったざらざらの手が、何とも神々しくスクリーンに映える。
　農民の手を映すだけで、すでにこれは一つのストーリーに匹敵するぐらいの説得力がある。
　天使は、いいワイン作りのためには、葡萄を痩せた土地に植えろと教える。痩せた潤いのないカサカサの土地。そこにやがて生えてくる葡萄の苗木の力強さ。
　監督の目線は更にその痩せた地べたを這いずり回る。
　小さな小さな昆虫や、ミミズまで映し取ってみせる。
　痩せた土地であっても、生命は何ともいじらしく生きているのだ。
　これらの小さな生き物たちの排泄物まで取り込んだ土から，葡萄は養分を吸い取る。その葡萄から生まれるワイン。
それは生き物の味。そして作り手の人間の味がするのだ。そう言う味わいをスクリーンに表現してみせる監督。
　このような土臭さが漂う絵作りといえばエミール・クストリッツァ監督が思い浮かぶ。ちょっと牧歌的で、そのくせ，政治は不安定で、それでも人と家畜はノンキに暮らしている。そう言う東欧の農家を描くクストリッツァ監督も僕は大好きだ。
本作ではニキ・カーロ監督が自分なりの土臭い絵を描こうと、もがいている姿が垣間見える。
正直物足りなさを感じる映画なのだが、まぎれもなく監督の悪戦苦闘ぶりが見える作品作りだった。
かつてイエスは「これは私の血だ」と言いつつ弟子たちにワインを注いだと聞く。宗教とワイン

の関係に少し踏み込むかの様な表現さえ、この映画にはある。
　しかし何よりワインを作る農民の手と血の味、生き物たちの命の味がスクリーンから伝わってくる作品なのである。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ニキ•カーロ
主演　　ジェレミー•レニエ、ギャスパー•ウリエル
製作　　２００９年　フランス／ニュージーランド
上映時間　１２６分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=NkC41nwi5lg

２０１０年１２月９日鑑賞

＊＊＊それでも彼らはアメリカを選んだ＊＊＊

それはとても不思議な光景だった。
第二次大戦中、ドイツに占領されていたフランスのある街を、アメリカの兵士達が解放した。
市民達は、彼らアメリカ兵を熱狂的に歓迎した。
大通りの両側にはフランス国旗、ハンカチや、花も振られている。
その大通りを整然と行進するアメリカ兵士達。
彼らの軍服は数々の戦争映画でボクタチが見慣れた、あのラフな感じのヘルメットであり、少しくすんだオリーブ色（かつてミリタリーのプラモデルをよく作っていたのでオリーブドラブという色の名前は覚えた）である。持っているライフルや機関銃も見慣れたアメリカ軍のものである。
ただ、ひとつだけ彼らが普通のアメリカ兵と違う所がある。
背が低い。そしてヘルメットの下にある顔は、明らかに日本人なのだ。
彼らこそ伝説の日系人部隊４４２部隊の兵士なのだ。
アメリカ政府は日米開戦をきっかけとして、日系アメリカ人を（国籍はもちろんアメリカ）危険だとして人種隔離政策を行った。
山の中に収容所をつくった。
アメリカ市民でもある、彼らジャパニーズ•アメリカンの財産をすべて没収した。
持ち込める荷物はカバン一つ。
何もかも失った日系アメリカ人たち。
彼らジャパニーズ•アメリカンの人達は、それでも祖国はアメリカであると覚悟を決めた。
　なぜなんだろう、僕にはそこがいまひとつ、腹にストンと収まらない。もちろん、一世の人達と、二世の人達との葛藤があった。ひとつの家族の中でも、自分は日本人として生きるか、それともアメリカ人として生きるのか，その意見が食い違う。
家族を引き裂く様な、あまりに過酷な選択を強いられたのだ。
二世の多くはアメリカに忠誠を誓い、それを証明するために，未来ある若者達が軍に志願していった。
後にその部隊はアメリカ陸軍史上、空前の活躍を見せる。
しかし、彼らは戦時中、全く世間的には評価されなかった。
イタリア、ローマの街を彼らが解放に導いたとき、真っ先にローマに凱旋したのは、後方にいた白人部隊だ。そして日系人部隊はすぐに別の戦地に配置換えされる。
「手柄はあくまでも白人部隊に」という、この政治的配慮の卑劣さは、映像を見ているこちらまでも唇を噛み締めたくなる。
４４２部隊については、その戦死者、負傷者の数でも飛び抜けているそうだ。
ほとんど全滅に近い死傷者を出し、それでも果敢に突撃しドイツ軍相手に勝利した中隊もある。

その悲惨で英雄的な戦いを生き残った兵士達。
彼らは、そのあまりの悲惨さな戦いについて、多くを語ろうとしない。
ただ平和に、静かに、いまの生活を送っている。
家族の愛、子供や孫達に囲まれて、ゆったりとした生活を送る、いまは年老いたかつての兵士達。
彼らは本作の中のインタビューにぽつり、ぽつりと答える。
彼らの信じがたい戦いは、静かな、そして深く重い悲しみの表情で淡々と語られる。
かれらの存在は、アメリカの歴史の一部そのものだとおもう。
戦後、アメリカ政府は、ジャパニーズ•アメリカンを差別し、迫害した事を正式に謝罪している。
彼らには平和に生活する権利が保証された。ようやく彼らは「本物の」アメリカ市民であると認められた。その権利のためにどれだけの命が捧げられたのか。
彼らジャパニーズ•アメリカンは、なぜここまで悲惨な戦いをしなければならなかったのだろう。
これが運命というものなのか？
そのあまりの現実の重みに僕は押しつぶされそうになった。
上映が終わり、僕はしばらく席を立てなかった事を告白する。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　すずきじゅんいち
主演　　アメリカ陸軍４４２連隊元兵士達
製作　　２０１０年　日本／アメリカ
上映時間　９７分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=tbO6K_Ig7Y4

英国王のスピーチ

２０１１年３月３０日鑑賞

＊＊＊王になりたくなかった国王＊＊＊

アカデミー賞に輝いた作品という事で観に行ってきました。
運命とでも言えるのでしょうか、望んでもいなかった英国王という地位に就かされてしまった、ある男と、その家族の物語と言えば良いでしょうか。
彼にはあるハンディキャップがありました。
人前で喋ろうとすると極端に”どもる”のです。
でも立場は王室のメンバーです。厳格な父親からは公的の場所に出る様に言われ、嫌々ながらスピーチもやらなけれならない。
ちなみに自分は次男。本来なら英国王は長男が継ぐ。
一旦は長男が英国王となりますが、あろう事が、道ならぬ恋のため、長兄は英国王の地位を放り出してしまったのです。
さて困った。
次男は英国王としての教育なんぞ受けていない。
おまけに時は第二次大戦直前の、風雲急を告げる大きな時代の変わり目でした。
さて、王となった一人の人間はどのように、時代の大波を乗り越えて行ったのか？　というストーリーです。
　この作品、英国王という地位に無理矢理就かされてしまった一人の男の、悲哀に満ちた物語をちょっとユーモアを交えて描いて行きます。
　印象的だったのは子供たち。
　女の子が二人います。利発そうな可愛い長女。この子が現在のエリザベス女王な訳です。
　親と娘の関係から、突然、国王と王女という関係に変化します。
　自分の娘の口から「陛下！」という言葉をかけられ、彼が愕然とするシーンがあります。
　彼の立場を端的に現す良いシーンでした。
　奥サマ役がいいですね。全然気取りがなくて、一般庶民への接し方も全然高飛車じゃない。こんな奥さんがいたら、心強いでしょうね。懐の深い女性、夫を気丈夫に支えて行く妻を演じております。
　夫のどもりを治すために彼女が探し当てたのが、全く知名度もない下町の言語療法士。
　やがて先生と患者と言う付き合い方を超えた、友情を育む二人の関係も興味深いです。
　イギリスがドイツとの戦争を始めると言う正にその時に、人々を一つにまとめ、イギリス国民を鼓舞した国王の、隠れたエピソードを扱ったこの作品。
　アカデミー賞うんぬんはもちろん注目される原因ではあります。正直、僕の率直な感想としては、果たしてそこまでの作品か？　という疑問は残ります。出来のいい優等生的な映画の作り方なんですね。そこが逆に僕にはちょっと気になりました。
　あくまで一人の人間を描くというスタンスは、全くぶれなかったという事で、評価すべき作品

と言えると思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　トム・フーパー

主演　　コリン•ファース、ジェフリー•ラッシュ、
　　ヘレナ＝ボナム•カーター

製作　　２０１０年　イギリス／オーストラリア

上映時間　１１８分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=uS3SWKfQZh0

SUPER 8/スーパーエイト

２０１１年６月２８日鑑賞

＊＊＊少年達のスーパ–８は全てを見ていた＊＊＊

八ミリ映画に夢中な少年達。
彼らが夜中に無人の駅で映画を撮っていた。（ちなみに彼らが使っているコダック社製カセット式８ミリフィルム、それが別名「スーパー８」と呼ばれています）そこへ遠くから列車が来る。
監督役の少年が眼を輝かせますね。
「良い絵が撮れるぞ！」
きっとかつてのスピルバーグ監督や、本作の監督も、八ミリキャメラ片手に、わくわくしながら撮ってたんじゃないでしょうかね。
でも、それがとんでもない大惨事を記録してしまうことになるとは。
事件はそこから始まります。
この作品、画の撮り方が実に良いんですね。少年達が八ミリフィルムを映写する。その青い光の筋。そこをちゃんと映しますね。それがいいですね。そしてスクリーン代わりの壁を見つめる少年二人。そこに映ってしまったものは……という具合にサスペンスを感じさせるうまい演出がなされています。
主人公である、保安官助手の息子、そしてだらしないダメ親爺の綺麗な一人娘。その二人の淡い恋模様。親同士は反目し合っている。
二人はまるでロメオとジュリエットの関係ですね。
少年少女達の心の揺れ動きや交流、又、大人達への不信と反抗。
それはあの名作「E・T」を彷彿とさせます。
それに加えて「ジョーズ」のような、じわりと迫り来る恐怖の演出。これもうまいです。
この作品の監督J・Jエイブラムスはきっとスピルバーグへの敬愛の意味も込めたのでしょうね。
なつかしのスピルバーグ作品へのオマージュが一杯詰まった面白い作品に仕上がりました。
上映時間は二時間を切ります。でも息つく暇もない、実に濃密な時間を楽しめる作品だとおもいます。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ

監督　　Ｊ・Ｊ・エイブラムス
主演　　ジョエル・コートニー、エル・ファニング
製作　　２０１１年
上映時間　１１１分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=iN02uC9mu2o

２０１１年８月１日鑑賞

＊＊＊ぼくはこの学生達を嫌いになれない＊＊＊

あの有名な曲「いちご白書をもう一度」の元ネタになった映画ですね。
皆さんご覧になったことがありますか？
僕は確か子供の頃に一度観た様な記憶があります。
レンタルビデオ店には置いていない。ところが、行きつけにしている近所の母校大学のライブラリーにひっそりとあったのです。レーザーディスクと言う絶滅した記録媒体で……
主人公はボート部で毎日練習に明け暮れる、ノンポリ学生。
このノンポリという言葉自体、今では絶滅していますな。
一部の学生達が、大学の民主化や黒人学生を受け入れろ、戦争反対を訴えて学長室に立てこもっていた。学内は騒然としている。全学ストライキのため授業はなし。
ただ、学内占拠やストライキに反対する学生達もいた。占拠している学生達を共産主義者「アカ」呼ばわりした。
　主人公のノンポリ学生はただ、気になっていた女の子がその学内占拠に関わっていたのでちょっと覗きにいく。そこから彼は学生運動にはまり込んで行くというストーリー。
　僕はこの映画で描かれる、学内占拠をした学生達を嫌いになれない。
なぜなら彼らは自分達の意志で、自分たちの大学を良くしよう、という目的意識を持っていたから。
　かつての日本の学生運動が、結局、政党の下請け組織として発足したこと、そう言う機能しかなかったことに、僕は大きな幻滅を感じる。
　もちろん当時の学生もそれに反発し幻滅した。だから多くの分派が生まれた。
やり場のないエネルギーは、やがてあさま山荘事件で膿みが吹き出し、そして潰れた。
惨めなもんだ。内ゲバ、総括と言う名の人殺し。
学生達のはしかに罹った様な熱気は、その冷酷な現実の前に嘘の様に冷めた。
　僕が大学に入った頃は１９８０年。すでに学生運動は過去のものだった。
　ある先輩はこう言った。
「大学はレジャーランドだ。」
　確かに大学生活は最高だった。
　興味のある授業に顔を出し、ちょっとアカデミックな雰囲気を味わい、有り余る時間をバイトに当てたり、女の子と遊んだり、夜ごとに酒を飲んで宴会をやっていたりした。
　一年だけ学生自治会の委員長をやったことがある。誰も立候補するやつがいなくて、クラス委員をやっていた僕は、頼み込まれて選挙に出た。
　立候補は僕だけ。
　結局信任ということで委員長をやることになった。
　まぁ、生徒会の延長の様な、のどかな自治会だった。自治会ボックスの天井には松田聖子のポ

スターを張っていたぐらいだから。
　年間スケジュールはマンネリ化していて、シーズンになれば判で押した様な学費反対運動をやり、印刷機を廻し、ビラを配る。他愛もない子供の遊びの様な時間だった。団体交渉の席、学長室で秘書に出されたお茶を飲みながら、
「オレ、こんなことやってたら就職先ないよなぁ」等と思ったりした。
まぁ、でもこつこつと頑張って一年間活動していると、色んな成果が出始めた。なかでも、ぼくたち自治会が、図書館にエアコンを設置しようと署名活動を始めた事は、大学運営そのものをゆっさゆっさと動かした。そして、年間活動資金１３０万円の自治会が総額一億円のエアコンを設置させる事に成功した。このニュースは県内の学生自治会を駆け巡った。僕たちちっぽけな学生自治会は一躍注目の的になった。そのリーダーであった委員長の僕に早速キョーサン党からお声がかかる。僕は拉致され、とあるアジトに連れて行かれた。ミンセー同盟とやらに入ってくれというものだった。
政党の下請け組織なんてまっぴらご免だった。
しょせんこいつらも中央からの指示にヘコヘコ従っているだけの、組織の末端の人間なのだと思うとうんざりしたもんだ。
僕は５時間程粘られたが、結局断った。
今、僕の母校の大学には学生自治会はない。
新聞会の若い学生に「どうしてなくなったのか」と聞いたけど
「さあ？」という返事しか返ってこなかった。
彼らはマンガの「ワンピース」を読むのに忙しかった。
まあそんなもんだ。
さて、いちご白書である。誰が今どきこの映画を観るのだろうか。
映画作品としてあまりにも若く、ほとばしる様な若者の表現で作られた映画である。監督は製作当時２８歳だったそうな。もう表現したくてうずうずしているのがよく分かる。カメラのピントはギャンギャン動かしまくるし、カメラ自体も手持ちで動かしまくる。監督自身が酔ったかの様に、熱にうかされて撮影しているのがこちらに伝わってくる。若いのだと言ってしまえば身もフタもない。
　そのカメラをおもちゃの様に動かしまくり、いじくり回すその若さ、情熱こそがこの時代の若者そのものを雄弁に物語っている様な気がしてならなかった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆
映像　☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　スチュアート・ハグマン

主演　　ブルース・ディヴィソン、キム・ダービー

製作　　１９７０年　アメリカ

上映時間　１０３分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

「いちご白書」「ひまわり」の２０１１年予告編です。

http://www.youtube.com/watch?v=3cFIKS9IZyo

猿の惑星:創世記(ジェネシス)

２０１１年１０月１０日鑑賞

＊＊＊彼らの「NO！」をどう受け止めますか？＊＊＊

久々に骨太なメッセージ性を持った作品に出会った。もちろん映画というのはエンターティメントの一種だと思う。そのエンタメ部分と、作り手のメッセージをどのようにブレンドさせるのか？　その辺りが作り手の腕の見せ所なのだと思う。

この作品はそう言う意味では、絶妙のブレンド加減を味あわせてくれる秀作だと思った。

確か僕が小学生の頃だったように思う。「猿の惑星」と言う映画はあまりにもショッキングな作品だった。当時、世間の話題をかっさらった。

何せ地球はサルに乗っ取られ、あげくの果てに人類は、サルに実験動物のように扱われていたのである。

主役のチャールトン・ヘストンの名演が今も瞼に焼き付いている。そして衝撃のラストシーンも……。

それから４２年経った今作られた本作「猿の惑星：創世記（ジェネシス）」は、そのサル達がなぜ地球を乗っ取るまでになったのか？　そのきっかけの部分を描くものだ。

時代設定も現代になっている。アルツハイマー治療薬の実験台として、薬を投与されたチンパンジー。その子孫が異常なまでに高い知能を発揮する。そのチンパンジー「シーザー」は、心優しい研究員に引き取られて成長して行くのだが、やがてシーザーはある事件を起こしてしまう、というストーリー。

このチンパンジーの赤ちゃんが成長してゆく光景は、とても微笑ましい。

ちょっと牧歌的ともいえる飼い主との日々。映画を見ているこちらまで、なんだが心がほっこりしてくる。

CGをうまく使ったチンパンジーの造形はお見事。ところが、映画も中盤から後半にかけては、そのメッセージ性が鮮明になってくる。作品そのものに「怒り」の表情が現れてくるのだ。

事件を起こした「シーザー」が収容された施設での虐待。

「馬鹿サルめ！」と吐き捨てるようにいう職員の傲慢さ。

シーザーの飼い主である研究員が勤務する製薬会社。その実態。

人を病から助けるための新薬。そのもう一つの顔は、実は莫大な富を生み出す「打ち出の小槌」でもあったのだ。

だから役員は他社よりも早く新薬を完成させようと急がせる。新薬の安全性を確かめることよりも、利益を優先させる経営者のどん欲さ。なんだかここに出てくる人間は、嫌なヤツばかりなのだ。

この映画でのクライマックスは、チンパンジーの「シーザー」がサル達を代表する形で人間に「ノー」を言うシーンだ。

それも断固とした「NO！！」なのだ。

「もう俺たちは人間の思い通りにはさせないぞ」

そう言う「ノー」を彼らはアピールする。
それは今まで弱者だったものが、強者に発する「NO!」という風にも僕は読み取ってしまった。
丁度いま、アメリカでは貧困層が怒りを爆発させている。
なぜ１％の富裕層のために、９９％の持たざる者たちが我慢しなければならないのか？
それこそ断固とした「NO!！」を彼らは世の中に訴えた。
僕にはこの「猿の惑星：創世記（ジェネシス）」という作品が、その虐げられたものの断固とした「NO！！」という叫びを代弁している様な気がしてならない。
そしてもっと大きな眼で見れば、地球を自分たちの好きなように扱っても良いのだ、という人間の思い上がりを、強烈に批判するメッセージをもった映画に思えるのだ。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ルパート・ワイアット
主演　　ジェームズ・フランコ、フリーダ・ビント
製作　　２０１１年　アメリカ
上映時間　１０６分
予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=Lrikt6pZ0Qo

ブラック・スワン

２０１１年１０月１６日鑑賞

＊＊＊エロスとアートはピルエットのように＊＊＊

見逃していたこの作品。是非観てみたいと思っていました。上映してくれた神戸のパルシネマさんに感謝です。

　ナタリー・ポートマンのバレリーナは素晴らしかったです。
吹き替えを使ったとしても、それ以外の部分でもかなりトレーニングを必要としたんだろうと思います。

　観終わって感じたのは、ちょっと映画の作り方として気負いすぎたかなということ。もうちょっと演出控えめでも良かったんじゃないかな。

　というのも脚本がとてもいい出来だからです。このストーリーならきっと、固定カメラでどっしりと撮って、編集も細切れにしなくても充分面白かったと思いますね。
バレエ団の新旧のプリマの交代。それを巡る団員同士の火花が散る様な女の闘い。その辺りがうまく描かれていると思いました。

　僕はバレエが大好き。外国映画やオペラにしても、やっぱりコトバで伝える部分が大きい訳で。だから字幕が必要になる。

　でもバレエという芸術は、身振り手振りのマイムだけで伝えられる。きっと音楽や絵画なんかと同じで、バレエも世界共通語の芸術なんだと思います。

　ただ芸術を極めようとするとき、その世界はやはり厳しいもんだなぁと思わされます。プリマの地位を得るために、日頃から練習に励み、ダイエットもし、ときには女として舞台監督とベッドを共にするのもいとわない。

　そこまでしてでも欲しい、プリマドンナという地位。

　彼女達の目指しているところは何なのでしょうか。何処まで自分を犠牲にしていいんでしょうか？

　この作品を観ながら気づいた事があります。彼女達はバレエそのものが仕事だったんだと。

　彼女達の生活はバレエ中心で動いている。地位と名声そして生活の糧もバレエから得ている。

　映画の中で事故に遭うバレリーナがいますが、その後ろ姿の淋しい事。足に大怪我を負い、もうバレエダンサーとしては生きていけない自分。彼女の悔しさや無力感がよく表現されていました。

　ナタリー・ポートマンのバレエダンサーとしての姿はもちろん美しいです。それだけでなく、プリマの地位を射止めた彼女がそのプレッシャーのあまり心と神経を病み、幻覚を見るシーン等、眼が釘付けになってしまいます。正に迫真の演技でした。

　また本作ではエロティックなシーンがかなりあります。

　バレエ団の芸術監督は彼女に何を求めていたんだろうか？　とちょっと僕には不可解でした。彼女の女としての体が欲しかっただけなのか、それとも「白鳥の湖」という作品の中にエロスを読みとって、彼女にそれが欠けているからこそ、無理強いしようとしていたのか？　その辺りが

実に微妙な所なんであります。
　バレエ団の芸術監督が言います。
「キミの演じる白鳥は最高だ。しかし、君には黒鳥は演じられない」
　どうしたら黒鳥の感情を表現出来るのか？
　どうしたら”本物”の黒鳥の演技ができるようになるのか？
　彼女はもがき苦しみます。
　彼女が採った方法、それは自らを汚す事でした。
　芸術監督はその彼女をうまく利用しようとします。
　芸術と言う仮面を被ったオトコの欲望。
　何処までが芸術で、何処からがエロスなのか？　実に混沌としたセカイがこの映画には描かれています。
　エロスは時に美しいアートにもなり、アートは時にエロスを求めます。
　アートとエロスという、まるでコインの裏表の様な関係。エロスとアートはバレエのピルエットのようにくるくる回ります。
　もうそれは一つのフォルムとなっているかの様です。芸術って何とも残酷だなぁと思ってしまいました。
　リアルなバレエ団員達はこの作品を観て何を思うだろう？　是非意見を聞いてみたくなります。あなた方はここまでバレエに身を捧げてしまうのですかと。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ダーレン・アロノフスキー
主演　　ナタリー・ポートマン、ヴァンセン・カッセル
製作　　２０１０年　アメリカ
上映時間　１０８分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=pxchkvE2NFU

ジュリエットからの手紙

２０１１年１０月１８日鑑賞

＊＊＊５０年の時を隔てたイタリアの恋物語＊＊＊

イタリアは一度でいいから行ってみたいと思う。僕のあこがれの国だ。

　人々が働くのは、何よりも家族を大事に思い、大いに食べて飲んで、暮らしを、そして人生そのものを楽しみたいから。イタリアの美しい建築物はその人生の舞台。カラーコーディネートのお手本の様な街並。そこに住む人達の美的センスの高さ。

　この作品の女性主人公ソフィーはニューヨークに住んでいる。某有名雑誌社の調査員だ。いつかは自分も一人前のライターになりたいと、掲載されるあてもない記事を書き連ねている。彼女やその周りの人の仕事ぶりは、いかにもニューヨーカーである。

　そんなソフィー以上にせせこましくて、忙しく働いているのが彼女のフィアンセである。もうすぐ結婚するというのに、彼は自分のイタリア料理店をオープンさせる準備で夢中なのだ。

　そんな二人が婚前旅行でイタリアのヴェローナに行った。そこで彼女が目にしたのはジュリエットの館。あのロメオとジュリエットの物語の舞台。そこには世界中の女性が訪れる。そして恋の悩みや願い事などを書き連ねたメモを、壁に貼付けて行くのである。その悩みの手紙には、なんと返事が届くようになっている。

　近所の世話好きのおばさん達が、せっせと返事を書いているのだ。それを知ったソフィーは、自分も返事を書くのを手伝ってしまう。彼女はその壁の中からひとつの古い手紙を発見する。それは紙も茶色く変色した５０年前の手紙だった。彼女は丁寧に返事を書いた。するとあろうことか、その５０年前の「少女」クレアが、イケメンの孫を伴ってジュリエットの館に現れたのだ。ソフィーは手紙を書いた責任を感じ、５０年前の恋人を捜す旅に出かけるのだった。

　と、ここまでがこの映画のエピローグである。この後ロードムービー仕立てで映画は進行して行く。その訪れる先々のヴェローナ地方の美しい風景も楽しい。イタリアのお母ちゃん達はうまそうな料理をしこたまこしらえる。そのパワフルな姿に微笑ましくなってくる。

　作品の終盤になって気づいたが、この作品もしかすると、あの「幸せの黄色いハンカチ」をモチーフにしているのでは？　と思ってしまった。

　まぁその辺りは皆さんご覧になってご自分でご判断頂きたい。

　「恋愛に年齢は関係ないんだよ」

　「恋するチャンスは逃しちゃダメだよ」とイタリア的な楽観主義と、大らかなハートで、この作品は観客に語りかけてくる。

イタリア大好きな人や、ハッピーな気分になりたい人にはおすすめの楽しい作品だ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ゲイリー・ウィニック
主演　　アマンダ・セイフライド、クリストファー・イーガン
製作　　２０１０年　アメリカ
上映時間　１０５分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=-XVteMJCuB8

２０１０年１月２３日鑑賞

＊＊＊男ってデリケートな生き物なのよね＊＊＊

行定監督は、映画を絵としてとても美しく撮る監督さんだなぁ，というのが第一印象.

何気ない室内の風景にしてみても、とてもいい雰囲気がある。特に，豊川悦司が雨の夜，ベッドの上で，ひとり物思いにふけるというシーンなどは、窓からしたたる雨の模様が部屋の中に陰になって模様を作り，とても美しいと思った。固定カメラを多用しているのも僕の趣味と合う。

主人公のダンナの方は、かつては売れっ子カメラマンだった。プライドが高く，今はたまにスーパーのチラシの写真を依頼されることもあるがそれも助手にまかせてしまう。

彼は人物しか撮らない主義なのだ。

なお，カメラマンの助手役に濱田岳。

この小柄で、なで肩のおもしろい役者さんをよく使ってくれたと思う。僕は大好きな役者さんである。

さて，奥さんの方は，健康オタク的な人で、ニンジン茶なんかにハマってる。ダンナが食事のときトマトを食べないと，トマトに含まれる栄養素リコピンの説明を延々と始めてしまう様な人だ。よく忘れ物をする，天真爛漫な奥さんである。この二人に子供はまだない。

奥さんは子づくり旅行と称して無理矢理ダンナを沖縄まで引っ張り回すが，ダンナの方は浮気相手の方に心を奪われていて、沖縄旅行どころではない。

実は奥さん、ダンナの浮気を何回も見破っていて、そろそろ離婚も真剣に考えている。

まぁ，これがこの物語の設定であります。

奥さん役の薬師丸ひろ子さんが，天真爛漫なかわいい奥さんを演じていて，好印象。写真以外は取り柄のない，グータラで浮気性でダメダメなダンナを豊川悦司が演じている。

実はこの映画、脇役がとてもいい。

先ほどの濱田岳、それに恋人役の水川あさみ。井川遥もチョイ役で出演している。

そして、なんといっても一番ハマっているのが、石橋蓮司氏である。オカマ役です、これが。

まさかこの人がオカマ役をやるなんて、と思っていたら、これがもう「その道で何十年も食ってる」ようなオカマさんを見事に演じきっていて，役者の表現力ってすごいなぁと改めて感心した。

この映画の特徴は極めて少ない出演者で、ほぼ最高の効果を上げたことだ。

ほとんどのシーンは室内で二人芝居であり，多くても、そこに助手とその恋人，オカマさんが加わってくるだけだ。たぶん、舞台用の脚本を映画にしたのではないかと思う。

エキストラもほとんど使っていなくて、前半部分など、ほぼ夫婦の会話だけで成り立っている。

この前半部分は夫婦ならではのクスッと笑える会話が多くて僕は大好きだ。

この映画、ぜひ、ご夫婦揃って鑑賞される事をお勧めします。

多分これを観たダンナの方は、きっと奥さんにかなりいびられると思うけどね。

まぁ，ダンナの方は覚悟しておいてください。
　後半部分に来ると一転して物語は「泣き」の映画に変わってくる。このあたりは「セカチュー」をつくった行定監督のお得意芸なので、うまいぐあいにホロリとさせられてしまう。劇場でもあちこちからすすり泣きの様子が感じられた.
　このあたりの演出は泣かせてやろうというわざとらしい面もあるけど、それでも泣かされてしまうのは、やっぱりうまいんですねぇ。
　映画全体を通してみるとこの映画、脚本が実によく出来ていることと，キャスティングが絶妙。
　とくにオカマ役に石橋蓮司氏を抜擢したのがクリーンヒット。
　ここに出てくる人物，特に男性陣はどれもダメダメで，悪ぶってはいても、それでも純情で、思いでにすがってみたり，恋人を盲目的に信じてみたり、いつまでも過去を引きずっていたり。とても、か弱い存在として描かれている。
そこがまた，それぞれの人物像がとても愛おしいものとして感じられるんですね。
　女から観れば、オトコってつまんないことにいつまでもくよくよこだわっていたりする。それで気持ちを萎えさせてしまうこともある。石橋蓮司氏演じるオカマさんがいう。
　「男って案外デリケートなのよね」
　そう，もともと男というのは生まれつきダメダメな部分を持っていてデリケートで傷つきやすい。
　この映画を観た，全国の奥様に申し上げたい。
　実はダンナというのは、か弱く、傷つきやすい存在なのですよ。大事にしてあげてね。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　行定勲
主演　　豊川悦司、薬師丸ひろ子、石橋連司
製作　　２００９年
上映時間　１３１分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=w6hDMA4Qcqc

ゴールデンスランバー

２０１0年2月４日鑑賞

＊＊＊スピード感溢れる極上サスペンス＊＊＊

劇場型犯罪という言葉があるけれど、これはまさにえん罪からの逃走劇をエンターテイメントに仕上げてしまった作品。
ヒット作を連発する伊坂幸太郎氏の原作を元にしているので、ストーリーは抜群におもしろい。
　なおかつ、このストーリーって、映画監督にとっては、おもわず映像化してみたくなる作品であるということだ。
　ハイライトシーンがいくつもある.
　首相の爆破暗殺シーン、えん罪に仕立て上げられた主人公の逃走シーン、学生時代、アルバイトで花火イベントに参加したシーン、また、逃走シーンは地下へもつづく。
　追いつめられいよいよ投降かという場面。
　次から次へと新たな仕掛けが用意されているドキドキの極上サスペンス。
　でも，ダイハードのように主人公はスーパーマンではなく，どちらかと言うと頼りない感じのするどこにでもいそうな青年。それを堺雅人氏が好演している。
　個人的には濱田岳がいいと思った。僕の好きな役者さんである。本作では彼の新しい一面を見せてくれる。
不気味で，冷酷、それでいてひょうひょうとした連続通り魔役を演じているのだ。この人物は本作のキーマンとして重要な役どころだ。
　他にも竹内結子（ショートカットがかわいかったね）吉岡秀隆、劇団ひとり、香川照之、伊東四朗など，豪華なキャスティングである。
　やや，ストーリーを追いかける感じにはなっているものの，それがむしろ作品全体にスピード感を与え，上映中はあっという間に時間がすぎていく。
　サスペンス劇をサラリと楽しむ作品に仕上がってはいるのだが、ちょっと作品作りとして優等生過ぎやしないか？　と思う事も確かだ。もうすこし、癖があっても良かったかもね。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　中村義洋

主演　　堺雅人、竹内結子、吉岡秀隆

製作　　２００９年

上映時間　１３９分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=GCa3lPZt7Ec

おとうと

２０１０年２月６日鑑賞

＊＊＊静謐な山田作品に鶴瓶はどう乱入できたか＊＊＊

ある年齢層以上には、吉永小百合は今だに揺るぎないブランドである。
タレント、司会者のタモリ氏は、自他ともに認めるサユリストである。
「あの人はね，国宝ですから。来年は世界遺産です！！」とまで言い切る。
その人がでるというだけで当然，映画は話題になるし，一度は見ておこうという気になるのだ。
　主人公である姉（吉永小百合）は娘（蒼井優）と共に薬局を切り盛りする働き者だ。兄（小林稔侍）も真面目で実直を絵に描いた様な人である。
　ところがそんな兄弟の中でひとり異質な存在。それが弟（笑福亭鶴瓶）である。
　旅役者をやっていると本人は言うが、ほとんど仕事はない。今だに結婚もせずブラブラしている。酒やギャンブルで失敗するダメ男で、いつも吉永小百合さん演じる姉に迷惑ばかりかけている。あんまり酒癖が悪いので姉から出て行けと言われ，それっきり大阪に暮らしている。
　ところが姉の娘が結婚することを知り，ひょっこり式場に現れたおとうと。
　めでたい席で，酒の失敗をしてはいけないと思いつつ，ついつい飲んでしまう。そのあげく結婚式をめちゃくちゃな混乱に巻き込んでしまう。なお、鶴瓶さんは私生活でも，酒で失敗をしている経験を持つ。このあたりの演技はまさに彼の独壇場だ。
　笑福亭鶴瓶さんの演技は、ほとんど素でやっている様にみえるのだが，それで正解なのだろう。この人に妙な演出はいらない。
　山田監督も本作では，他の俳優達には厳しい演技指導をしたそうなのだが、鶴瓶さんだけには、自由に演じさせたそうである。
　山田監督は笑福亭鶴瓶さんに「第二の寅さんになってほしい」という期待を持っていると言う。
　なお、この映画は吉永小百合さん演じる主人公の娘（蒼井優）の視線で描かれている。ナレーションも蒼井優が担当。これが実に的をえている。
　彼女の力量を山田洋次監督はしっかり認めているのだ。
　時に使い方を間違えると，蒼井優という女優は、ここ一発の「必殺技」によって映画そのものを方向転換させる力を持っている。実はとても危険な魅力を秘めた女優でもあるのだ。
　彼女の魅力を充分引き出しつつ、主役である吉永小百合さんや、笑福亭鶴瓶さんの魅力をも引き出す。
　この抑制の利いた演出。
　いつも思うけど、山田監督の映画作りは静謐というコトバがよく似合う。
　寅さんもそうだったけど，山田監督作品は笑わせ，しんみりさせ，泣かせてくれる。その上，山田洋次監督のすごいところは、登場人物全てに、それぞれの人生をしっかり背負わせているところだ。決してチョイ役だからといって手を抜かない人物の描き方はさすがだと思わせる．
　吉永小百合さんを主役に据え、とても静かな静かなタッチの山田洋次監督作品。そこに笑福亭

鶴瓶さんがどうからんでいくか。この映画の見所は正にそこにある。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆

音楽　☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　山田洋次

主演　　吉永小百合、笑福亭鶴瓶、蒼井優

製作　　２００９年

上映時間　１２６分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=_EUcjeqqdJM

食堂かたつむり

２０１０年２月８日鑑賞

＊＊＊いいものはカタツムリのように＊＊＊

邦画をよくみている人には、突っ込みどころ満載と言えますが，それでも僕はこの作品好きなのです．

　極端なことを言ってしまえば，「かもめ食堂」＋「嫌われ松子の一生」＋妻夫木聡主演の「ブタがいた教室」を足して３で割るとこの映画になる訳です。

　女性が食堂を開き，マッタリした日常を描くというのは「かもめ食堂」の要素。カラフルな映像とアニメと実写がコラボレートする中島哲也監督の得意技満載の「嫌われ松子の一生」

　そして本作では、主人公の母親が飼っているペットがブタなのです。このブタが物語の終盤で重要な役割を果たします。これはまさに妻夫木聡主演の「ブタがいた教室」のコピーと言えなくもない。

　ただ，失語症になった主人公を演じる柴崎コウ。当然セリフは少なく，その分、目線の演技や体全体で表現することが重要になってきます。それを見事に演じあげているのはさすがです。

　また、母親役の余貴美子さんの弾けた演技にも拍手ものです。

　物まねと批判されるかもしれないけど，それでもこのカラフルな映像はやはり魅力的です。何より，この映画は人をハッピーにしてくれる。そして見ている観客をハッピーにしてあげようという、富永まい監督の姿勢がうれしいのです。

　主人公が郷里の片田舎に開く食堂。そこで出される料理のおいしそうなこと。

　映画全編に醸し出される雰囲気，特に小道具やインテリアもカラフルでおしゃれ。見て感じて楽しい映像に仕上がってます。映画を見る楽しさというものを感じさせてくれるのです。

　僕は今、インド独立の父と言われるガンジーに興味があるのですが，彼が言った言葉があります。

「いいものは、カタツムリのようにゆっくりすすむのです」

　「食堂かたつむり」もゆっくり、まったり歩んでゆくのでしょう。そこに集う人々を幸せにしながら。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　富永まい
主演　　柴崎コウ、余貴美子、ブラザー・トム
製作　　２０１０年
上映時間　１１９分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=epuRzUcsNYw

ボーイズ・オン・ザ・ラン

２０１０年2月１７日鑑賞

＊＊＊弱者にダンディズムは許されないのか＊＊＊

（このレビューは完全ネタバレをご容赦ください）

主人公、田西はガチャガチャを販売する会社に勤めているサラリーマンだ。

　彼は会社の同僚の女の子、ちはるに恋をした。なんとか彼女の気を惹こうとする。

　それを手伝ってくれた男がいた。同じ商品を扱う、ライバル会社のエリート社員、青山である。

　飲み会もセッティングしてくれて「いいやつだな」などと、お人好しの田西は思ってしまう。

　だが結局、彼の要領の悪さから、ちはるちゃんを物にすることは出来なかった。

　しかし、彼女は妊娠してしまう。身に覚えはないものの、困った彼女を助けたい一心で、田西は自分が父親である事にして、彼女の中絶手術につきあう。

　やがて相手が分かった。なんと、飲み会をセッティングしてくれたエリートサラリーマン青山だった。

　彼女に対して謝罪もせず、反省の色を見せない青山に、田西は憤る。

　彼はついに青山の会社へ殴り込みにいく事を決意するのだった。

　この作品、主人公、田西を演じる峯田和伸が抜群にいい。どこにでもいそうな頼りなげな青年である。

背も高くない。

顔もよくない。

あまり金も持っていない。

もちろん女にもモテない。

得意な事はほとんどなく、ただ毎日、性欲だけは持て余していると言う２９歳をリアルに熱演した。

　本作の前半部分はエロティックで、なおかつ笑える要素もかなりあり、娯楽的な映画なのかなと思わせる。だが後半、殴り込みを決意するあたりから、シリアスなタッチの映画に変わってくる。

　田西はやがてボクシングの練習を始めるのだが、その練習につき合ってくれるのが、いつも昼間からビールばかり飲んでいる、会社の上司である。これを小林薫が演じている。

　うらぶれて、仕事への意欲もまるでなく、どこか投げやりな会社員を演じている。

　敵役のエリート会社員役には松田龍平。そういえば彼のお父さん、松田優作と小林薫は森田芳光監督の「それから」で共演しているのだ。不思議な縁というものである。

　田西は殴り込みのために全てをかけた。そして殴り込みのため会社に迷惑をかけたくないと自分の職も捨てた。

～♫バカを承知の殴り込み♫～である。

　まるでこれは高倉健さんの任侠映画だ。

彼は思いを寄せた、ちはるちゃんをおもちゃにした、エリートサラリーマン青山の会社へ殴り込みにいく。
結果はボッコボコにされて彼の負けである。
彼がこの殴り込みで得られたのは何だろう？
自分に対しての誇りだろうか？
彼の負けっぷりはブザマだった。でも、彼の中では自分のプライドを守った事になるのかもしれない。彼は愛しいちはるちゃんのために戦った。しかし最後に田西は、ちはるちゃんからも裏切られることになるのだ。
これではいったい、何のために彼はボコボコになったのか？
それはピエロですらない。ピエロは人々を笑わせるために道化を演じる。しかし、彼は、笑われるために戦ったのではないのだ。彼自身の「男の矜持」のために戦ったのだ。
この作品がマーティン・スコッセッシ監督の「タクシードライバー」に触発されているのはよく分かる。
ストーリーの方でも「タクシードライバー」同様、最後は主人公がキレてモヒカン頭になってしまう。
そして暴力にむかう。
映画のラストシーン。田西はひたすら走る。
狂気のように走る。
結局、何の解決にもならず、映画は彼の走る姿で終わるのだ。
弱いものは、強いものに立ち向かってもかなわないのか？
そしてこの先も毎日のように、少しずつ、地味に、負け続ける日々が待っているのだろうか？
弱いものには、ダンディズムを持つ事さえ許されないのだろうか？
何とも情けない、その生き様がいとおしくてならない。
世の中で当たり前のように言われる、負け組の典型的人間像のひとつである。
ならばその当たり前の負け組を代表して、僕はこいつを抱きしめたい。
負け組のダンディズムを、いつまでも抱きしめていたい。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　三浦大輔

主演　　峯田和伸、黒川芽以、小林薫

製作　　２００９年

上映時間　１１４分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=rnFhga_jfj8

２０１０年３月８日レビュー作成

＊＊＊渡辺謙ファン必見！味わい深い愛すべき小品＊＊＊

第３３回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞受賞おめでとうございます。

今一番お気に入りの日本人俳優を一人選べ、と言われると、「渡辺謙」と即座に答える。

僕の心の中でこの人の様々な役柄の存在が、どんどん膨らんできたの だ。

渡辺謙出演作で僕が一番好きなのは実はこの作品である。２００７年５月にTV放送されたこの作品。

ハリウッドが認めるセカイのケン・ワタナベが出演するには、はっきり言って小品という部類に属する。ちょっと地味かなとも思っていた。

ところがである。

まるで舞台を見ているかの様な少人数での芝居。緻密な感情表現。ストーリーにぐいぐい引き込まれた。

それもそのはず。山田太一氏が脚本を担当しているのだ。だからこそ，渡辺謙もオファーが来た時にOKしたのだろう。

渡辺謙の役どころは、愛人殺しの殺人犯 のえん罪を着せられた男だ。かれには実刑判決が下った。服役させられ、刑を終え出所した男。

彼には妻も６歳になる一人娘もいた。だが、愛人がいたこと、殺人犯であることにより、当然、離婚。今は １８歳になる娘ともまだ会えていない。

彼は出所後、清掃会社に職を得た。安アパートに一人で住み、たった一人で粗末な夕食を済ませ、本当はほかの誰かに殺 された、かつてのいとおしい愛人の冥福を祈る。そして仕事ではコンサートホールで床をただひたすら掃除する。かつては一流商社マンであり、成功で、のぼせ上がっていた彼。そんな複雑な過去を持つ人物を、実に丹念に演じている。

ふとしたきっかけから、交流することになった株式デイ・トレーダー役を、玉木宏が演じている。

「あなたは床を掃除している人じゃない、何か、特別なオーラを感じるんです。」という玉木君の台詞がある。

おそらく彼の率直な気持ちを、脚本の 山田太一氏が代弁したのだろう。

得したよなぁ。玉木君。

渡辺謙とがっぷり四つに組んだ人間ドラマだ。

何より、このような実に地味な人生の敗残者、という 人物像を、「ラスト・サムライ」「硫黄島からの手紙」を演じ、ハリウッドが認める大スターとなった後で、あえて演じる渡辺謙の役者魂に心うたれる。

もちろん作品の持つ力というものが大前提だが。ハリ ウッドが最も注目する日本人俳優。クリント・イーストウッド監督から「偉大なる、ケン・ワタナベに敬意を表したい」とまで言わせた人物。

その渡辺謙が演 じる人生の敗残者は、実に味わい深かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　田嶋大輔
脚本　　山田太一
主演　　渡辺謙、玉木宏、国仲涼子
製作　　２００７年　フジテレビ
　amazonでこの作品DVDが紹介されています。既に絶版らしく、プレミア価格になっているみたいです。

http://www.amazon.co.jp/%E6%98%9F%E3%81%B2%E3%81%A8%E3%81%A4%E3%81%AE%E5%A4%9C-DVD-%E6%B8%A1%E8%BE%BA%E8%AC%99/dp/B0012VU1P0

２０１０年4月２日鑑賞

＊＊＊大胆かつ繊細なキャステングに注目＊＊＊

この作品のキャスティングを見たとき「ん？」と引っかかるものがあった。それが気になって結局、観に行く事にした。

　その「ん？」というキャスティングは甲本雅裕である。

　彼は最近脇役として、ちょくちょく他の作品でも見かけるようになってきた。

　以前「リンダ・リンダ・リンダ」で高校教師役をやっていたが、その存在感そのものがすでにオッフビートの雰囲気を持っていた。少しの出番しかないのに、妙に心に引っかかる役者さんだなぁ、という印象だった。

　今回の「花のあと」ではヒロインの許嫁役で、この作品の中で重要なキーマンだ。

　時代劇において藤沢周平作品は、市井の人を魅力的に描き出す事で定評がある。

　それを甲本雅裕が演じると、一体どんな映画になるのだろうという興味がわいた。

　甲本氏演じる才助は、どう見てもピリっとしない男である。

　人が良さそうで、いつもニコニコしている。祝言もまだ挙げていないのに、ヒロインの家に度々上がり込み、じつにうまそうに飯を平らげ、お代わりまでする。

ちょっと厚かましい感じもするが、悪い男ではなさそうだ。

この人が、華のお江戸で学問を納めたとは、とても思えない。

のほほんとした感じだ。

　後に彼は藩の役人たちの腐敗ぶりを、見事な手腕であぶり出して見せる。しかし、とてもそんな大胆かつ繊細な事が出来る男だとは、外観からは想像できない。そう言う雰囲気を、甲本氏は見事に演じてみせた。

　甲本氏ばかりでなく、もちろんヒロイン役の北川景子。今回は、清楚な武士の娘役。しかも、まだ若いが剣術の達人という設定である。かなりハードな殺陣を見事にこなしている。

　ヒロインは一度だけ剣術試合をした相手に淡い恋心を抱く。剣の道に精進してきたもの同士、何か通じるものを感じたのだろう。自分を負かしたその相手に、生まれて初めて「男」というものを意識する。このあたりの描き方は清々しい。

　その相手を、後に死に追いやる敵役を、歌舞伎役者の市川亀治郎が演じている。やはり憎まれ役は魅力的でなくてはならない。この作品の見所は、このような大胆で繊細なキャスティングが成功している事だ。

　映像面でも、城での花見のシーンなど、溢れるばかりの見事な桜が印象的な絵を作り出す。その桜の散りゆく様が、ヒロインの淡い恋心を映し出すようで、作品全体に、さわやかさと、清楚な雰囲気を与えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　中西健二
主演　　北川景子、甲本雅裕、國村隼
製作　　２００９年
上映時間　１０７分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=YEhBBkGxPWs

ソラニン

２０１０年４月８日鑑賞

＊＊＊青春の向こう側にあるもの＊＊＊

ソラニンとは、ジャガイモに含まれる毒の事だそうだ。
　大人になるという事は、例えれば、そう言う毒素を水で薄め、毎日すこしづつ、我慢して飲み下す事かもしれない。
　この映画は、ある学生バンドが、悩み、挫折し、成長する、青春ストーリーである。
　僕の様な五十代のオッサンが、このような”チャラい”映画を観るというのは、場違いな感じがしなくもない。確かに劇場は高校生や、二十代前半の若者が多かった。
ところが意外にも、我々の様な中高年のおじさんが観ると、かなりグッとくるものがある。
　特に僕のように学生時代バンドをやっていたオヤジたちには、無性に切ない映画なのである。

　原作については未読なので映画だけの感想となる。
　脚本については幾分破綻している部分が気になった。例えば、薬局におかれたカエルの人形を、ポストと間違えてはがきを出す老人がいる。どうやら老人性の痴呆が始まっているらしい。ところがポストじゃないと注意されて、それに付いて老人自らが、ずいぶんしっかりと理由を語るシーンがある。
　はじめからこれほどしっかり理由を言えるのなら、わざわざカエルの人形をポストに見間違える事はしないだろう。
　これは原作にある設定なのかもしれないが、ややリアリティーに欠けると思った。
　バンドのボーカル、ギター担当の高良健吾は「南極料理人」にも出ていた。いわゆる草食系、大学卒業したばかりの若者像の平均値、または最大公約数としての存在だろうと思う。
　この作品に出てくる主人公たちのバンドは、はっきり言って、あまり演奏のうまさを感じない。しょせん大学の仲良しクラブの延長線上にあるチンタラしたバンドだ。
　大学のバンド活動は、高校球児が甲子園を目指す事とは違う。
　明らかにレクリエーションの要素が多くなるのだ。僕が学生だった三十年前でもそうだった。
　本気でコンクールへ出て優勝しよう、なんて考えているバンドはほぼいなかった。
　せいぜい喫茶店で
「オレの音楽は他の奴らには分からねえんだョ」
と練習もろくにせず、一日中ダベっているロック気取りの奴らばかりだった。
　要するに女の子からキャーキャー言われれば、それで満足だった。もちろん僕も、そう言う部分はあった事は認める。
　それでも主人公たちのバンドは自主CDをつくり、メジャーデビューのチャンスをつかみかける。だが、結局そのチャンスを自らつぶしてしまう。あえて大人たちが敷いたレールの上を走る事を拒否したのだ。
あっぱれだ。

それが若さというもんだ。
　主人公たちは、自分の音楽で世界を変えてやろうと意気がってみせる。そう言う無鉄砲な思い込みが出来る事こそ、若さの特権なのだ。
若い時に妄想を抱かなくてどうするのだ。
小ちゃくまとまることなど、大人になればイヤでも迫られる事だ。
　僕の様なオヤジ世代は、もう、すでに意気がってみせる事が出来ないし、無鉄砲な事も出来ないし、しがらみの中で小さくまとまる事を受け入れてしまっている。こういった若さを見せつけられると、やはり切なくさみしい気持ちになる。
　この作品で印象に残っているのは、彼氏と乗っているボートから宮崎あおいが落っこちてしまうシーン。
　その直後の、迫力ある彼女の演技が、さすがに「モノが違う」という印象を受けた。
　はっきり言ってしまえば全面的に宮崎あおいにオンブにダッコしてしまった映画なのだが、僕はあえてそれを否定しない。そう言う作品もあっていいとおもう。予想した通り、それ以上でも、それ以下でもない作品だった。宮崎あおいファンは楽しんでほしいと思う。この作品の魅力は、なんと言っても「ロックシンガー•宮崎あおい」を見られることにある。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　三木孝浩
主演　　宮崎あおい、高良健吾、桐谷健太
製作　　２０１０年
上映時間　１２６分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=4EMFvvv2hF4

２０１０年４月１６日鑑賞

＊＊＊もうベーベじゃないよね、MEGUMI＊＊＊

指折り数えて公開日を待っていました。本日封切りです。見て参りました。ちょっとウルウルしました。この日のために原作を読むのも我慢した甲斐がありました。

前編がとても楽しく華やかな印象があったのですが、後編は印象がガラリと変わって、ちょっとシリアスタッチです。のだめと千秋の恋の行方を巡る物語となります。でも心配は要りません。「のだめ」らしく笑える部分はちゃんとありますのでね。

今回の後編が前編と最も違うところ。それはすこし、オトナになった、女優・上野樹里が感じられるところです。前編に比べ今回はアクションシーンは少なめになります。また、のだめの弾けた演技、体全体を使った演技も控えられています。本作では大きな体のアクションで演技をするのではなく、そのストーリー上、とても微妙で繊細な心の揺れ動きを演じる必要があるのです。

上野樹里が持つもうひとつの魅力が、まさにこの微妙な雰囲気を出せる女優でもある事です。目の表情を始め、あごの角度や首から肩への表情まで演じ分けているようです。

それにしても千秋真一役の玉木宏君はフランス、パリがよく似合うなぁ。

千秋が地下鉄のホームに走っていくシーンなんか、手持ちカメラを使ってすこしザラついた画面のタッチに仕上げてあり「あっ、ヌーベル•バーグだ」とおもいましたよ。

欲を言えば、もっとあそこのカット、長めに使ってほしかったと思いました。予告編で見たときもう、最高だと思いましたのでね。

音楽はもう何も言う事がありません。前編同様、映画館がそのままコンサートホールになります。じっくり音楽を楽しんでください。

特に今回の最大の見所はマエストロ・シュトレーゼマンと、のだめとの夢の共演、（半ば強引か？）ショパンのピアノ協奏曲第一番です。この名曲をどうぞじっくりと、”マエストロ竹中直人”の指揮でお楽しみください。この指揮ぶりは本当に見事でした。

また、上野樹里のピアノを弾く演技の圧倒的なうまさ。実際彼女はいくつかの曲を弾けるそうですが、手の表情の付け方がいいです。本当のピアニストが弾いているかの様な豊かな表現力を持っています。

音楽の持つ奥深さ、頂点を目指そうとする時に立ちはだかる壁。それを乗り越え、演奏のとき、ミューズの神が舞い降りたと感じる一瞬。

でもそれが怖いのですね。もうこれ以上の演奏が出来ないのかもしれない、と恐れを抱いてしまう。逆説的ではありますが、それこそ真摯な演奏家なのだと思います。そう言った深いところまでこの作品は物語っているのだと思います。

のだめシリーズが始まった時は、たかが学園コメディーのひとつ、ぐらいにしか思っていませんでしたか？　実は僕もそうです。

でも今は違います。これこそ映画の楽しさを味あわせてくれる貴重な映画だとおもいます。

先日ちょっとカジュアルなクラッシック音楽会に行ってきました。曲目は「のだめ」にちなんだ曲がずらり。おなじみの「ベト７」の演奏が始まると、前の席の男の子が、千秋真一みたいに指揮を始めてしまったのは微笑ましかったです。ここまでクラッシックを身近にした「のだめカンタービレ」の功績は大きいと思います。

のだめはこれからもファンと共に成長していくでしょう。

MEGUMI・NODA、あなたはもうべーべじゃありませんよ。音楽と人生にきちんと向き合えるようになったのです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　川村泰祐

主演　　上野樹里、玉木宏、瑛太

製作　　２０１０年

上映時間　１２３分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=pdHYqvFq8WY

RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語

２０１０年５月２９日鑑賞

＊＊＊彼が選んだシート、彼が選んだ風景＊＊＊

まず、キャメラがとてもいいんです、この映画。これは監督の絵の切り取り方がうまいんだろう、とおもいました。人物配置にしろ、風景を撮るにしても、とことん凝った絵を作り込んで行く監督だなぁ、とおもいました。また、キャメラを手持ちにするのか固定なのか、あるいはクレーン撮影なのか、その辺りのチョイスも見事です。また、俳優たちの演技を引き立たせるための長回しもおこなってますね。せっかくの役者の演技を細切れ編集にして喜んでいる様なカントクが多い中、錦織監督の映像センスはすばらしいとおもいます。

　とてもよく出来た映画なのですが、難点を言えば、主人公が電車の運転手になる事を決意する、その辺りの説得力がいまいち欠ける事。主人公はエリートサラリーマンです。責任あるポジションにいる。当然給料もいいのでしょう。立派な家も持っている。奥さんがハーブのお店を出したのも、映画では語られていませんが、当然、主人公である、ご主人の援助があったはずと思います。そう言う豊かな生活をかなぐり捨てて、安い給料の、しかも赤字ローカル線の運転手になる。これは主人公の同僚の死がきっかけとして描かれる訳ですが、このあたりの、ご主人の心境変化をもっと緻密に描ききってほしかったなぁ、というのが率直なところです。

　脇を固める俳優陣がいいですよ。おばあちゃん役の奈良岡朋子さん、一畑電車社長に橋爪功さん、営業部長役、佐野史郎さん、実力派を惜しげもなく使ってます。おもしろいところでは、「花のあと」で好演した甲本雅裕。この人特有のオッフビートな、ゆる～い感じが、いかにもローカル線の乗務員らしくて絶妙です。また、電車運行の司令室担当に石井正則。几帳面で厳格すぎる故に、かえってユーモラスに映ってしまう役柄を演じています。また、本仮屋ユイカは「スウィングガールズ」の時から知っておりますが、女優として着実に成長しているのがファンとしてうれしいですね。

　中井貴一演じる主人公、自分の生き方を大きく変えて行きます。今、自分が座っているシートは果たして自分が望んだものだったのか？　もしかしたら、いままではシートに座らされていた人生なのかもしれない。でも、誰でも自分にふさわしいシートがあっていい。

　彼の場合は、それがたまたま地方の小さな電車の運転席というシートでした。

　運転席から見える美しい島根の田園風景。命溢れる緑の中を駆け抜けて行くバタ電。
ゆっくりでいいんだ。前に進んでいれば、という映画のメッセージ。余韻の残る作品となりました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　錦織良成

主演　　中井貴一、本仮屋ユイカ、三浦貴大

製作　　２０１０年

上映時間　１３０分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=yczHFExsar0

パーマネント野ばら

２０１０年５月２９日鑑賞

＊＊＊ラストシーンはマジックタイム＊＊＊

作品の前半部分は、ヒロインが一人ポッカリと穴が空いたように存在感がありません。彼女の周りにいる人々、パーマをかけにくるおばちゃん、幼なじみの、スナックのママや、男運の悪い女友達、それらのエピソードがとても際立っていて、この映画の主人公は一体誰なのか？という疑問を持つのです。

特に小池栄子演じる、スナックのママ役はハマリ役と言ってもいいでしょう。また、相手役の浮気男、加藤虎之介との演技の絡みが抜群におもしろいです。

ここまでは主演の菅野美穂を完全に食ってしまっているようで、彼女のファンとしては正直ちょっとイライラするぐらいです。

さて、ヒロインはバツイチ、一人娘がいます。夫と別れて実家のパーマ屋に帰ってきた。それでもおばちゃんたちと冗談が言い合えるぐらいだし、気持ちは落ち込んでいる様子ではありません。しかし、そうではなかったのです。彼女はある心の障害も一緒に持ち帰ってきていたのです。

後半部分、観客にその事が明かされます。

その畳み掛けるように持って行く編集の見事さ。そして女優、菅野美穂の演技力に改めてハッとさせられます。とても豊かな表現力を持ったこの女優。どうして邦画界はこのような才能を何年も放っておいたのか？ファンとして、もう、腹立たしくてしょうがない。

「dolls ドールズ」でその神懸かり的な映像美の中に、菅野美穂を溶け込ませた北野監督のマジック。そのマジックをようやく解いたのが、本作の吉田大八監督でした。この作品は、単に漁師町の下品なオバさん達と、ダメダメな男たちの群像劇のように見えてしまいます。もちろん、そう言う下世話な楽しみ方も出来るのですが、決してそれだけではないのです。ヒロインの抱えている心のキズ。それを、下品でスケベで、猥雑なおばさんたちが実は黙ってほんわりと見守っていたのです。

ああ、このおばちゃんたち、分かっていたんだ、と納得させられるシーンがあります。その一瞬のカット、是非、お見逃しなく。

何より、ヒロインを暖かく迎えに行こうとする一人娘のけなげな姿。

北野監督に勝るとも劣らない見事なマジックとラストシーン。目に焼き付けてほしいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　吉田大八

主演　　菅野美穂、小池栄子、池脇千鶴

製作　　２０１０年

上映時間　１００分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=GEN8BKixi74

ボックス!

２０１０年６月４日鑑賞

＊＊＊油断しとったら、やられるでぇ！！＊＊＊

ノーガードだった。この映画に油断していた。市原隼人のストレートパンチを一発喰らった感じである。まさか、ここまでの完成度の高さとは。予想していなかったのだ。いやはや、これは賞賛しないわけにはいかなくなった。

　高校ボクシング部での天才型ボクサーと、努力型ボクサー。二人に共通する宿敵のライバルを倒そうと、お互いに刺激しあいながら成長していくという物語である。

　この映画で何がすごいかといえば、当然、市原隼人の天性の運動神経と、またこの映画に賭けた、実際のボクシングのトレーニングの成果だ。まるで本物のボクサー顔負けの身のこなしである。

体がキレが抜群にいい。

映画を見ていた観客は，はっきり言ってガキどもが多かった。上映中に携帯電話をおかまいなしにかける、お菓子の袋は開けまくる、ぺちゃくちゃしゃべる、それはひどかった。

ところがである。

作品中の、ボクシング試合シーン。

　この連中が「ぽかん」と口を開けている。

体は前のめりになっている。

皆じっとスクリーンに釘付けだった。

僕はそれを冷ややかに観察していた。そう言う冷静な自分がちょっと悔しい思いがしたぐらいだ。この作品には観る人を釘付けにする魅力がある。

　後半の試合シーンでは、驚異的な長回しがあるのでお見逃しなく。これは李闘士男監督の、こだわりにこだわり抜いたシーンなのだろう。

役者同士のグローブで打ち合うシーンは、一体演技なのか？　それともアドリブなのか？　それは全く分からない。

チャンバラなら殺陣という演技のプランがある訳だが、それをやるには、あまりに打ち合いのシーンが長いのだ。本当にこれは、役者がよく頑張ったと思う。

　努力型ボクサー役の高良健吾もいい。彼は最近映画に出まくっている感じがある。最初はなんとなく気の弱そうな優等生なのだが、そんな彼がボクサーとして徐々に実力を付けて行くあたりの演技は見事である。

　出番は少ないが、ボクシング部のマネージャー役の谷村美月の、ほんわか天然系の演技も良い。また、残念ながら、芸能界引退発表のあった宝生舞の、お好み焼き屋のお母ちゃん役が抜群！！関西弁も完璧である。

　原作は未読なのだが、ベストセラーとのこと。確かにストーリーはよく出来ている。人物像の作り込みはお見事。映画において奇をてらった演出もしていない事が余計に好印象。

　まぁ、実際には社会人になると、努力だけではどうにもならない事もある。

　うさぎと亀で言えば、案外、あっさりとウサギが勝ってしまう様な事が、多々あるのが現実である。そしてどんなに涙ぐましい努力も、全く無駄にされてしまう、社会の現実がある事も確かだ。その最たる例が戦争である。どれだけの若者の夢を無駄に散らせたのか，ふと思ってしまった。
　ボクシングは戦争ではない。単なる争いでもない。喧嘩でも、どつきあいでもない、客観的なジャッジが下される「スポーツ」である。ボクシングが、若者の青春を賭けるに値するスポーツである事を、改めて再発見させてくれた。
そしてスポーツへの夢を見させてくれた。
僕はこの作品を秀作と呼びたい。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　李闘士男
主演　　市原隼人、高良健吾、谷村美月
製作　　２０１０年
上映時間　１２６分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=u9HUGn8KIco

シーサイドモーテル

２０１０年6月１１日鑑賞

＊＊＊ギラギラに生きるか、脱力系に生きるか＊＊＊

シーサイドなんて言っときながら、ド田舎の山の中にあるモーテル。そこにたまたま泊まる事になった４組の客たち。その群像劇ですね。

　この映画の魅力はなんと言ってもキャストでしょうね。

　脱力系とか、ゆるゆる系オッフビートな感じ、B級映画大好き人間にはおなじみの面々が出てます。

温水洋一、古田新太、そして脱力系のヒロインをやらせたらこの人の独壇場、麻生久美子。

これらのひと癖もふた癖もありそうなキャストが、イケメン系のキャスト、生田斗真、山田孝之、玉山鉄二らとからみます。

　相手にうまく嘘をついて丸め込んだと思っていたら、実は相手の方が一枚上手で逆にはめられた、と言った、嘘つき合戦のストーリー展開。

　勿論この手の映画を観る時は、映画に”深み”等を求めたら全然筋違い、空気読んでない訳で……（僕もその勘違いした一人ですが）やはり、ポップな映像と編集、キャラクターたちや俳優の、素材としてのおもしろさを味わうべきでしょうね。そう言う意味ではキャンディ役の麻生久美子はさすがでした。

成海璃子という素材は若干、生かし切れていなかった感じです。意外によかったのが池田鉄洋さん、この人の事は全然知らなかったけれど「ここで一発！」という決めの表情がいいです。ある意味、この映画を象徴しているかもしれない。インパクト勝負という，この映画の本質をついた表情ですね。とにかく人生も映画も見た目が勝負、濃ゆくてギラギラしてて、後に何ぁ～んにも残んない、というのがお好きな方にはいいかも、です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　守屋健太郎

主演　　生田斗真、麻生久美子、山田孝之

製作　　２０１０年

上映時間　１０３分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=0cqbkOoY738

アウトレイジ

２０１０年６月３０日鑑賞

＊＊＊あんたら、ワルだねぇ～＊＊＊

いやぁ～、世界の北野監督、やってくれましたね。もう楽しくてしょうがない。悪いやつらが、悪い奴ら同士で、悪事の限りをやり尽くす。
殴り合う。
蹴飛ばす。
車はぶつける。
バイオレンスの連続。
これがね、気持ちいいんです。なんとも。
なんでこんなに気持ちいい映画に仕上がったんだろう。上映中ずっとそれが不思議で仕方なかった。それが北野監督のマジックなのかもしれませんね。
　まずは気がついた事を。
その①おそらく北野監督この作品を楽しんで撮ってますね。もう楽しくて楽しくてしょうがない、というぐらいな雰囲気がびんびん伝わってくるんです。
　特に悪役を描くというのは、表現者に取ってこんなに楽しい事はないそうです。三浦友和氏が「沈まぬ太陽」で日本アカデミー賞最優秀作品賞受賞の席で、こう言っていたのを思い出します。
「悪役は楽しかったですねぇ。主役の渡辺謙さんをドンドン裏切って行くんですから。痛快でした」と。本作でも三浦さん、なかなかシブい悪役を演じてます。
　その②北野監督、絵の作り方がうますぎる。
　僕の趣味でもある固定カメラを多用してます。細切れ編集もほとんどなし。これもすばらしい。
スクリーンに住宅街が映る。その絵の端っこの方で、何かヤクザ同士のトラブルが起こっている。観客はその一部分に注目する。だけど他の静かな住宅街の日常風景は、平穏な空気感で流れている訳です。このあたりの対比のさせ方。うまいねぇ。
　それから闇夜で拳銃を撃つ。遠景のショット。
ほんの一瞬、頼りない線香花火の様な光がみえる。
そして暗転。その瞬間ヤクザが殺されている。
その殺された死体はあえて見せない。
観客に想像させる。心憎い演出です。
　最後の方に出てくる海岸沿いの一本道。これもいいですね。なんとも、詩情があふれているんですよね。
そこにかかるお待ちかね。絹の手触りの様な「キタノブルー」
その空気感を味わって鑑賞してください。
その③なんでこんなに嫌みがないんだろうと言うこと。

　実はその一つのヒントが、このお話、やくざ間の抗争を描く訳です。これはヤクザ社会と言う、閉じたセカイでのお話。
　映画の中で、確かにバイオレンスは使われるけど、そのバイオレンスは「一般市民」に対して向けられる事は一切ないんですね。だから、我々一般市民の観客は安心してみていられる。悪い奴らが悪い奴ら同士でバイオレンスを使っている訳です。しかも巧みな心理戦がある。ダマしダマされ、ハメてやろうと企んで逆にハメられてしまう。観客はそんなヤクザのセカイの馬鹿げた抗争を、それこそ俯瞰して観られる。ある意味，神の目線から傍観する事になる。そうして、人間ってこんなバカな事ヤッているんだ、と思う訳です。その俯瞰、神の目線のおもしろさですね。それを感じました。
その④この作品、１０９分です。鑑賞時間２時間を切ってます。これも名画の条件ですね。いい作品には無駄がない、無駄を徹底的に削ぎ落していく訳です。だからこれ以上絞れないほど贅肉を絞っている。その結果が上映時間の短さになるんですね。
　もちろん例外がある事は認めます。しかし、やはり名作傑作のたぐいは、上映時間の短さというのも、一つの目安になるんですね。観る映画に迷った時、上映時間が短い方を選んでみて下さい。以外にいいはずです。これ覚えておくといいですよ。
　ただしハリウッド映画の２時間枠は、一日の上映回数や、観客の集中力を計算してはじき出しているので、この法則には当てはまりません。２時間以内の駄作ばかり、というのがハリウッドの現状です。これは本当に観客をバカにした話し。悲しいですね。
　ハイ長々と描いてしまいました、最後にひとこと。
　僕個人の、今年の邦画ベスト３には間違いなく入る秀作です。見て損はありません。う～ん、こんな痛快な悪役群像劇、もう一回観に行きたいですね。おすすめ！！
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　北野武
主演　　ビートたけし、椎名桔平、加瀬亮
製作　　２０１０年
上映時間　１０９分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=cbR59haFoxk

２０１０年7月２日鑑賞

＊＊＊いのちへの想いをメスにこめて＊＊＊

成島監督は前作「クライマーズハイ」で見せた、硬派で、社会派の映画づくりを本作でも継承してますね。

主人公は日本でもトップクラスの外科医。ほとんど神の手を持つとさえ噂される人、海外有名医科大の留学経験も積んだエリートです。いわばブラックジャックとも言える人が、演歌が好きだったりと、意外な一面で笑わせてくれる演出もあります。

その人が自ら望んで、田舎の、設備も整っていない病院に赴任し、地域医療の改善に努めようとする。主人公はそう言う熱い想いを持った人でもあります。

本作では、この地域医療の問題、医学会での学閥、生命倫理などの諸問題を織り込みながらストーリーが展開して行きます。

この物語、その天才外科医の助手として立ち会う事になった、一看護師の目線から描くという手法をとってます。

手術シーンの緊迫感はよく伝わってきました。手術室全体をカメラに収め、その緊迫した空気全体をキャメラが捉える事に成功しています。

周囲の反対を押し切って、脳死肝臓移植に踏み切って行く様子は、医師としての使命感も分かる訳です。ただ、主人公の言動があまりに聖人君子過ぎやしまいか？
もう少し、この医師のダークサイド、人間として、ちょっとダメな部分も描いてくれると、なおさらリアリティが出たのではと思わせます。

そう言う意味では、主人公を煙たく思う、対立する医師グループはとてもリアリティがありました。

困難な手術は他の大学病院に回してしまえばいいんだ、自分の病院の死亡率が減る事を考えていればそれでいい。医師としての評価も、死亡率ゼロという勲章がつくんだから。その事なかれ主義。そして、手段でしかない患者の命。

また、学閥のメンツが、命より優先されると言う現実。

医師の使命とは何か？その基本を忘れてしまっている現場の医師たち。

対照的に主人公があまりにも天才的な手腕を持っているために、また、正義感に溢れているために、ヒーローに描いてしまう恐れがあります。しかし、監督はそのようには描きませんでした。目の前の一人の命を前に、外科医として雑念を持たない、助けられる命は最大限助けるという、淡々とした主人公の姿を描きます。

作品の中でも主人公が言う様に、手術という医療行為には一発大逆転というものはない。ただ、一つ一つの煉瓦を地道に積み上げて行く様な作業。その愚直とも言える作業の末に手術のゴールがある。

この映画も愚直に一つ一つのエピソードを、煉瓦の様に積み上げて行きます。監督は奇をてらった演出など、一切排除して淡々と作品を作りました。

　きっとこの映画、役者自身に、ある転機を感じさせる様な作品になるかもしれません。主役の堤真一、今までの熱血キャラクターと違い、実に落ち着いた、秘めたる熱い心を、その演技で見せています。手術シーンは本当にお見事でした。相当訓練したんじゃないでしょうか。彼を支える看護師役の夏川結衣のひたむきな姿に心打たれます。

　臓器提供者の母親役に余貴美子。この人はもう安心してみていられますね。それから、最近おとなしい役の多かった柄本明さん、ひさびさに本領発揮とも言える、怪演をみせてくれてます。これら実力派の役者さん達を使い、医療問題に一石を投じたこの作品。とても志の高い精神性を感じる作品に仕上がりました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆

音楽　☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　成島出

主演　　堤真一、夏川結衣、吉沢悠

製作　　２０１０年

上映時間　１２６分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=vMA5f1XYZnI

告白

２０１０年７月４日鑑賞

＊＊＊映画界に「ドッカーン！」＊＊＊

告白します。
私は今まで新作映画に５点満点を付けた事がありません。常に新作映画の最高点を、４点までにしてきました。二十五年以上経っても、まだ最高と思える映画にしか、５点満点は付けた事がありません。
告白します。
私は始めて新作映画で５点満点を付けます。
ストーリー、映像、キャスティング、演出、音楽、すべて５点満点です。
告白します。
恐らくこの作品は、十年に一本の映画になる事でしょう。
二十一世紀の邦画界を代表する作品の一つになる事でしょう。
告白します。
この作品を観た後、中島監督の手がけて来た、今までの作品「下妻物語」「嫌われ松子の一生」「パコと魔法の絵本」これらの作品は、全て本作を作るための、習作にしか過ぎなかったのだと。
告白します。
私は女優に厳しい中島哲也監督が大嫌いでした。
　なぁ～んてね。
＊＊＊＊＊＊＊＊
この作品によせて、何十年かぶりに詩を書きました。よろしかったらどうぞ。

　～人間だから～

あなたはなぜ傷つけるのか？
それはあなたが人間だから。

あなたはなぜ嫉妬するのか？
それはあなたが人間だから。

あなたはなぜ醜いのか？
それはあなたが人間だから。

あなたはなぜ憎しみあうのか？

それはあなたが人間だから。

あなたはなぜ殺しあうのか？
それはあなたが人間だから。

あなたはなぜ生きているのか？
それは私には関係ないから。

生きる事、生きて行く事
生きる事、生きて行く事

あなたはなぜ許さないのか？
それはあなたが人間だから。

あなたはなぜ愛せないのか？
それはあなたが人間だから。

生きる事、生きて行く事
生きる事、生きて行く事。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　中島哲也
主演　　松たか子、木村佳乃、岡田将生
製作　　２０１０年
上映時間　１０６分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=ZsOmp4-f2Tc

春との旅

２０１０年７月３０日鑑賞

＊＊＊弱者の視線に寄り添うこと＊＊＊

仲代達矢さんの演技をしっかりと見届けた、というのが第一印象。見届けると言う感覚は同じく仲代さん主演の黒澤監督作品「乱」以来かと思う。もちろん仲代さんは日本を代表する名優であり、他の多くの作品に出演されている。
しかし、近年、仲代達矢主演作品は記憶にないのだ。
本作は、さすがに「乱」のスケール感はあり得ないが、作品に流れる仲代さんの演技の緊張感は「乱」に匹敵する物があると思う。
食事のシーン、酒を飲むシーン，ただ、それだけなのに、仲代さんが演じるだけで、主人公の老人の醸し出す生活感、孤独感に圧倒されるのだ。
　この作品は、老人が孫娘を連れて、自分の終の住処を探して歩く、旅の話しである。
　老人は自分の兄弟親類を訪ねて、自分を置いてくれないかと頼んで廻る。しかし皆は彼を厄介もの扱いして、自分の所に引き取ろうとはしない。
　実は僕も情けない事に同じ経験がある。病気を抱え、どうにも生活して行けなくなった。
兄に同居させてくれ、とたのんだ。
しかし結局は断られた。
兄の判断はそれなりに正しかったのだろう。今もこの通り、僕はなんとか生きている。
　映画を見て映画レビューを書く暇さえあるのだ。今の無職と言う立場を続けて行ける限り、時間はいくらでもあるのだ。
ただ、宙ぶらりんで、この先どうやって生きて行くのか、と言う漠然とした不安は当然ある。だから本作を見ていて、それこそ、これは自分の二十年後の姿なのだ、と切実に感じた。
　今一人暮らしのお年寄りが増えている。
かつて井上陽水は「傘がない」という曲で
「都会では自殺する若者が増えている」と歌ったが、今や日本国中で老人の孤独死が増えている。
そう言う意味では、まだ「春」と言う名の孫娘が、旅に同行してくれただけでも、主人公の老人にとっては救いだったのかもしれない。
　春は１８歳だが、まるで老人の保護者のようだ。
時々、老人が不機嫌になったり、気まぐれを起こしたり、子供の様にぐずったりする。そんなおじいちゃんを見て、春は嫌な顔もするが、それでも献身的に老人に寄り添う。
その春の姿に、まるで、聖なる菩薩のシルエットが重なって見えるようだ。
春は「フラガール」で鮮烈な印象を残した、徳永えりが好演している。この作品は、監督が俳優たちの演技を、出来るだけそのままの形で観客に提出しようとしていて、その演出手法はとても共感出来る。
　本作を見る限り、その人物を描く監督の眼差しの確かさには、敬意を表したい。カット割りに

しろ、ちょっとした心情を表す様な構図の使い方など、映画表現が見事だ。
本作で描かれているのは、圧倒的な弱者である。老人と職を失った孫娘。今、世の中には弱者が溢れている。お年寄り、障害者、シングルマザー、弱い物を更に弱くさせようとする世の中、そして世間と言うものの怖さを、この映画は見事に捉えている。
弱者の視線に寄り添いながら映画を作る事は、容易な事ではないと思う。しかし、本作はそれをやり切っている。これからも映画ファンへ、このような素敵な映画をぜひ創り続けてほしいと思う作品である。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　小林政広
主演　　仲代達矢、徳永えり
製作　　２００９年
上映時間　１３４分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=BLXyR5zgfzg

借りぐらしのアリエッティ

２０１０年8月２２日鑑賞

＊＊＊続編をつくりましょう＊＊＊

残り少ない夏休み、少年少女たちに安心してお勧め出来るアニメ作品だと思う。安心してという事は、ある意味、「毒」というか「苦み」の様なものを含んでいる割合が少ないと言うことだ。

オトナになると夏の苦いビールがたまらなくうまい様に、映画にも、少し苦みがあった方がオトナにはおいしく感じられるのだ。

主人公のアリエッティは少数民族である小人族の少女である。人間で言えばそろそろ思春期に差し掛かろうかという年頃。この作品が毒をあまり含まないのは、アリエッティ自身が毒素を全く含まない、あまりに良い子に描かれているからという事もある。

人間の家の床下に、お父さんお母さんと借り暮らしをしているアリエッティ。必要な物は、人間の家から密かに、必要な分だけを借りてくる事で、生活が成り立っている。アリエッティはお父さんやお母さんの仕事を実によく手伝うし、明るく積極的な美しい少女である。

ジブリ作品というと、今まで主役のキャラクターは実に魅力的で個性的だった。ポニョはハチャメチャな人魚姫だし、千尋はもともと、全くやる気のないダメ少女という設定だし、さつきとメイちゃんも、それぞれユニークな個性が際立っている。それに比べて、このアリエッティの、清楚で可憐な美少女像はどうした事だろう。

もう少しわがままであったり、イタズラ好きだったり、失敗ばかりしていると言った設定でも、よかったのかもしれないと思ってしまう。

彼ら小人族は、もし人間に見つかってしまえば、その珍しさから、きっとあっという間に捕まえられ、さらし物にされるだろう。だから彼らは常に姿を隠し続ける。そして借り暮らしを続ける。しかしある日、病気療養中の少年とアリエッティは出会ってしまうのである。

大人の目から見て、この物語ですぐさま連想出来るのは、ユダヤの人々である。特に第二次世界大戦中、あの忌まわしい人種迫害、大量虐殺が行われた。そして最もこの物語に近い位置にあるのは「アンネの日記」のアンネ・フランクの一家である。

本作で登場する重要な人物が、西洋館のお手伝いさん、ハルさんである。この人の演技の付け方が抜群。彼女がアリエッティたちを見つけようとするシーンがある。

ユダヤの人々の悲惨な歴史に思いを馳せたとき、この物語は僕にとって、楽しいアニメ作品ではなくなってしまった。それこそハルさんの執拗な小人探しは、ナチス、ゲシュタポの、どくろマークが見え隠れするようだった。

だがハルさんはごく普通の主婦だ。彼女は人間誰しもが持つ欲望や、好奇心の象徴的な存在として描かれている様に思える。果たして小人たちはうまく逃げられるのだろうか？

僕は思う。言葉は通じ合えるのに、なぜ人は人を迫害し続けるのだろう。人種間、宗教間の争いは，一体いつまで続くのだろう。

本作の監督はスタジオジブリのいちスタッフだった人である。宮崎駿氏は世代交代を考えているのだと思った。次の世代にジブリを引き継いでほしいと願っているのだろう。

この作品でちょっと気になるのは、充分続編を作る事が可能なストーリーである事だ。アリエッティー家はあの後どこへ行くのか？そして同じ種族である少年スピラー。彼のキャラクターも本作で全て語り尽くしたとは到底思えない。まだ何かとっておきのエピソードを持っていそうな少年だ。そして病気療養中の少年、翔君。彼のその後は？

それらは語られないまま、本作はあっさりと終わる。これでは消化不良だ。

スタジオジブリは今まで続編という物を作った事がない。しかしだ。もし宮崎駿氏が本気で世代交代を考えているのなら、本作こそ続編を作るべきである。

なお最後に、もし私がカントクでこのアニメ作品を実写で撮るとしたら、アリエッティは蒼井優以外あり得ないし、父親役はリーアム・ニースンしかあり得ないと思う。まぁ、それは僕の夏の夜の夢ということで……

（注　原作は五巻までのシリーズ物になっているそうである。やはり続編を作るべきだと重ねて要望したい。）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　米林宏昌

主演　　志田未来、神木隆之介、大竹しのぶ

製作　　２０１０年

上映時間　９４分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=BZqVL8ryhJQ

２０１０年8月２３日鑑賞

＊＊＊時空を超えた、ぷりんの味＊＊＊

全然期待しないで観に行ったら、これがおもしろいのなんの。よく笑いました。そして泣きどころあり、感動有り、最後にはホロリ、とさせてくれる極上のエンターティメント作品に仕上がりましたね。

江戸時代のお侍、その名は木島安兵衛。彼は偶然にも現代にタイムスリップしてしまいました。彼はシングルマザーのひろ子とその息子，友也君と出会います。行くあてのない木島安兵衛は、ひろ子たちの家に身を寄せます。彼は、世話になった代わりに、武士としては本来やるべきではない「家事」を引き受ける事になります。そこで彼の隠れた才能が花開きました。何とプリンやケーキをものの見事に作ってみせたのでした。そこで彼は勧められてケーキ作りのコンテストに挑む事になります。

原作は読んだ事はないのですが、これはとにかくストーリーもおもしろいし、脚本もよく出来てますね。

アイドルでもある主役の錦戸亮君の演技もよかった。

武士としての所作振る舞いが興味深かったですね。特に普通に歩く場合でも、手を腰に近い位置に押し当てて、腕を振らずに歩いています。おそらく「なんば歩き」だとおもうのですが、錦戸君、自然に演じてましたね。室内の引き戸を開ける時の所作も、とても綺麗な動きでした。

なぜこのような動きをするのか？それは侍という身分もありますが、所作そのものは古い日本の文化が生みだしたものだろうと思います。窮屈と言えば窮屈なのですが、しかし、慎み深く、礼節を重んじ、自分自身を律する所作の動きは、ある種の感動があります。

その様な奥ゆかしい「いにしえの」文化で育った木島安兵衛の生活様式を、いきなり２１世紀の日本に放り込んだらどうなるのか？

この作品、そのギャップがおもしろいのですね。

いにしえの日本の文化と現代日本の文化（木島安兵衛から見れば無節操きわまりない文化）との衝突です。そのあたりはひろ子たちとの、ハンバーガーショップでのやり取りが興味深いですよ。

そして見た目にも楽しいケーキ作り、やはり料理の中でも特にデザート、スィーツに関してはアート感覚が発揮出来る分野ですね。だから、ビジュアル的にも映画に使わない手はない。本作でも見るだけで楽しいケーキ作品がいくつも登場します。これも楽しみ。

そして、ぜひ注目してほしいのが子役の演技。眼力、セリフ回しがとても自然でした。

木島安兵衛という人物は、やがてパティシエを目指す様になります。侍魂を感じさせる、道を極めたいというその姿は、まるで求道者です。剣術を極めるのと似ているのですね。しかも彼の考えは、江戸時代に生きる武士としては、極めて開明的というか、進歩的で柔軟性に富んでいるのです。その辺りのキャラクター設定がおもしろい人物像を描き出します。

この作品はそれ以外にも、男と女はどう役割を負担していくのか？親と子の絆のつよさ、そし

て家族とは何か？と言った様なテーマが、それこそデコレーションケーキの様に盛りだくさんなのです。この夏、最も楽しませてくれる映画のひとつかもしれません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　中村義洋

主演　　錦戸亮、ともさかりえ、今野浩喜

製作　　２０１０年

上映時間　１０８分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=lO6AxCSkt1Y

２０１０年８月２６日鑑賞

＊＊＊見事に引っかかってしまいました＊＊＊

Yahoo映画レビューでの高評価に、試しに観に行ったら、何の事はない、あまりのつまらなさに、何年かぶりに途中退席しました。正直「木戸銭返せ～！」と叫びたいです。
どうやら何人かの工作員が、意図的に得点を上げる行為を行っているようです。ヤフーの方へ違反報告をさせて頂きました。これからこの映画を見ようとする方は、その事を心に刻んで鑑賞した方がよろしいかと思います。
　さて，私が退席した理由です。
キャラクターの動きがぎこちない。これは意図的なのかな？かくかくした動きです。もしかするとアリ・フォアマン監督の「戦場でワルツを」をパクったのか？　などと好意的に見ようとしたのですが、それにしては背景などの描写にも何の特徴もなく、ただ、アニメーターの技能がいまいち、という簡単な結論に達しました。
　ストーリーに関しては原作があるそうですが、抑揚がなく、一体どこの高校生の作文かな？というぐらい脚本が陳腐です。恐らく三十分もあれば説明出来てしまう内容を、一時間に引き延ばしている感じです。とにかく内容がうす～く，水っぽい。ちなみに僕が我慢出来たのは一時間が限界でした。
　すでに世の中にはクオリティの高いアニメ作品がいくつも存在します。ピクサー、一連のジブリ作品、細田守氏の作品など、すでに多くのファンが、このクオリティの高さを体験済みなのです。ああ、それなのに、まさかこの程度の出来で勝負出来ると，製作サイドはおもっているのでしょうか？
　今、日本のアニメ界のレベルの高さをご理解していないのではないか？
　ヤフーのレビューを判断基準にする場合、数百件程度のレビューでは、幾らでも点数が操作出来てしまうという悲しい現実を突きつけられた体験でした。
　ああ，入場料もったいなかった……
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆
配役　☆☆☆
演出　☆☆
映像　☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　原恵一

主演　　日本語版吹き替え　冨澤風夕斗、宮崎あおい
製作　　２０１０年
上映時間　１２７分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=mxdGUXKBLAw

２０１０年８月２７日鑑賞

＊＊＊ニッポンの農家、ひと家族の戦争＊＊＊

若松監督の作品は初めて観る。メッセージ性の強い、また大変アクの強い作品を作る人だと聞いていた。ところが……　キャメラが映しとってみせる絵が良いなぁ～。

この映画の舞台となる農村の風景がいい。山あいの緩やかな斜面に、いびつな形で作られている棚田。遠景のショットでは美しい有機的な模様となる。

日本の四季の移り変わりを示す、サクラや田園地帯の雪景色、日本ならではの美しい風景がいくつも挟み込まれる。ただメッセージだけをガンガン突き出してくる人ではなく、このような詩情を挟み込む事の出来る、絵心を持った監督さんなのだと、ちょっとほっとした。

そのような映像作家としての若松監督の絵の作り方、うまさにまず外国のメディアが興味を示したのではないだろうか。

寺島しのぶは「土臭い」女優である。それをまず見抜いた若松監督の眼力に敬意を表したいと思う。本作はそのキャスティングが見事に功を奏した。

スポーツの世界ではゾーンに入るというコトバがある。選手が競技中に意識せず体が勝手に動き、練習以上の力が出ている状態をいうらしい。その様な表現を使うなら、この作品そのものが、映画の製作過程において、ゾーンに入ってしまった映画なのかもしれない。そして誰よりも力強く周りを巻き込み、自分自身も、演技のゾーンに入ってしまったのが寺島しのぶである。

みなさんご指摘の通り、芋虫の様になってしまった夫との性交のシーンがいくつもある。

床の間に飾られた、天皇、皇后両陛下の御神影。夫が貰った勲章、額に入れられた彼の勲功をたたえる新聞記事。その前で二人は性交するのである。

そのシーンにおいて寺島しのぶは、女の体でしか語れない事を語っている様に思う。　裸電球の下で寺島しのぶが立っている。顔に移る陰影のその怪しさ。

また性交中の寺島しのぶの表情の凄みは、彼女がこの作品で初めて見せた女優としての凄みではないだろうか。

やがて彼女は夫との、食べて、排泄して、性交して、という生活に徐々に適応して行く。そして夫に対して、軍神としての勤めを果たすよう指示を出し始める。彼女が夫に対して主導権を握る様になってゆくのだ。このあたりの女性の忍耐強さ、しぶとさ、雑草の様な強さを感じさせる。

さて、本作では発達障害と思われる男性がひとり登場する。彼はあらゆる村社会の規範や、戦争という時間の中で、唯一自由な存在として描かれる。彼を画面に配置する事によって、戦争を第三者から客観的に見る視線が確保される。

シェイクスピア劇、たとえば「リア王」に出てくる道化の様な存在だ。心理学用語のトリックスターか？

ひとりの人物の死は悲劇だが、１００万人の死は単なるデータである、という言葉を聞いた事がある。しかし、その１００万のデータはひとつづつの悲劇が積み重なった結果のデータである

。
　作品中、時折，戦争における死者のデータや，物語の進行に合わせて大東亜戦争の局面がニュースの形で流される。
　大東亜戦争を俯瞰して見るのではなく、農家出身の一人の元少尉と、その妻について淡々と描かれたこの作品。
　戦争を一つの家族を通して描くその視点が，若松監督の映画に対する，そして社会に対するご自身の生き方のスタンスを表明しているのだろう。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　若松孝二
主演　　寺島しのぶ、大西信満、吉澤健
製作　　２０１０年
上映時間　８４分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=D2twzXbgOfw

トイレット

２０１０年８月２８日鑑賞

＊＊＊リラックスしてご覧なさい＊＊＊

なぜだろう？この作品を観た後は、まるで森林浴をした様な、爽やかな印象を受けた。
荻上監督の作品はどれも、観終わった後、ほんわかとした幸福感に包まれる。
　口コミで人気が広がった「かもめ食堂」
　静かなタッチで、当初は、一見、何も起こらない映画と言われた作品である。実はそうではなかったのだ、と僕は思う。内的、精神的に実にドラマチックでダイナミックな変化が起こっている作品だと思う。そして現代のメルヘンと言って良い作品だった。
　そして「メガネ」
　この作品では更に一歩踏み込み、価値観を考える映画となった。人生においての黄昏れ時、その大切さ。時間を慈しむかの様な表現がなされ、観客は哲学的な体験をする作品だった。この二作で荻上監督は映画作家としての確固たる地位を築いた。男性監督ではとても描けない世界観。そして全く新しい視点を確立したと言っていい。
　僕も含め荻上監督の新作をファンは正に待ち望んだのだ。
　前の二つの作品の完成度はあまりに高いレベルのものであり，それゆえあの二作を超える事は、並大抵の事では不可能と思える。まずテーマの選択、映画の方向を作る事自体が、大変勇気のいる作業だったろうと想像出来る。
　今回は少し荻上ファン限定作品になってしまった感じがある。独特のゆる～い感じが単に間延びしただけに感じられる部分もある。
　本作がどのような意図で作られたのかは全く知らない。単にトイレメーカーのPR映画だと決めつけてしまったら、身も蓋もない。しかし、単なる企業宣伝に終止するのではなく、ちゃんと荻上タッチを守っているのは、さすがとおもえる。
　今回の作品で初めて荻上作品に接する方には、ややしんどい部分があることは確かである。この作品でファンの選別が進むかもしれない。荻上ファンは強く支持するだろうし、これの良さが全く分からない、と酷評する映画ファンも増えるかもしれない。
　本作は冒頭部分などで説明セリフの部分が少し気になった。荻上監督なら、きっと動きのおもしろさや、映像で分かる様に語ってくれると思っていたのだが、それがやや残念。
　亡くなった母親が日本から呼び寄せた「ばあちゃん」
この人のキャラクターはやはり、もたいまさこさんだと納得。
　ばあちゃんは日本人。孫たち三人と、ばあちゃんとは言葉が通じない。だから当然ばあちゃんにはセリフもほとんどない。ただ，ひたすら無言で長回しするシーンもある。　スクリーンを見ていても、俳優たちの動きもすくなく、セリフも極力少なくしているのはよく分かる。
　家族皆での食事のシーン等はセリフも少ないし、音楽を全く付けていない。静かに静かにスクリーンの上に流れる静謐な時間。
　時折流れるピアノの調べも心地よい。

リラックスしながら僕たち観客はスクリーンをぼんやりみているだけでいい。
そんな鑑賞の仕方がこの作品にはよく似合うと思う。
あえて、そのゆるやかにながれる時間を楽しむ映画なのだ。そのツボにハマるかどうかで、この映画の好き嫌いが大きく分かれる所だろう。
餃子をみんなで作り、食べるシーンがよかったなぁ。こちらまでほっこりする。
「餃子ってクール！」
良いセリフだね。
また、エアギター選手権に出たい、と言い出す孫娘の告白のシーンでの場面転換はうまいというしかない。さすが荻上監督、こんな演出の隠し技を持っていたのか、と驚かされる。
この作品、人が人を思いやるには、いろんな形の思いやり方があるのだと語りかけているようだ。また人はそれぞれ、もっとも自分らしい行動パターンもあるということも。
まぁ、いいじゃない。ひとそれぞれ、リラックスしておやんなさい。トイレは一番本当の自分に帰れる場所なのだから。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　荻上直子
主演　　アレックス•ハウス、タチアナ•マズラニー、もたいまさこ
製作　　２０１０年　日本／カナダ
上映時間　１０９分
予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=7dZsZn53Xls

２０１０年９月２７日鑑賞

＊＊＊心の灯台はどこにあるのか＊＊＊

モントリオール世界映画祭で最優秀女優賞に輝いた深津絵里さんの演技はさすがにすばらしかった。生まれてからずっと地方の町の片隅で生き続けて来た女性を演じている。色恋沙汰からは永くご無沙汰。ふと淋しくなって、携帯の出会い系サイトで知り合ったのは茶髪の若い男。

やがて彼女は理性で押さえられない衝動の様なものに、ひと時、身を任せてしまう。日常の退屈な生活では味わえない、体の芯の部分から発光する、トキメキを感じてしまったのだろう。

ずいぶん前に「女は子宮で考える」という言葉を聞いた事がある。自分の理性と情念とのシーソーゲームは情念に傾く。

そして彼女は、そんな行動がとれる自分自身に、新たな発見をするのだ。

まさか自分がこんなに強い女だとは思わなかった。自分がこんなにも大胆に、男に走ってしまう女だとは知らなかった。いままで自分自身が知る事のなかった、新たな自分の扉を開けてくれたのは、いじけた茶髪の若い男だ。ただその愛した男は人を殺した男なのだ。

それでも彼女は殺人犯と知りながら急速に彼への愛情を深めて行く。

なぜ彼女はこんな男を愛してしまったのだろう。罪を犯したと知りながら、どうして愛を求めていったのだろう。

彼女の目からみれば、愛おしい、かけがえのない存在になりつつある男。それを失いたくないという想い。そんな感情の表現が、圧倒的な情念溢れる演技で展開されて行く。

愛に溺れて行く女を演じるその表現は、確かに僕たち観客をぐいぐい引き込んでゆく説得力があった。

深津絵里さんに劣らず、殺人犯役の妻夫木聡君の演技もすばらしかった。役作りのため解体業者でアルバイトもしたと聞くが、本当に肉体労働をしている若いアンちゃんにしか見えないのだ。

髪を茶髪に染め、少し背を丸めた歩き方。傷ついた様な眼差し。病弱の祖父を病院に送る、意外にも甲斐甲斐しい一面も見せる若者である。

人間は一面だけじゃない。悪人の様な善人もいるし、善人づらした悪人もいる。人間の世は分かりにくい。だからこそ人間の心を見つめて行く事は面白い。

李相日監督は前作「フラガール」であらゆる映画賞を総なめにした。その次回作が、まさかこの様な人間のダークサイドを描く作品になるとは予想もつかなかった。それは良い意味で、見事なまでに観客を裏切り、突き放し、新たな李監督の才能を見せつけられ、はっとしてしまうのだ。

作品後半にかけての息苦しくなる程の人間臭い映画表現は本当に見応えがある。

なんといっても灯台のシーンが良かったなぁ。あのロケーションはとにかく一見の価値有り。この映画を一言で象徴するような風景なのだ。

殺人犯と，彼を愛してしまった一人の女性。その二人が逃げ込んだ場所は、殺人犯が子供の頃

、心に刻んだ灯台だった。彼はこの場所で帰ってくるはずの母親をいつまでも待った。だが母親は彼を置き去りにした。彼は灯台の明かりを信じて待ち続ける。母の帰ってくるのを信じて、いつまでも待ち続ける子供の心境は、どんなに心細かった事だろう。灯台のライトは回転している。一定の周期で徐々に明るくなり、こちらを真昼の様に照らし、そして明かりは去り、再びあたりは暗闇につつまれる。

　そういう人間の深い心象風景を描く画が撮りたい、という李監督の執念、怨念の様な熱い想いを、僕たちはスクリーンで観る事が出来る。

　人間を救ってくれる灯台の明かりは何処にあるのだろうか？

　僕たちはその灯りを見つける事は出来るのだろうか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　李相日

主演　　妻夫木聡、深津絵里、岡田将生

製作　　２０１０年

上映時間　１３９分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=lw-o2Pcivpk

THE LAST MESSAGE 海猿

２０１０年１０月１日鑑賞

＊＊＊カンナさん、あんたは最高の「バディ」だ＊＊＊

大ヒットシリーズ「海猿」が何と３Dになるとの事で観に行って参りました。結論から言ってしまうと本編自体に十分魅力があるから、あえて3Dにする必要はなかったかなという印象。

「海猿」シリーズの良い所は、そのストーリーのシンプルさ。映画の王道を行っているという所でしょうか。ただ人を救う。それに特化した映画なんですね。

その緊迫感の演出はほんとにお見事です。海洋スペクタクル映画としても充分楽しめる映画に仕上がってますね。

更に今回は主人公が奥さんと生まれたばかりの赤ちゃんを抱える、家族の物語という側面もあります。

危険な遭難現場に向かう主人公、仙崎。それを黙って送り出すカンナさん。もしかするとこれが最後の別れになるかもしれない。そんな危険と隣り合わせの仕事をする夫。

帰りを待つ若い奥さんの心情が、とてもうまく描かれておりまして、ホロリとさせられます。ある意味彼女は最高の「バディ」なんですね。

もちろんこの作品、パニック、スペクタクル映画としても魅力十分。予想外の災難が次々と襲ってきます。

そんな中、救助をする者と、救助される側との心の交流なんかも分かりやすく描かれていて、万人向きと行った所でしょうかね。

特に今回は脇役の濱田岳君の演技。光ってましたよ。これからドンドンおもしろい役者さんになっていく人だと思うので注目ですよ。

主役の伊藤英明さん演じる主人公はやっぱりカッコいいです。それも作られたカッコ良さではなく、

「俺だってやっぱり怖いよ。」

と素直に言える心の強さを持っている。

包容力があるその人間性ですね。そこに惹かれる訳です。

気負う事もなく淡々と

「これが俺の仕事だから。」

と災害現場に向かう無言の背中。

名も知れぬ海上保安官のいち隊員。

きっと今日も全国のどこかで、海を守る、人を救う無名の隊員たちが淡々と、しかし胸には熱い志を持って仕事をされている事でしょう。

そんな人達に捧げたい映画ですね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　羽住英一郎
主演　　伊藤英明、加藤あい、佐藤隆太
製作　　２０１０年
上映時間　１２９分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=60RTtOi-CHA

２０１０年１２月６日鑑賞

＊＊＊ヤマトが守りたくなる地球でいようね＊＊＊

この作品に関しては幾らでも批判出来るでしょう。正直、観ているこちらが恥ずかしくなるほど、ボロが出てくる作品でもあります。
それでも「ヤマト」は世代を超え、人を引きつける何かを持っていると思います。
その魅力は一体何処からやってくるのか？
それを探りたいと思いました。
日本人の郷愁を誘う言葉でもある「ヤマト」
ヤマトは日本のいにしえの言葉そのものであると思います。何か大らかで柔らかな響きがあるのですね。日本人のDNAというか、潔さであるとか、武士道と言った伝統まで包み込んだ言葉なのでしょう。確かに、ものすごくウエットな日本人的な雰囲気を「ヤマト」という物語は抱え込んでいます。
スクリーンに映し出される最新のVFXで作られた宇宙戦艦ヤマト。圧巻という言葉がぴったり来る映像に感激します。
ガミラス側の宇宙戦艦は原作版よりも圧倒的に緻密で良くなりました。その造形は見事の一言です。
　そんな美しい絵巻物語の様な映像を、僕はぼんやり考え事をしながら観ておりました。
　「なんでヤマトはあんな犠牲を払ってまで地球を守ったのだろう？」
　主人公、古代進を筆頭に、ヤマトの隊員たちは、なぜ自分の命を顧みず、はるばるイスカンダルへ、放射能除去装置コスモクリーナーDを受け取りにいこうとしたのか？
　まぁ穿った見方をしてみれば「ノアの箱船」みたいに、選抜した地球上の生命を載せて、どこか住める星を探して、そこに移住するという選択肢もあった訳です。
　実際、オリジナルのテレビアニメ版では、ヤマトの出発セレモニーの時、
「お前達だけ逃げ出すのか！」と乗組員がヤジられるシーンがありましたね。
　また、後に船内で小さな氾濫が起きます。住める星が見つかったので、そこに移り住んでしまおうとする乗組員たちの話しがありました。
　そのような状況に至るまでの各隊員たちの心情がとても良く表現されていました。
「ヤマト」シリーズという一連のアニメ作品を見ていると、その人間ドラマの濃密さから、ただの子供向けアニメとは明らかに一線を画す内容を感じます。
「アニメをもう子供向けとは言わせないぞ」という作り手の熱いメッセージを感じました。それがヤマトの一大ブームを巻き起こしたのだと思います。
僕を含めたあのオリジナル版を観た世代はすでに五十代です。
そろそろ頭髪の薄くなって来た方もいるでしょう。
皆さんそれぞれ会社では、部長だの、課長だの、と言った責任あるポストに就いている、その人達が正にヤマト世代な訳です。

その伝説的アニメが実写化され映画となる。僕を含め大勢の観客が思い入れと期待を込めて観に行きます。
　今回劇場で、僕は実写版「ヤマト」を観たけれど、それこそお年寄りの姿さえありました。
　アニメは立派な表現活動で、ひとつの文化なのだと、世間的にちゃんと認められる存在になりつつある、と実感しました。
　ところで、いまや人類の火星移住計画も本当に現実味を帯びてきました。そんな時代に僕たちは生きています。
　最近、僕の胸になぜかジョン・レノンの「イマジン」のメッセージが，水面の波紋の様に，繰り返し，静かに響いてくるようになりました。
～～　国境なんてない。戦いをなくそう。
　　宗教の違いだって乗り越えていけるさ。～～

次の世の中はそうなっていてほしいと思います。
僕らはヤマトの様に、この難しい時代を乗り越えていけるのでしょうか？
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆
配役　☆☆☆
演出　☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　山崎貴
主演　　木村拓哉、黒木メイサ、柳葉敏郎
製作　　２０１０年
上映時間　１３８分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=hmSBbfBduaY

２０１０年１２月２１日鑑賞

＊＊＊命を使うと書いて「使命」と読むのですね＊＊＊

２０１０年の流行語になりましたが「全て、整いました！！」という映画が本作でしょうね。まさかここまで美しい映像を見せられるとは思いませんでした。そのあまりの美しさに涙し、その見事な脚本に涙し、そのあまりに見事なキャスティングに涙しました。
日本の原風景、心の奥底の風景。
「何もかも懐かしい。」
宇宙戦艦ヤマトの沖田艦長のお言葉でしたね。きっと沖田艦長の様な戦士なら、この作品に涙するはず。
キャメラワークが美しいなぁ。
雪深い山中、幼子を抱えて逃避行を続ける一人の武士。
その人物の配置。雪景色。自然の広大さ。あまりに厳しく、だからこそ妥協を許さない美しさを見せる大自然。
厳しい自然の中で、ひとりの人間という存在のなんと言う小ささ。
ちょっと、ブリューゲルの絵画を僕は連想しました。
その小さなひとりの人間は、一抱えの荷物を大事そうに抱きながら、雪の中を歩きます。
彼は身分を明かせぬ赤穂の浪人でした。彼はある大事な使命を帯びておりました。
彼がいま胸に抱えているのは、幼子。
大石内蔵助の忘れ形見を、内蔵助本人から「生きて、生き抜いて育て上げよ」と言う、重い使命を与えられたのです。
やがて、浪人は山中でひっそりと生きて行きます。世を忍ぶ仮の姿で暮らす赤穂の浪人。その淋しい庵。これがまたいいんですよ。
これ、セットなんでしょうかねぇ。美術スタッフの頑張りがよかったなぁ。正に「侘び、サビ」の世界がそこにありました。
障子越しに漏れる薄明かり。その淡い光の陰影。
ほのかに描き出される女性の肌の美しさ。
こんな絵を誰が撮れるのか、と思って調べてみたら、テレビドラマの「北の国から」シリーズを撮った監督さんなのですね。
道理で北国の美しさをこういうふうに美しく、まるで絵巻物の様に描く事が出来る訳です。
佐藤浩市さんと役所広司さんの、すすきヶ原での決闘シーン。
ここまで美しい決闘シーンはかつて見た事がありません。
黒澤作品でもこの美しさはあり得なかった。
なお、人形浄瑠璃が、この物語の重要な進行役を務めております。
その映像が時折挟まれるんですが、これがまたいいんですね。
最近の映画は、とにかくカメラを動かさないと損だ！と言わんばかりに、アクティブなカメラワ

ークが多いのですが、はっきり言って僕の趣味ではないです。
ところが、この作品。そんなぼくの趣味に、ど真ん中のストライクを、ズドーンと打ち込んでくれた感じです。
固定カメラなんです。ほとんど。
カメラ移動も、とてもゆっくりと動く。
風景の美しさを味わう様に、いとおしむ様に、キャメラはフィルムに風景を焼き付けて行くのです。
これが映画ですよ。これこそ本来の映画なんですよ。
見習ってほしいなぁ、他の監督さんも。
こうする事によって、観客は疲れる事なく、役者さん達の素晴らしい演技に集中出来るんですね。
この作品のツボは、日本人のDNAと申しましょうか、古の武士道，その生き様をとても慎み深く描いている所です。美しく節度ある、かつての日本人の姿に感動するのです。
そして、あえて慎み深く映画作品を淡々と作ろうとする監督の姿勢。その潔さにもう涙するんですね。
　この作品の美しさはまだまだ数々ありまして、とても僕の貧相な描写力では書ききれません。何より、あなたがまずご自分の目で見て、この「日本の美」に触れてみてください。
ただ、そのあまりの切ないストーリーに、あなたの両の目は涙で濡れてしまい、この作品の美しさが味わえないかもしれません。ハンカチはお忘れなく。
　ここまで表現されたら、もうこれは降参ですね。
２０１０年も、もう年の瀬というころに、まさか、こんな傑作が発表されるとは！
今年の邦画界、話題作「告白」や「悪人」もよかった。もちろん「のだめカンタービレ」「アウトレイジ」「キャタピラー」もよかった。それらの作品と肩を並べる、間違いない今年の最高傑作のひとつ。お勧めです。
＊＊＊なお、私の主義として新作映画の総合得点は常に最高４点までにしております。あしからず。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　杉田成道

主演　　役所広司、佐藤浩市、桜庭みなみ
製作　　２０１０年
上映時間　１３３分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=eFDw6QpmhIY

ふたたび **swing me again**

２０１０年１２月２４日鑑賞

＊＊＊昔の仲間でスウィングしようぜ＊＊＊

ハンセン病を抱えたジャズオヤジと、その孫息子とのロードムービーです。前半部分はややマッタリした感じがありまして、映画としての面白さを正直あまり感じない。それでも後半からの、ジャズ仲間と出会う辺りから、俄然、この作品は輝きを増してきます。
出演している俳優さん達の年輪を重ねた顔が良いなあ。
近頃の世の流れなのだろうか、老人をテーマにした映画が多くなりました。
映画を観る。それも映画を継続して見続けているとはっきり分る事があります。
それは世の中というものの雰囲気。
この先、どういう方向へ世の中が向かおうとしているのか、と言う事が皮膚感覚として分るという事です。
今後、高齢者は、まぎれもなく世の中の主役になっていくのだろうな。そんな風に感じます。
日本と言う、機能不全に陥っている、この国を担っていくのは、実は高齢者なのだと。それほど、最近の若者に元気を感じないし、志の高さも感じなくなりました。
それは社会に取って大きな損失だと思う。
なお、ハンセン病への偏見という問題。この作品はそれを取り入れてはいますが、作品を見る限り、それを強烈に訴える手段としてこの映画を作った、という訳ではなさそうです。
病に冒され、また病と戦い、偏見とも闘いながら、それでも捨てきれなかったもの。いまは年老いた体だけど、その中でも、まだくすぶり続ける炭火の様なものが、体の奥で熱を帯びている。この作品に出てくる高齢者はそういった熱い連中なのです。いつでもジャズへの情熱の火種は消えてはいないひとたちです。この作品が描きたかったのは実はそこなのだと思います。
出演の渡辺貞夫さん、犬塚弘さんのジャズプレイもふんだんに織り込まれていて、実に聞きごたえ、見応えのある作品に仕上がっています。
僕の地元である、神戸の風景が随所に織り込まれているのも、大変うれしい作品なのでありました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
映像　☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ

監督　　塩屋俊
主演　　鈴木亮平、MINJI、青柳翔
製作　　２０１０年
上映時間　１１１分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=2jHNVYLcVj0

酔いがさめたら、うちに帰ろう

２０１０年１２月２６日鑑賞

＊＊＊何かに溺れる事もひとつの生き方かも＊＊＊

実はこの作品、かなり期待して観に行きました。久々の東陽一監督作品。しかもちょっと怪しいキャスティングなんですね。
アル中のダメオヤジ役に浅野忠信。あっけらかんとした奥さん役に永作博美。この二人のくせ者役者が夫婦役というのだから、観る前から、このキャストは絶妙だと思いました。
しかしちょっと残念な事に、脚本が若干弱い感じがしました。
それに演出も、アルコール依存症の幻覚が現れる表現などで、少しひねってやろう、と言う、作り手の気持ちが見えすぎてしまいます。
少し演出過剰な感じが、表に出てしまった感じですね。このあたり、やはり東監督の映画への、今だに衰えぬ熱い想いが、少し空回りしてしまった感じがあります。
しかし、アルコール依存症と言う厄介な病気に対して、映画と言う手法で，その心象風景や、家族ドラマを描こうとした東監督の意気込みには敬意を表したいと思います。
劇中、何度もカレーライスを”お預け”される主人公。観ているこっちも「ああ、カレーライスが食べたい」と思わせますね。
もちろんこの作品を観た後、近所のカレー屋さんへ直行しましたが……
戦場カメラマンであった主人公は、かつての戦いの風景の中で、いったい何を見てきたのだろう、何を感じて来たのだろう。そこをもっと描いてほしかったなぁ、と思います。
彼はストレスに耐えきれず、酒に溺れてしまいました。それを弱いヤツというのは簡単。でも人間、誰しも弱いものです。
僕だってかつては、朝の八時から夜の十一時まで、パチンコ台の前に座っていましたし、酒の方も、一週間にウィスキーのボトルを二本空けてました。かなりパチンコと酒の依存症気味だった訳です。そんな風に心は荒んでいたのです。
こういう経験をした方は、ぼくだけではないはずです。
人間何かに囚われていないと、逆に、心細くて、淋しくて、満たされなくて、もうどうしようもない。
そう言うダメな、人間の部分を僕は認めます。僕がそうだったから。
この作品の主人公である夫も、やはりそう言う人です。
浅野忠信演じる、ご主人のダメっぷりは良い演技だなぁ。
それをまた、何の悲壮感もなく、あっけらかんと支える奥さん役の永作博美もいいなぁ。
永作博美という女優は「女の毒の部分」をちゃんと表現出来る、数少ない女優さんだと僕は思います。良い作品、よいスタッフに恵まれれば、大化けする女優さんに間違いないと，僕は勝手に思っております。本作では、漫画家の西原理恵子さんを演じています。
作品そのものは、元戦場カメラマンの夫を描く方向にシフトしている感じがあります。もう少し永作さんの出演部分を増やしてほしかったなぁと思いますね。実に惜しい作品です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

映像　☆☆☆

音楽　☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　東陽一

主演　　浅野忠信、永作博美、藤岡洋介

製作　　２０１０年

上映時間　１１８分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=6JRsWTpekNE

ノルウェイの森

２０１０年12月２９日鑑賞

＊＊＊幸せな勘違いって出来るかな？＊＊＊

何よりもまず、予告編で見たその映像の美しさに心惹かれて、この作品を観に行ったのです。
ロケーションがとにかく美しい。草原に吹き抜けて行く風、海と岩肌の感じ、そこにたたずむ静物画の様な人物。
こんな素晴らしい風景を、映画のフィルムに焼き付けて行くという作業は、きっと監督の美的センスの良さがなければ不可能だと思います。
村上春樹氏の作品は、他の作家に比べて映像化が難しいとは全然思いませんが、世界的ベストセラー作家作品の映像化という事で、ずいぶんスタッフにとっては、ハードルが高かった事だろうと思います。
僕は原作を半分だけ読んだ段階で、この作品を観ました。だから登場人物についても予備知識があったし、ストーリーも、だいたいこんな感じというのはつかめていました。
しかし，原作を読んでない人はどうだったのでしょうね。
僕は、この作品は、原作を読んでから観た方が、より楽しめるのではなかろうかと思います。
本作がストーリーを追いかける事よりも、映像詩に近い様な美しさを追求した作品作りになっているのは明らかです。
もちろん原作にある、あのシーンや、このシーンを入れてほしかった、というのはあるけれど、どの部分を、どう解釈して映画にするのかは監督の判断です。
監督が差し出すイメージを観客は楽しめば良いし、楽しめないならブーイングをすれば良い事です。
この作品については、全く個人的な好みがはっきり別れる事になろうかと思います。
僕は好きな方です。いいと思う。美しい絵を感覚的にスクリーンでみる。その楽しみが本作にはあります。文芸作品なので娯楽性は、ほぼ「ない」と言っていいです。
アクションが好きな人はそういう作品を選んでご覧になれば良い事です。
例えれば「ベニスに死す」だとか、「真珠の耳飾りの少女」のような絵画的な美しさが好きな人。邦画では森田芳光監督の夏目漱石原作「それから」の、あのドキドキする様な映像美が好きという方にはお勧めの作品と言えます。
別な見方をすれば、まさか、このような純文学的な作品が、この２１世紀のシネコンで、よく「ぬけぬけと」上映に漕ぎ着けたものです。ほとんど奇跡的です。
これが「村上春樹というブランドイメージ」を持つ、稀代のベストセラー作家の原作でなければ，いったいどういう運命を辿ったかは容易に想像出来ます。
もし，興行収入まで狙って配給したのであれば、それは仕掛人の英雄的な覚悟が合ったはずです。
なお、作品中エロティックな表現も多々あるけれど、僕には原作の雰囲気を壊す事なく、抑制の利いた好ましい演出であったと思えました。

主人公のボク、松山ケンイチ、どこかこの俳優、とらえどころがないんですね。それによって主人公が透明性を帯びていて、観るものを感情移入させやすくしている。
あまりにも濁りを含まない、水の様な透明感溢れる演技のために、きっとこれは自分を描いてくれているのに違いない、と観る者を錯覚させるのです。
その勘違いは、映画を観る事のひとつの楽しみでもあります。村上春樹氏の、いくつかの小説に登場する主人公達の透明性。そこに読者は、自分自身を反映してくれている様な「幸せな勘違い」をする訳です。
村上春樹作品の魅力は正にそこにある、と僕は勝手に思っています。
出来れば、僕の大好きな村上春樹作品「ねじまき鳥クロニクル」も、ぜひ映像化してほしいですね。
　この作品は「ノルウェイの森」から，更に踏み込んだ精神の冒険に旅立つ様な作品です。とても幻想的な心象風景の描写が必要になってくる作品なのです。本作のトラン・アン・ユン監督ならきっとやってくれんじゃないか？と僕は「幸せな勘違い」をしております。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　トラン・アン・ユン
主演　　松山ケンイチ、菊池凛子、水原希子
製作　　２０１０年
上映時間　１３３分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=Lzl4xMxdBtU

２０１０年１２月３０日鑑賞

＊＊ある武家の算盤，そして、このくにの算盤＊＊

今年はなにか，良い時代劇に数々出会えた年だったような気がします。
この作品もその秀作のひとつだと思います。
幕末を剣の力ではなく，ソロバンという、自分の得意技で生き抜いた、ひとりの武士とその家族の物語です。
幕府の元にある各藩は、例えば，まあ地方公共団体みたいなものでしょう。
その江戸時代の地方公務員の慎ましい生活を描いた本作。
主人公は藩の勘定方に務めております。今でいえば経理課に当るのでしょうかね。彼はソロバン馬鹿と言われるほどのソロバンの腕前でした。性格も几帳面。
必要以上に藩の会計をソロバンで検算していたら、思わぬ不正を発見してしまったりします。
　まあ，彼にとっては，数字が一文でも合わなければ、生理的に気持ち悪いという、性格の現れだった訳ですが。
　下っ端役人である自分が、そんなとんでもない事実に出くわした時、どう対応するのかという見所もあります。
　僕がこの作品の演出で一番感心したのは、ソロバンを弾く、その「音」でした。
これは森田監督のこだわりなのか，それとも堺雅人さん本人のこだわりなのか。
本作での算盤を弾く音を良く聞いてみてください。
パチン，パチン，カチッ，カチッ。
一芸に達した人の「作業」というのは、それを見ているだけで、また音を聞いているだけで気持ちのよいものです。
実に澱みがない。
しかもリズミカル。
計算するという作業が着々とうまくいっている、まさにそれを「ソロバンを弾く音」で表現しているのだと思います。
将棋の棋士や囲碁の名人が盤に駒や碁石を置いていく。そのパチリと言う音がとても気持ちいいときがありますが、そんな感じですね。
　また、料理の達人達の包丁を刻む音が素晴らしかったりするのと似ております。
さらに、森田監督がただ者ではないなと思うのは、その舞台装置のこだわりです。
僕が注目したのは主人公、猪山家の台所でした。
そのディテールのリアルな事。
　装置として組み込まれた台所のたたずまい。
ここで火をおこし、飯を炊く。そして食器を洗う流しは、こちらへ。漬け物の壺はここに置かれてあって，下女はここから出入りして、等と、まさに猪山家の食生活や、暮らし向きがモロに分ってしまうのですね。

　かまど，飯を炊く釜、壺、ザル，そんな、何気ない小道具ひとつひとつが、すでに下級武士の暮らしの歴史、そのものを物語っているのです。
　当時の生身の武士が、どんなものを食し、どのような趣味を持っていたのか。どんな所で見栄を張っていたのか？
　そういう、ある武家一家の全く飾り気のないリアルな生活感が、生き生きと描かれております。
　派手なチャンバラもなく、淡々と平凡な日々を掘り起こして、映画に仕上げていく、そのケレン味のなさが何とも良いなぁ。
　こういう切り口の新しい時代劇。面白いと思います。
　堺雅人さん演じる猪山さんは、やがて自分の家の借金返済のため、まさに家計の大改革を断行します。ここで彼のセリフがキラリと光ります。
「私は生まれてくる子供の目をまっすぐにみたいのです。」
日本の政治家の皆さん、お聞きになりましたか？
あなた達は子供たちの目をまっすぐ見る事が出来ますか？
収入の何倍もの借金を、自分の家が抱えているという事実に、ひとりの下級武士は、真正面から向きあっていったのです。その態度が清々しいのですね。
　たとえ昼のお弁当を切り詰めてでも、財政を立て直すのだ、という覚悟のほど。
ひとつの家族の家計を立て直すというだけで、これだけのドラマがある。
これだけの苦労と努力がある。
　もし、これがいち家族ではなく，国という単位だったらどうなんでしょうね。
こんな事やってる場合じゃないんですよ。ニッポンは。
国の借金はどれだけあるんですか、政治家と呼ばれるみなさん。
おぎゃあ、とかわいい子供が生まれてくる。
その赤ちゃんには、生まれたときから、649万2168円也（2010年4月1日時点）の借金を背負わされているそうです。
　まっすぐ見てください。幼い赤ちゃんの顔を。
　この幕末の一下級武士の地味なお話を、映画にする意義は，正にそこにあるのだ、と僕にはそう思えてなりません。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　森田芳光

主演　　堺雅人、仲間由紀恵、松坂慶子

製作　　２０１０年

上映時間　１２９分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=2W_K0z-IHAI

太平洋の奇跡-フォックスと呼ばれた男-

２０１１年４月１日鑑賞

＊＊＊大場大尉のしなやかな闘い＊＊＊

この作品は実話をベースにしている。今までほとんど埋もれていた、語られて来なかった貴重な実話なのだ。

特筆すべきは太平洋戦争中のサイパン島での闘い、それを日米両方の視点から公平に扱い、描いている所である。米国側の将校のナレーションによって物語は展開する。

クリント・イーストウッド監督が「父親たちの星条旗」「硫黄島からの手紙」の二部作で日米両方の目線で映画を作った。本作はそれを一作で実現させようとした意欲作である。

かつての戦争映画は戦争絵巻だった様に思う。要するにアクション、ドンパチ。それが主流だった。（今でも一部の映画にはそれが見受けられる。）

しかし、いまの戦争映画の本流は、一人一人の人間が戦争という中で何を考え、どう行動したのかへ軸足が移って来ている。単なるドンパチを描くのはアクション映画に座を明け渡した。

本作に出てくる主人公、大場大尉。

映画を観る前は、軍に楯突く反戦派の将校かなとイメージしていた。

違うのだ。

あくまで彼は典型的な陸軍軍人で、お国のために命を捧げようという信念を持っていた人だ。ごくありふれた旧日本軍のメンタリティーを持っていたのである。

だから彼はサイパン島での絶望的なバンザイ突撃にも、あえて反対しないで参加するのである。むしろ彼は当初、潔く戦って死のうとさえ思っていた節があるのだ。

だが、バンザイ攻撃から奇跡的に生き残ってしまった大場大尉。ここから彼の本当の闘いが始まるのだ。

彼を見ていて思うのは、頭の柔らかい人だったのだということ。あくまで米軍と徹底抗戦と言いながらも、単純に突撃したりはもうしないのだ。

米軍の情報を得るために米軍キャンプへ偵察もするし、いざとなればこっそり侵入して物資を調達したりもする。

井上真央演じる看護婦役。彼女は当初はアメリカ兵に激しい敵対心を抱く。

「一人でも多くのアメリカ兵を殺したい」と訴える演技は井上真央の新しい一面を見せてくれる。

ヤクザ崩れの兵隊役に唐沢寿明。このキャラクターもおもしろい。軍の階級を屁とも思っていない素振りが、逆に爽やかさを感じるぐらいだ。それに対して大場大尉は彼をあえて指揮下に入れようとはしていない。

このあたりの対応も、硬直した頭の帝国軍人のそれではないのである。

彼の闘いは、あるがままの現状を冷静に受け止め、分析し、出来る範囲で抵抗し、柔らかく、しなやかに戦って行くスタイルなのだ。

そんな大場大尉に竹野内豊と言うキャスティングは、とても良くハマっていたと感じた。

　戦争映画ではあるが爽やかな余韻さえ残る、満足感の高い作品と言える。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　平山秀幸

主演　　竹野内豊、ショーン・マッゴーワン、井上真央

製作　　２０１１年　アメリカ

上映時間　１２８分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=E_9AdJruhRw

阪急電車 片道15分の奇跡

２０１１年５月５日鑑賞

＊＊小さな奇跡が一杯起きればいいなぁ＊＊

私は神戸の西の端っこに住んでいる。時折阪急電車に乗るたびに思うことがある。

昔から阪急沿線と言うと、高級住宅街が立ち並ぶ所で、宝塚歌劇団もあり、手塚治虫さんが描く様なタカラヅカ的美少女が、楚々とした佇まいでプラットホームに立っている、そんなイメージを描くのである。

あの深みのあるエンジ色の電車。シートに座ると、どことなく都会人になったようで、田舎者の私はどうも尻がこそばゆい感じがする。

実際阪急電車に乗ると、皆さんマナーもよく、どことなくハイソサエティな雰囲気が漂う。

本作はその阪急電車に乗る、八組の乗客たちのお話。

各エピソードは微妙に接点を持ちながら、ほぼ平行して語られて行く。

「片道十五分の奇跡」と銘打っている割には特に、奇跡的なことは何も起こらないなぁ。この先、何が起こってくれるんだろうとちょっと焦る。

小さなエピソードが日常生活のリアリティを持って、淡々と語られて行く。

実はちょっとじれったくなって、作品途中まで、「一体この映画のテーマは何だろう」と、むきになって、しゃかりきになって探していた。

しかし、徐々に、わかってきたことがあった。

各駅停車のゴトンゴトンと言う電車のゆったりとしたリズム。それを楽しみながらゆっくり鑑賞していけば良いのだ、と気づいた。

最初は全くのアカの他人だった八組の乗客たちは、徐々に接点を深めて行く。そこで発見することがある。

日本的な協調の精神、ゆずりあい、いたわり、他人を思いやるちょっとした心遣い。

そういうものをおもいだせば、もしかすると、いろんな所で、いろんな形で、「小さな小さな奇跡」が一杯起こり続けるかもしれない。そして、そのために必要なちょっとだけの勇気。そんなことが最後になってテーマとしてようやく浮かび上がって来た。

映画を観終わって、ほっこりとした、清々しい気持ちで映画館を後にすることが出来る。そういう作品であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　三宅喜重

主演　　中谷美紀、戸田恵梨香、南果歩

製作　　２０１１年

上映時間　１１９分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=l4e8BKOkYgo

２０１１年５月５日鑑賞

＊＊＊チャップリンに見てほしかった舞台裏＊＊＊

メイキングに限らず僕はドキュメンタリーが大好きである。以前から、小澤征爾氏とオーケストラのドキュメンタリー番組等は好んで見て来た。芸術家がどのように作品を作り上げていくのか？　それがどのように輪郭を現すのか？　その過程が面白いのだ。
小澤さんのドキュメンタリーにはピアノ協奏曲を仕上げていく過程が記録されていた。
　ピアニストの巨匠ルドルフ・ゼルキンとの打ち合わせ風景。
「ベートーベンのこの曲、この部分、跳ねるように、ハンガリー風にやりませんか？」と提案する小澤氏。
「Oh!　ハンガリッシュ！！意見が合うね！！」
思わず感激して嬉しそうに小澤氏に抱きつく、マエストロ、ルドルフ・ゼルキン。
　音楽家というのは、このように曲と取り組んでいるのだなぁと実感した。その舞台裏は実に興味深かった。
　さて本作はバレエである。
第一幕は作品のメイキング映像である。
振り付け師のローラン・プティ氏と映画監督の周防正行氏。
音楽に限らず、芸術作品の解釈というのは一人一人違う物である。
一つのバレエ作品を作る過程において、お互いの意見は食い違う。
プティ氏はバレエ界の巨人として知られる人だ。もちろんバレエと言う「舞台芸術」を演出して来た人である。方や周防氏は映画を作る側の人だ。
　映画が舞台と決定的に違うのは、編集作業によって時間と空間をあっという間に吹っ飛ばせる所にある。
　舞台上の映像の次に、いきなり広々とした公園の森の中へ視点を一瞬にして移動させたい。周防氏はそれがやりたいと言う。
　しかしプティ氏は
「屋外にするなら、この映画はなかったことにする」とかたくなに拒む。
舞台人と映画監督。二人の火花が散る。
　さて、どうなるのか、と思っていると映画は休憩に入る。
　第二幕は本編のバレエが披露される。
　ローラン・プティ氏が作り上げた、このバレエ作品「ダンシングチャップリン」はすでに初演から二十年以上経っているそうである。チャップリン映画の名場面が次々と出てくる。チャップリン大好きな映画ファンには、いろんなシーンが思い浮かんで来ることだろう。
　特筆すべきはやはりバレリーナ、草刈民代さんの美しさだ。
「街の灯」のシーンでは、思わず息をのむ様な演出の美しさが光った。作品本編がエンディングを迎えると思わず「ブラボー！」と叫びたくなる程の感銘を受けた。
　僕が劇場で鑑賞した時、実際に客席から拍手が起こった。希有なことである。
　かつてチャップリン本人は自分の演技を「コミック・バレエ」と語った。チャップリンはフィルムの上で、踊る様なつもりで、あの放浪紳士チャーリーを、華麗におもしろおかしく舞っていたのだ、と改めて気づかされる。
　元々チャップリンとバレエは関係が深い。「ライムライト」のバレエシーンはチャップリン自身が作ったシーンだと聞いている。ローラン・プティ氏はこのチャップリンのコミック・バレエ

の精神を引き継ぎ、見事な、見事な作品に仕上げていった。
　さらにそれを周防監督は本作によって、より多くの観客にこのバレエの魅力を広めようとしているのだ。
　バレエ大好きな方、チャップリン大好きな方は身逃がせない。
メイキングと本編映像を一度に楽しめる、贅沢で美しさに溢れた作品である。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　周防正行
主演　　ルイジ・ボニーノ、草刈民代
製作　　２０１１年
上映時間　１３１分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.dailymotion.com/video/xnr3xa_%E3%83%80%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%82%B0-%E3%83%81%E3%83%A3%E3%83%83%E3%83%97%E3%83%AA%E3%83%B3-dancing-chaplin-2011-trailer-suo-masayuki_shortfilms

２０１１年７月３１日鑑賞

＊＊＊大鹿村の臭いを感じてみたいなぁ＊＊＊

鹿肉を食べたことがあった様な気がする。もう何十年も昔に。ちょっと甘みがあったかなと、記憶しておりますが。

地元には地元特有の臭いっていうのがあると思うのです。本作ならば鹿肉の料理なんかの臭い。それが映画から感じられるぐらいの雰囲気を、なんとかだせないもんだろうか？　鑑賞しながらそんなことを考えていました。

以前、井上ひさしさんの「ボローニャ紀行」という本を読んだ事があります。
「音楽や演劇は、パンやチーズみたいに俺たちにとって生活必需品なんだ」という文章があります。イタリアのボローニャに住む人達はそう思っている。

日本でも泉州岸和田周辺では生活の中心にダンジリが深く根付いてます。そして大鹿村では歌舞伎が生活の中心にある訳です。

こういう「地域の文化」を生活の根っこに持っている場所は今や絶滅危惧種のような存在です。淋しいことだと思います。

さて、この作品、原田芳雄さんの遺作ということで話題になっている。出演している役者さん達もシブい人が多いですね。石橋蓮司さん、岸部一徳さん、佐藤浩市さん、松たか子さん、それに三国健太郎さん。女優陣では珍しく大楠道代さんが出ている。これだけ癖のあるアクの強い俳優さん達を束ねる監督は「亡国のイージス」等を撮った阪本順治監督です。

三百年続いている村人達が総出で行う歌舞伎興行。演じるのも村人達です。これを軸にそれぞれの村人達が抱えるウエットな人間関係が描かれて行きます。結構ベタな人情喜劇と言った所でしょうか。

原田芳雄さん演じる主人公は鹿肉を食べさせる食堂の主。この人も、もちろん歌舞伎を演じる訳です。

原田さん、実に楽しそうに演じているのがスクリーンから直に伝わってくる様でした。劇中劇の歌舞伎でも、たいした大見得を切る芝居を生き生きと演じてみせてくれます。この作品のハイライトですね。

石橋蓮司さんは「今度は愛妻家」でのオカマ役が最高に面白かっただけに本作ではやや食い足りない感じが残念。

観終わって思ったけど、この作品に出てくる人達、みんなそれなりに幸せそうなんだよね。それに悪いヤツというのが一人も出てこない。それが作品の爽やかさにつながっているのかもしれませんね。

ただ逆に言えば、それだからこそ、善良に見える村人達個人個人の様々な思惑や、ちょっと腹黒い所なんかを少し散りばめてみても良かったんじゃないかという気もします。そうする事によってもっと映画に奥行き間が出る様な気がしますね。

本作は原田芳雄さんを筆頭に実力派ばかりの役者さんを揃えた作品です。もっと面白く、もっ

とディープに仕上げられたんじゃないだろうか？　欲張り過ぎですかね？
　でもとても爽やかで、好感の持てる映画であることは間違いないので、興味のある方はご覧になることを是非お勧めします。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　阪本順治
主演　　原田芳雄、大楠道代、岸部一徳
製作　　２０１１年
上映時間　９３分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=BIMOKZaoHQ4

はやぶさ/HAYABUSA

２０１１年１０月６日鑑賞

＊＊＊ニッポンと日本人にいま一番必要なこと＊＊＊

それは夢とロマンなんだと思う。日本列島を引きちぎる様に震災が襲った。原発はブッ壊れ、おまけに毎年首相はリストラされ、はっきり言って満身創痍な日本という国。
その国にたった２メートル四方の四角い機械の固まりが、かすかに夢を与えてくれている。それが「はやぶさ」と言う機械である。
そう。あくまでも機械部品の集合体に過ぎない。
そこにボクタチは夢を見る。ロマンを感じる。
この作品は「はやぶさプロジェクト」と言う事実を元にしたフィクションである。
はやぶさプロジェクトについては、それこそ山の様にエピソードがある。
どういうエピソードを入れ、どのエピソードを削るのか？　それは大変な作業であったろうと思われる。
　映画作品としてみた時、とても手堅い作りだなぁと感じる。
やはり、「２０世紀少年」等の大作も手がけた、堤幸彦監督の手腕が光る。
「はやぶさ」というプロジェクトの全体像を描こうとしたのではなく、ある、広報の女性スタッフを軸に「はやぶさプロジェクト」の全体像を「舞台背景」として使っているのだ。
　たとえば朝、誰よりも早くポットにお湯を入れる川淵リーダーの姿。演じるのは佐野史郎である。短いシーンだが、背中で語る様な人間像が出ていていいシーンである。
　主人公を架空の女性にしたのも正解だったと思う。
これによって観客は彼女の視点から「はやぶさ」に関わることになる。
彼女は宇宙オタクの大学院卒業生。ただし現実は古本屋でアルバイトをしているフリーター。学問だけでは食っていけないのだ。慎ましい生活をしながら博士論文をせっせと書いている。
　科学とお金、学問とお金との微妙な関係が、この作品ではよく描かれている。
何の腹の足しにもならない、小惑星の石を採ってくるという危なっかしいミッションに、国の財布の紐は固い。
来年の予算カットだけは防ごうと、悪戦苦闘する的場室長の姿。演じるのは西田敏行である。
いざ打ち上げとなれば、的場室長は近隣の漁業協同組合のおっちゃんたちと酒を酌み交わす。彼らのご機嫌を取らなければロケットは打ち上がらない、宇宙開発はできない。これが人間臭い宇宙開発の現実なのだ。
　「はやぶさ」は、これら多くの人々の協力を推進力にして宇宙に飛び出した。
　６０億キロの気の遠くなる様な旅。絶体絶命の危機を何度もくぐり抜け、地球に戻って来た。
しかし、自らは燃え尽きる運命。最後に渾身の力を振り絞って、カプセルだけを地球に届けた「はやぶさ」
何のケレン味もなく、しかしこれ以上、日本人の心を直撃し、世界中に感動を呼んだ、ドラマチックな展開はなかった。

そして華やかな成功を手にした。
その力の源は何だったのだろう。おそらくそれは、「はやぶさ」のイオンエンジンのように、かすかに、静かに、それでいて絶え間なく燃え続けている、スタッフ達の夢とロマンなのではないだろうか。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
映像　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　堤幸彦
主演　　竹内結子、佐野史郎、西田敏行
製作　　２０１１年
上映時間　１４０分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=JecEu-7T6xE

ツレがうつになりまして。

２０１１年１０月１９日鑑賞

＊＊＊わたしもウツになりまして＊＊＊

ほんとはとても重いテーマを扱った作品なのに、軽やかで清々しく、ちょっとコミカル。宮崎あおいさん、堺雅人さんの好演もあって、とても後味の良い作品になっていました。静謐な音楽もとても魅力的です。

うつ病は理解されにくい病気です。ただ怠けているだけにしか見えません。寝てばかりいるようにしか見えません。

しかし他人はそんなうつ病患者の心に、土足で上がりこんで来る。その上「頑張れ爆弾」をあたり構わず雨あられと降らせて後は知らんぷり。

これって実はうつ病患者にとっては

「早く死ね！早く死ね！この役たたずめ！！」

と言われているのに等しいのですよ。ほんとに。

辛いんです。頑張れと言われるのは。

ツレさんを暖かく守ってあげている、ハルさんの優しさがとても光っていました。

うつ病になってしまった僕から言わせてもらいたい。

「うつ病は心の風邪」なんて一体誰が言い始めたんだろう？

なんでこんな「無責任」で「心ないキャッチフレーズ」を流行らせたんだろう。

実はうつ病は一歩間違えると「死に至る病」なのです。そこの所を、わざわざ勘違いさせる様なキャッチフレーズを作ったことで、いったいどれほどのうつ病患者が追い込まれていった事か。

日本は自殺大国です。毎年三万人を超える人が自殺している。その中にはかなりの割合で、抑うつ状態、あるいはうつ病患者がいると思われるのです。
風邪だからすぐ直るんだろうとか、そんなもの気分の持ち様だ、という連中が、今だに大手を振って世の中を牛耳っている。

どんなに僕ら、うつ病患者が惨めな生活を送っているか、自分を責め続けているか、その苦しさの百分の一でも背負ってもらいたいものだと思います。

リアルなうつ病患者は辛く、暗く、厳しい生活を送ってます。それをこんなに爽やかな夫婦愛のお話に作ってくれた佐々部監督、原作者の細川サン、スタッフの方々にお礼を申し上げたい。

この作品の良いところは、誰にも受け入れられる、楽しめる作品に仕上げている所です。
真正面から鬱を取り上げると、ほんとに気が滅入るお話しになってします。そこをエンターテイメント作品として、楽しめる作品に仕上げてくれた事が嬉しいのです。これによって多くの人がうつ病について知ってくれます。

劇場には若いカップルや熟年のカップルまで来られてました。この作品はうつ病への偏見を解消してくれる力を持っています。そしてうつ病の事を大変分りやすく観客に伝えてくれます。ロングラン上映になれば良いなぁ。できるだけたくさんの人に観てほしい。心底そう思います。

　健やかなるときも病めるときも、ツレさんとハルさんのお二人なら、きっと乗り越えていけるでしょう。教会での結婚同窓会のシーンが、とても印象的でした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　佐々部清

主演　　宮崎あおい、堺雅人、吹越満

製作　　２０１１年

上映時間　１２１分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=CKw7QFw2ZzM

２０１１年１１月２６日鑑賞

＊＊＊役者より前に出ていたい三谷監督＊＊＊

三谷監督作品を観ていつも思うことは、「この人、出たがりだなぁ」ということ。
三谷幸喜は元々は舞台の脚本家です。書いた脚本は生で役者が演じる。だからある意味「舞台は役者のものだ」と言われます。
三谷さんはどうもそれが我慢ならないらしい、と思えるのです。あくまで僕の憶測ですが……
この人はとにかく、自分が書いた脚本という形で、自分が表に出たい。それこそ脚本で謳い上げたい、いざとなれば踊ってしまいたい、という方なのではないでしょうか。
となると三谷さんが映画の道へ進んでいった事もうなづける。
脚本は元々自分のテリトリーだし、その上、監督は作品の全てに関わっていい、手が加えられる訳です。たとえば、いらない部分は編集でカットしてしまえるしね。
舞台では不可能な、時間と場所の瞬間移動だって、映画では簡単。あっという間の出来事です。
さらには手の込んだアクションシーンや、特殊効果なんて映画の独壇場でしょう。
これは作品を謳い上げたくてしょうがない、自分が踊りたくてしょうがない三谷さんの性格に、本当に合ったジャンルだと思います。
　さて本作「ステキな金縛り」はその三谷ワールド全開のお話です。
　何せ戦国時代の武士のユーレイを、現代の法廷にひっぱり出して、証言台に立たせようというアイデアなのです。
　事件を担当するのは、失敗ばかりやらかしている駆け出しの女性弁護士。
　これを深津絵里さんが演じております。
　さて、ここでちょっと疑問点が……。どうでしょうねぇ、この人。昨年の「悪人」でモントリオール映画祭で最優秀主演女優賞に輝いた方です。ついに世界でもその実力が認められた、演技派女優さんです。
　その世界の演技派女優さんが、今回は結構コケティッシュな役回りを演じています。
もちろん、撮影時期が前後しているのかもしれませんが……
「悪人」の次に更に進化を遂げた深津絵里さんを見れるのか？と期待すると、実はそうではないんですね。
　そこのところは三谷監督が、作品と深津さんの役柄の上で、演技に深みを求めてはいない、という事なのでしょうね。
　その辺りがつまりは「映画は監督のものだ」という証明になっちゃう訳です。
　幾ら深津絵里さんが極上の演技を披露したとしても、最終的にそれをOKするのは監督の判断。
　深津絵里さんは結構何でもこなしてくれる、便利な役者さんではあります。今回の作品では、その便利な女優のレベルに留まってしまっているのがちょっと残念だったなぁ。
でも三谷ワールドがお好きな方、ご安心ください。三谷ファンには充分楽しめる事は間違いない作品ですよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆

演出　☆☆☆

映像　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　三谷幸喜

主演　　深津絵里、西田敏行、阿部寛

製作　　２０１０年

上映時間　１４２分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=w9A7f_dOhLs

２０１０～２０１１映画ベスト１０

２０１０年から２０１１年にかけて、僕が観た映画の中で、これは！！と思う作品ベスト１０を発表したいと思います。

選考基準です。

①スクリーンでもう一度観たい映画であること。
②DVDをコレクションしたくなる映画であること。
③上記二点を両方満たす事。

なお、期間につきましては、２０１０年の１月から２０１１年１２月までとさせて頂きます。
まずは邦画部門から発表です。

＊＊＊邦画部門＊＊＊

第一位　　「告白」
第二位　　「のだめカンタービレ最終楽章後編」
第三位　　「最後の忠臣蔵」
第四位　　「４４２日系部隊　アメリカ史上最強の陸軍」
第五位　　「ダンシングチャップリン」
第六位　　「ちょんまげぷりん」
第七位　　「武士の家計簿」
第八位　　「アウトレイジ」
第九位　　「ボーイズ・オン・ザ・ラン」
第十位　　「悪人」
次点　　「キャタピラー」

＊＊＊洋画部門＊＊＊

第一位　　「インビクタス/負けざる者たち」
第二位　　「ブラックスワン」
第三位　　「しあわせの隠れ場所」
第四位　　「オーケストラ！」
第五位　　「ミックマック」
第六位　　「月に囚われた男」
第七位　　「猿の惑星／創世記」
第八位　　「英国王のスピーチ」
第九位　　「パイレーツ・ロック」
第十位　　「スーパー８」

＊＊＊講評＊＊＊

邦画部門ですが、特にある傾向が見られました。
それはダークでダーティな内容を扱った「暗黒映画」に、とても優れた作品があったという事です。
これらが、２０１０年という年に固まって上映されたという事は、なんだかこれからの時代の流れを象徴しているかの様です。
「アウトレイジ」「告白」「悪人」それにちょっと毛色は違いますが「キャタピラー」も大変暗い内容の映画です。この中で「告白」は、脚本、キャスティング、演出、映像、音楽、ほぼ全て完璧と言える作品です。
暗くて残酷で、救い様のない状況を描いたこの作品。全く、愛という言葉が挟み込めない内容の映画であるに関わらず、もう一度観たくなってしまうのです。
中島監督はカラフルな映像を作る人として知られています。いままでプロモーションビデオ等の仕事をされていた方です。そのため、お得意の映像処理によって、作品の持つ陰湿さや、しつこい暗さを持つ「毒の部分」を吹っ飛ばしてしまったのです。正にそれは映画界に「ドッカーン」の内容でした。ここまで表現されてしまったら、もう僕は降参するしかないです。正直な所、僕は余り好きな監督さんではないのです。しかし、中島監督の圧倒的な力量に、批判の余地はないと思いました。
ゆえに一位です。
２０１０年は、暗黒映画の当り年でしたが、あえて、楽しい映画を上位にランクインさせました。「のだめ」はやはり、映画の楽しさを存分に味わせてくれますね。
また、映像美ということでは「ダンシングチャップリン」の美しさは際立っています。
そして、時代劇「最後の忠臣蔵」はスケール、映像美、脚本、キャスティングすべてに完成度が高い作品でした。
同じく時代劇で素晴らしかったのは「武士の家計簿」満足度の高い作品です。森田監督は、この作品を撮った翌年６１歳の若さで亡くなります。もっと作品を作り続けてほしい監督でした。松田優作主演の「それから」は忘れられません。
さてランキングの中で特筆すべきは「ちょんまげぷりん」と「ボーイズ・オン・ザ・ラン」でしょう。この二作品は全く僕自身予想もしていませんでした。ここまで面白い映画だったとは。
ドキュメンタリー作品である「４４２部隊」これはどうしても推したい貴重な作品です。歴史の重みが淡々と語られて行きます。
なお、「悪人」「キャタピラー」に関しては、もう一度スクリーンで観たいか？　DVDをコレクションしたいか？と問われれば、ちょっと疑問でした。そのため十位、次点という事にさせて頂きました。深津絵里さん、寺島しのぶさんの女優魂を見せ付けてくれる作品です。

さて、洋画部門。
はっきり言って、この何年か、クリント・イーストウッド監督作品以外に、評価出来る内容のあるハリウッド映画は「アバター」ぐらいでしょうか？
なぜ、イーストウッド監督は、こんなにもやすやすと傑作を「量産」出来るのか？
それも短期間のうちに。
今回僕が一位に挙げた「インビクタス／負けざる者たち」もそのうちのひとつです。
「硫黄島からの手紙」「チェンジリング」「グラン・トリノ」この監督、ほんとにあっという間に、やすやすと作ってしまうんですよね。
ハリウッドの全ての才能は、次にクリント・イーストウッド監督が何を作るか、そこに集中しているんじゃないか？そんな穿った見方までしてしまいます。
第二位の「ブラックスワン」
ナタリーポートマンのバレリーナはとても印象的でした。映画作品として、とても完成度が高いですね。
そして、久々にサクセスストーリーの王道を行く作品が生まれました。
それが第三位「しあわせの隠れ場所」です。この映画、実に爽快感があります。
観終わってすっきりした気分で映画館を後に出来ます。こういう映画を待ってたんですよね。
第四位「オーケストラ！」はちょっとドタバタ調ですが、作品の盛り上がりは「のだめ」以上です。音楽映画の逸品といえるでしょう。音楽を劇場のいい音響で存分に楽しませてくれた作品という事で第四位に推してみました。
フランス映画も健闘しています。
第五位「ミックマック」は、暗くなりがちな内容を実に巧みにコメディーとして、映画作品に仕上げてあります。
大健闘をみせたのが第六位のイギリス映画「月に囚われた男」です。ほぼ一人芝居であることを忘れてしまうような作品です。脚本がしっかりしてるんですね。そのチャレンジ精神はあっぱれでした。他に「猿の惑星」は完成度の高さが印象的でした。
選んでみて改めて思ったのは、やはり、映画を劇場で観る事の楽しさを味あわせてくれる作品。それを上位に推している自分に気がつきました。

以上、私、天見谷行人の独断と偏見に基づく、２０１０年から２０１１年映画ベスト１０でした。

映画に宛てたラブレター２０１０～１１年版

http://p.booklog.jp/book/70131

著者：天見谷行人
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/70131

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/70131

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ